
傀儡士呪架 ヴァーミリオン-朱-

秋月あきら (ししゃもにゃん)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傀儡士呪架 ヴァーミリオン - 朱 -

【Nコード】

N0934E

【作者名】

秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】

科学と魔導が繁栄した帝都エデンに、闇の傀儡士呪架が「向こう側」から帰還した。同時刻、死都東京に堕ちる 篝星。銀河追放された魔女セーフィエルが帰還したのだ。すべては復讐と愛しき人の黄泉返りのために。
たぶん縦書きのほうが読みやすいです。

プロローグ

西暦20XX年。

夜陰に包まれながらも、その大都市は燦然と輝いていた。

魔導と科学の入り乱れた街　帝都エデン。

オフィス街の明かりが消えた頃、繁華街の光は淫猥に活気付く。

この夜、若者たちはいつも以上に酒を浴び、コンビニの前に屯っている者たちが殴り合いの喧嘩をはじめ、安価なドラッグでトリップして狂乱に興じる者もいた。

本能的に『なにか』を感じていたのかもしれない。

事実、この街に棲む力あるモノたちは肌で感じていた。

中でもミヤ区にある帝都中枢　夢殿ゆめどのの住人たちは確実な『なにか』を感じていた。

来る。

夢殿の敷地内にある豪華絢爛なヴァルハラ宮殿の中で、女帝直属の部下であるワルキューレたちが動きを止めた。

また、同じ敷地内にある　名も無き大聖堂　で、永い眠りに堕ちている少女の臉が微かに動いた。

物理法則を無視して、鐘の音をミヤ区全域だけに轟かすメビウス時計台。その針が、二十四時ちょうどを指し示した。

しかし、鐘の音は鳴らず、代わりに地震が大地を揺るがしたのだ。バルコニーに出ていた絢爛の衣装を纏った女帝の躰が揺れ、咄嗟に長い腕を伸ばして手すりに掴まった。

地震はすぐに治まった。

規模は震度三程度の小さな揺れだったが、女帝の秀麗な顔には昏い翳が落ちていた。

直下型の地震は奇怪なことに、夢殿の敷地内だけを揺らしたのだ。

星が弱々しく輝く宇宙を眺め、女帝は呟く。
「夜魔の魔女……セーフィエル」と。

これと同時に、夢殿の地下で拘束されている少年は、口枷をはめられた口でにやりと艶笑した。

その少年の首や肢体は拘束具で固定され、アイマスクと一体化した手枷から伸びた鎖で天井から吊り下げられていた。

『メシア』というコードネームで呼ばれるこの少年は、『なにか』の訪れに心の底から打ち震えて悶え、鎖の音を冷たく静かな地下に響かせた。

そして、同時刻の別の場所では、強風の吹き荒れるビルの屋上から、遙か遠くを眺める者がいた。

眼に焼きつく鮮やかな紅いインバネスを羽織り、般若面 で顔を隠したその者は、空と大都市とその先の海を見つめている。

この世界に『なにか』が来ようとしていた。

来る。

第1章 還りし朱(1)

夢殿を奇怪な地震が襲った頃、東京湾の上を浮かぶ豪華客船では、海上パーティーが開かれていた。

シャンペングラスを片手に、着飾った紳士淑女がおしゃべりの華を咲かせ、楽団のメロディーに合わせて優雅なシルエットがダンスを舞う。上流階級の人々が集まっていることは、ひと目でわかる。頬を赤らめたタキシード姿の男は、女の腰を優しく抱きながら、潮風を浴びて海を眺めていた。

男は海に浮かぶ明かりに気づき、傍らの女に教えるように遠くを指さした。

客船に迫って来る眩いライト。それも一つや二つではない。ジェットスキーを引き連れた小艇が向かって来る。

ライトは客船ではなく、海面を荒立てて進む波を照らしていた。仄暗い海から伸びる危機という名の長い触手。

危機に気付いたタキシードの男は刹那、海から飛び出した触手に胸を掴まれ、その近くにいた女性が甲高い金切り声をあげた。

悲鳴を聴いた人々は眼を剥き、海から這い上がって来た幾本もの触手を凝視した。長く伸びた白い烏賊いかのような触手が、蠢きながら踊っているではないか。

触手に巻き付かれ、高く掲げられた男が短く絶叫を漏らし、人々は眼を背けながら各々に逃げ出した。

パーティー会場は一瞬にして惨劇の宴に変わってしまった。

真っ赤な鮮血が女の顔とドレスを彩り、足元に転がって来た男の生首を見る間もなく、女は触手に締め上げられ、海の底に引きずり込まれて消えた。

ひと足遅れで、妖物を追って来た艦艇とジェットスキーが到着し、客船の周りをライトで照らしながら取り囲んだ。

海上を走るジェットスキーヤーの暗視ゴーグルがなにかを捕らえ

る。

空間にできた傷が叫び声をあげた。

広がった次元の裂け目から黒い影が飛び出し、ジェットスキーが走っていた真横に水飛沫を上げて落ちた。

いつたいなにが？

次の瞬間、ジェットスキーヤーの躰に細い糸が巻き付いた。気付いたときにはジェットスキーヤーは後方に飛ばされ、操縦者を失ったジェットスキーは妖物の触手に当たって爆発炎上してしまった。焼けた烏賊の香ばしい匂いがする。

妖物が次の獲物を狙おうと触手を振り上げた刹那、その触手に海の底から奔った輝線きせんが巻き付き、触手を振り下げたと同時に海面から黒い影を釣り上げたのだ。

黒い魔鳥のごとき人影は、水飛沫を散らしながら軽やかに客船に甲板に降り立った。

逃げるのに必死だった人々が行動を忘却し、突如として現れた人影に視線を奪われた。

赤黒いローブから紅い雫がポトポトと零れ堕ちている。

血の香を纏った若者。

塩水に濡れた髪を掻き上げ、若者は艶やかな口で宣言する。

「……俺は還つて来た」

それは遙か遠い銀河から帰還したような口ぶりだった。いや、真実はもつと遠い場所と言えるかもしれない。この者は『向こう側』の世界から、空間の断ち割つて還つて来た『還り人』なのだ。

すでに艦艇は妖物への攻撃準備を整えていたが、乗客がいるために迂闊に手を出さないでいた。

そのことは『向こう側』から還つて来た若者には好都合だった。

『向こう側』で磨いた技が、『こちら側』の妖物にも通用するか、小手調べにはちょうどいい獲物だ。

血の香を放つ赤黒いローブに誘われるように、数え切れない触手が若者に襲い掛かる。

「喰うか喰われるか、貴様を喰うのは俺だ！」

絶叫する若者の右手から輝線が次々と放たれ、触手が空中で細切れにされていく。

まだ海の底で全容を見せぬ妖物の触手は、次々と海面から魔の手を伸ばし、斬られた触手もすぐに新しいものに生え変わる。これでは切りがないが、若者は余裕の笑みを浮かべていた。

「指のストレッチはおしまいだ、少し本気でいくぞ」

若者は指揮者のように両手を動かし、放つ輝線は闇色に変化した。斬り飛ばされた傷が再生しない。それどころか傷は、紫に色に変色して腐りはじめていた。

触手を斬るたびに鮮やかな血が飛び散り、返り血を浴びたロープがさらに血を吸って濃く染まる。赤黒いロープの意味はここにあり。何十本もの触手を瞬く間に切り刻み、無限とも思えた触手が海面から伸びることをやめた。

静まり返っている海面。

数秒の時間が流れ、冷たい潮風が若者の頬を撫でた。爆発した水飛沫が天を突く。

土砂降りの塩水を浴びながら、若者は妖物の本体を見定めていた。全身の触手を切り刻まれた妖物は、タワシのような格好をしており、その中心には硬いものを砕く歯が円形に並んでいた。

若者が仕留めるよりも早く、海の底から空中に飛び上がった妖物は、艦艇から撃たれたミサイルを喰らった。

妖物が空中で大爆発を起こし、甲板の上にまで血肉を四散させた。瞬時に甲板に伏せていた若者が吐き捨てる。

「クソッ、俺の獲物を……」

最後に獲物を横取りされた。悔しさが若者の口調から滲み出していた。

若者は立ち上がると同時に自分が細切れにした肉片を拾い上げ、野獣のように生肉に噛り付いた。

「こっちの肉は俺の口には合わないな」

肉片を投げ捨てた若者の顔に、艦艇からスポットライトが当てられる。

目を細める若者の顔は中高生くらいだろうか。ただ若いだけではない中性的な妖艶さを兼ね備え、深い闇を湛えた黒瞳には魔力が籠っているようだ。

スピーカー越しに若者へ質問が投げかけられる。

「お前は何者だ！」

妖物を相手に戦った若者がただの人であるはずがなかった。

若者は口も元を艶笑させた。

「闇の傀儡士　呪架しゅうか」

そう答えた呪架は艦艇から目を離し、なにかに誘われるように宇宙を見上げた。他の者も同様になにかに誘われて『それ』を魅た。

遙かな彼方から、煌く尾を引きながら堕ちて来る物体　　彗星だ。

大気圏で燃え尽きる流星が多い中、その　彗星　は確実に地上まで到達すると推測された。

煌きは煙の尾に変わり、　彗星　はついに地上へ落下した。

抉られた大地はドーム型に爆発を起こし、閃光が夜を一転させて昼に変える。

彗星　が落下した方角は死都東京。復興作業が順調に進んでいたが、あれでまた瓦礫の山と化してしまったに違いない。人々の感じた胸騒ぎは正しかった。

来た。

女帝は　彗星　の落下をベランダから見届け、そのまま想いに耽っていた。

部屋の奥から人影がそつと女帝に近づく。

振り返った女帝の瞳に映る翼を背に生やした麗人　ズイーベン。翼は鳥のような羽根で覆われ、左右の翼は白と黒の非対称の色をし

ていた。

眼鏡と一体化したイヤホンを直しながら、ズイーベンは無邪な眼差しで女帝を見据えた。

「あの隕石は突如として地球付近に現れたそうでございます」

「そっかア、なつるほつどねえー」

大人の色香を漂わす容貌とは裏腹に、女帝の口調はまるで少女か少年のようであった。

女帝は天を仰ぎ、親指の爪を噛んだ。

思考を巡らす女帝。

地球上空に突然現れたことから、ただの彗星とは考えにくい。星術師ですら、落ちる寸前に気がついたくらいだ。

ズイーベンは女帝の微かな想いを読み取った。

「なにかお心当たりが？」

「まアねー」

軽い声音で返事が返されるが、女帝が柳眉を寄せているのをズイーベンは見逃さない。

ズイーベンを含むワルキューレたちも、あれがただの彗星でないことは勘付いている。そして、女帝はもつと深いところ、核心に迫るところまで勘付いているに違いない。

女帝は宙で軽く指先を動かし、魔導の力を使って煌く線で絵を描いた。

星マークとそこから伸びる三本の線は子供の落書きのようだった。

女帝は彗星を簡単に描いたのだ。

「あの彗星は乗り物のような気がするなア」

「宇宙船ということでしょうか？」

「SFであるでしょ、ワープ航法みたいなもの。だからさ、突然現れたんじゃないかなとか言ってみたり」

「ゼクスが聞いたら喜ぶでしょう」

「だね」

ゼクスとはワルキューレのメンバーで科学顧問を務める者の名だ。

テレポートを行なえる魔導師が地球上にいないこともないが、それを乗り物に応用する技術はまだ完成していない。

「けど……」

と女帝は前置いて、言葉を続ける。

「ゼクスは複雑な思いをするかもよ」

「どうしてでございますか？」

「彼女を銀河追放した装置を作ったのはゼクスだからさ」

それは答えを導くヒントとなり、ズイーベン は 箒星 に乗って来た魔女の顔を思い浮かべた。

「夜魔の魔女……彼女が地球に戻って来たか？」

「そ、セーフィエルが還って来たんだよ、きつとね」

「まだ半世紀も経っておりません」

「だね。銀河追放したつもりなんだけど、これじゃあ日帰り旅行だよ」

約四十年前、夜魔の魔女と呼ばれるセーフィエルは、女帝に叛逆した罰として地球から追い出された。そのセーフィエルが地球に戻って来たか女帝はいうのだ。

女帝は人差し指を立てた。

「一、地球に還って来た理由はなにかなア？」

「戻って来るということ自体が目的とも考えられますが、彼女のことでしようから、他になにかあるかと思われれます」

女帝は二本目の指を立てた。

「二、 箒星 の調査は誰にさせようかなア？」

「セーフィエルが相手ならばアインが適任かと思いますが、 箒星 が落下した地点は日本の領土内でございます」

「死都東京は緩衝地帯みたいなものだから、コッソリやれば平気じゃない？」

「では、アイン不在のワルキューレの指揮及び、帝都警察と機動警察の指揮はわたくしが行ないます」

ワルキューレとは女帝直属の部下であり、アインはその最高責任

者である。

メンバーは女性だけの九人で構成され、戦闘要員や科学顧問、広報担当などに役職が分担されている。

常に女帝の傍に仕えるズイーベンは、お世話役でありインペリアルガードだ。

女帝は三本目の指を立てた。

「じゃあ三番目。 箒星 に関してもしも政府に報道陣が質問して来たら、いつものようにフィアに煙に巻いてもらってね」

「伝えておきます」

「そんじゃ、とりあえずまずはセーフィエルを探し出して目的を尋ねるのが第一だね」

セーフィエルの目的はなにか？

過去の叛逆に関することではないかと、女帝もズイーベンも危惧していた。

その危惧はズイーベンのイヤホンに受信された、新たな情報によって現実味を帯びてきた。

耳に取り付けられたイヤホンに軽く指先を当てながら、ズイーベンはその情報に聞き入った。

「 箒星 が墮ちたのは旧千代田区付近との報告が入りました」

「 あちゃー、自分の娘たちを取り返しに来た可能性大だね」

「 しかし、彼女たちのいる 裁きの門 を召喚できるのは、ヌル様とわたくしたちワルキューレのみでございます」

セーフィエルの娘たちは 裁きの門 の奥にいるらしい。その門を召喚できるのは女帝ヌルとワルキューレの九人のみ。

「 けどさ、セーフィエルなら召喚しちゃうかもよ」

相変わらず軽い口調の女帝に比べて、ズイーベンの口調は重々しい。

「アインを推薦したのは帝都を守ることよりも、セーフィエル確保を優先したからでございます。この件にゼクスも当たらせましょうか？」

「うっん、それはマズイよ。少なくとも全面的にはマズイと思う。ゼクスはセーフィエルのこと慕ってたからね」

少し前に女帝は述べている。

彼女を銀河追放した装置を作ったのはゼクスだからさ。

ゼクスという人物はセーフィエルに対して、複雑な想いが交差しているに違いない。

突如、女帝とズイーベンの躰が揺れた。

地震だ。

震度三程度の弱い地震。

すぐに地震は治まり、女帝の肩を抱いていたズイーベンが尋ねる。

「 箒星 が死都東京に落ちる前にも同じような地震がございましたが?」

「『メシア』クンがセーフィエルを感じて暴れてんじゃない? 彼のご先祖様だもん」

「ならば『メシア』の結界を強めた方がよろしいですね」
「だね」

本当にそれだけなのかと、女帝は小さな胸騒ぎを覚えていた。セーフィエルが地球に戻って来ただけなのか、それとも他になにかあるのか、確証のない不安感が募る。

イヤホンに耳を傾けていたズイーベンがため息を漏らした。

「セーフィエルとは別件なのですが、気になる事件がひとつございます」

「にやに?」

「東京湾で巡視艇に追われていた妖物が、海上パーティーを行っていた客船と遭遇してしまったそうですございます」

「案外普通の話だね。そんで気になる点は?」

妖物が帝都の街で暴れることは多々ある。それが海の上に現場を変えただけの話だ。

「客船には帝都の権力者も多く出席しており、妖物を追っていた海上保安部隊との通信は途絶えました」

「妖物に全滅させられたの？」

「おそらく違います。詳しい話は連絡が半ばで途絶えてしまった為にわかりませんが、突然現れた少年らしき人物と応戦していると連絡が入ったそうでございます」

「なんかよくわからない話だね」

「情報が錯綜しておりまして、申し訳ございません。ただ、客船とも巡視艇とも連絡が取れないことだけが確かなことのようにございます」

難しい顔をする女帝にズイーベンは話を続けた。

「テロリストの可能性も視野に入れて置いた方がよろしいかと思いません」

客船に乗っていた権力者たちを狙った犯行と妖物の襲来が重なったのか、もしくは妖物もテロリストに仕向けられたのか？

幕星 が地上に墮ちるよりも前に、ある者が『こちら側』に還つて来たことを、女帝とズイーベンがまだ知る由もなかった。

闇の傀儡師 呪架。

しかし、予兆が因果の糸で結ばれているのならば、邂逅の時は近いかもしれない。

ズイーベンが目を閉じて沈黙したことに女帝が気づいた。

「どうしたの？」

尋ねる女帝にズイーベンは思案顔をする。

「悪いお知らせがございます」

「聞きたくないなア」

「先ほどの地震は帝都全域のみに発生したものとのございます」

彗星 が墮ちる前の地震は夢殿の敷地内のみで起こった。

先ほどの地震は帝都エデンの領土内のみで起こったのだ。奇怪な地震の意味することを女帝もワルキューレも心得ていた。

「それはとても悪いお知らせだね」。アインの死都派遣はちょっと待った方が良いかもね」

地震も 筭星も、すべて予兆でしかないのかもしれない。女帝は予感していた。

第1章 還りし朱(2)

死都東京に 箒星 が堕ちて数日経った今も、この事件は日本や帝都のみならず、世界各国でも大きな関心を集めていた。

あの規模の隕石が地表に落下することは稀で、なによりも天文台が衝突の数分前まで発見できなかったことがミステリーとして話題を集めた。

しかし、 箒星 の情報が正しく一般人に伝わることはなかった。日本政府と帝都政府は 箒星 について情報を一切公開せず、 箒星 の落下地点も完全封鎖をしまっていた。これにより、憶測だけが膨らみ、突拍子もない話がネット上で流れ、隕石は実は兵器だという噂も飛び交っている。

そんな噂話も届かない帝都の外れにある山奥。人里はなれたこの場所に洋館がひっそりと建っていた。洋館の廊下を足音も立てずに歩く人影。着慣れた赤黒いローブから、歩いた道に死の香りを残す。

呪架がこの洋館を見つけ出したのは、ほんの三日前のことだった。幸運にも海の上で『金品』を手に入れた呪架は、それを元手に複数の情報屋を雇ってこの屋敷を捜し出した。正確には屋敷を見つけたのは情報屋ではない。雇った情報屋を介して、手紙が呪架に届けられたのだ。

差出人は不明であったが、香水の匂いが微かに便箋からした。手紙に書かれた場所には洋館があった。けれど、これが本当に探している屋敷なのか呪架にはわからない。そこで情報屋に詳しく屋敷について調べさせたところ、二重三重の偽造工作を抜けた先に、屋敷の所有者として姫野アキナという女社長の名前が挙がった。

もしかしたら、手紙の差出人の正体もその女かもしれないが、呪架にとって聞き覚えのない名前だった。この人物がどのように呪架に関わっているのか？

疑問の解決には姫野アキナとの接触が必要だったが、『こちら側』に還って来た呪架は誰も信用していなかった。そのため、姫野アキナとの接触は避け、呪架は直接屋敷に赴いて調べることにした。

そして、呪架はひと目、屋敷を見て確信した。

それから三日間、呪架はこの屋敷で寝泊りをしている。

食堂のテーブルに着き、呪架は台所の棚の中にしまつてあつた缶詰を開けた。

シーチキンだ。

缶詰を鼻に近づけると、塩と魚の香がした。

そして呪架はシーチキンを指で摘んで口に運ぶ。

「物足りない味だな」

『向こう側』の味に慣れてしまったためか、『こちら側』の物はなにを食べても物足りなさを感じてしまう。

缶詰の賞味期限が数年過ぎていることは隠し味にはならなかったようだ。

台所に残されていた食料はすべて賞味期限が切れており、製造年月日を確認すると全て十年以上前だった。つまりそれは一〇年ほど前まで、この屋敷に誰かが住んでいたことになる。

呪架と同じ血を引く者が住んでいた可能性は高い。

なぜならば、この屋敷全体は目に見えない力に守られており、玄関は硬く閉じられていたが、呪架は難なく屋敷に入ることを許された。理由は呪架が一族の血を引いていたからだ。

軽い腹ごなしをした呪架は食堂を出て書庫に向かった。

書庫は二階建ての屋敷の一階にあり、何万冊もの本が部屋を埋め尽くす本棚に収納されている。

ここにある本を片っ端から調べ、おそらくこれらは先祖が残した資料だと思われた。少なくとも娯楽ではないように思えた。

思うという推測の域を出ないのは、呪架が本を読むことができないからだ。

呪架が『向こう側』に連れ去られたのは一〇歳にも満たない頃。

サバイバル生活をしていた『向こう側』では、教育機関で学ぶような知識は望めなかった。

しかし、それがここにある本を読めない理由ではない。

呪架は幼い頃から読書家であった。それは学業にも反映され、学校での成績もトップクラスだったことから、飛び級を重ねた結果、『向こう側』以前の最終学歴は高校在籍だ。

ここにある本を読めない理由は、書物があらゆる言語で書かれていたためだ。中にはラテン語や古代ヘブライ語で書かれた書物もある。

それでも呪架は本の中身を一冊ずつ確認し、昨日、偶然にもある物を見つけたのだ。

本の一冊がスイッチになっており、割れた本棚の間から隠し階段が現れ、それは地下室へと続いていた。

地下で呪架が見つけたのは研究室だった。

化学めいた実験器具のフラスコやビーカーをはじめ、棚には薬品に漬けてある植物や生物が見つかった。

ここで呪架が見つけた一冊の本が、書庫にあった本などの謎を解き明かすヒントになっていた。

数ある書物の中でも、比較的新しい装丁の日記帳。それは日本語で書かれていたのだ。

過去に誰かが残した日記を読みながら、呪架は書物の多くが魔導関連の物であると知った。そういえば、挿絵の中に魔術めいた図形のような物があった。

昨晚のうちに呪架はその日記をすべて熟読し、自分が必要としていた多くの知識を得た。

日記は呪架の父 愁斗が残した物だったのだ。

内容は主に闇の傀儡士と傀儡に関してのことだった。他にも同じ筆跡の資料がいくつか残っていた。

それによると、傀儡士は専用の傀儡を使用することにより、持っている力以上の力で戦うことができる。つまり、傀儡とは傀儡士の

技を増幅させる装置ということになる。

中でも呪架の興味を惹いた内容は、愁斗が単なる戦闘のために傀儡を作っていたのではなく、ある目的のために用途の異なる傀儡を作ろうとしていたこと。

ヒトの器を造る。

愁斗は殺された自分の母を蘇らせるために、魂を加工する術と、魂を移す器を造ろうとしていたらしい。それを知った呪架は衝撃を受けた。

呪架が求めていたことを、過去に父が同じように成し遂げようとしていたことを知り、父が自分と同じような境遇にあったことも驚きだった。

資料の中のひとつ ジュエル 法についての記述。呪架の祖父である蘭魔が考案した 闇 を原材料にする傀儡製造法を基礎として、当時の蘭魔の共同研究者が考案した ジュエル 法によって、死者の黄泉返りを実現する。

魂 \equiv アニマを結晶化したものを ジュエル に加工して、それを傀儡に取り付けるという方法。これこそ呪架の求めていたものである。

親子二代に渡って母を殺されていた。これは因果だろうか？

愁斗の母 呪架の祖母がどのように殺されたのかは、呪架の手元にある資料だけはわからない。けれど、呪架は自分の母が殺される瞬間を目の当たりにしていた。

白と黒の色違いの翼を持った女が、母 エリスの胸に手を突き刺し、そのまま心臓を抉られたエリスは朱に染まって死んだ。

死に際に自分に向けた母の顔が、安らかだったことを呪架は覚えている。

未だにあのときの殺人者が誰だったのか、何の目的で母を殺したのか見当も付かない。

ただ、母が死んだとき、呪架は闇の傀儡士として覚醒め、恐ろしい闇 を世界に解き放った。

呪架の放った 闇 は、叫び声をあげながら黒い風となって吹き荒れた。それはまるで呪架の心を写しているようだった。

闇 は殺人者の手に巻き付き、そのまま殺人者を呑み込もうとしたが、殺人者の放った神々しいまでの光に 闇 は脅え、術者である呪架に襲い掛かって来てしまった。

結果として、当時の呪架には 闇 を操る技量がなく、 闇 に捕らえられて『向こう側』へと連れ去られてしまったのだ。

力の至らなかつた自分を呪架は悔やんだ。

『向こう側』での生活は『こちら側』の常識を逸脱し、呪架は死に物狂いで生き延びた。そのことによつて、呪架の闇の傀儡士としての技は、身を守る術として自然と修練された。

そして、呪架はついに傀儡士としての業で、空間を断ち割つて『こちら側』に還つて来たのだ。

『向こう側』で過した時間は推定五年ほどと考えていたが、どうやら『こちら側』とは時間の流れが違うらしく、『向こう側』に連れ去られてから約一〇年もの月日が流れていた。

『こちら側』に戻つて来た呪架のすべきことは、母を殺し、自分の運命を奈落に突き墮とした者への復讐。今の呪架にはそれを成し遂げる力があると自負していた。

そして、母の黄泉返りという新たな目的もできた。

さつそく呪架は傀儡づくりを学ぼうとしたが、作業は思うようにはかどらなかつた。できないことへの焦りが募る。幼い頃の栄光が今も心に染み付き、できないことが恥に思えるのだ。

材料のほとんどは屋敷の中に残されていたが、傀儡づくりは呪架にとつてゼロからの作業である。

生まれたときから離れ離れだった父が、実力のある傀儡士だったと母に聴いたことはあつた。けれど、会つたこともなければ、当然傀儡士としての技を教えてももらつたわけでもない。

呪架の技はすべて死の淵で自ら編み出した業。

傀儡づくりを教えてくれる者は誰もいない。

手元に残された資料だけが頼りだが、本物の傀儡すら見たことのない呪架には頼りにならない資料だ。

傀儡づくりは失敗の連続であり、日を増すごとに呪架は自暴自棄になっていき、屋敷にあった割れ物などに当り散らした。それでも呪架が傀儡づくりを諦めなかったのは執念。『向こう側』での地獄の日々から考えれば他愛もないこと。

復讐心と母への愛だけが呪架を支えた。

希望の光の代わりに灯るのは朱色の炎だった。

第1章 還りし朱(3)

数日のときが経ち、屋敷での生活も慣れてきた。

傀儡づくりは依然として上手くいかず、呪架は憂さ晴らしも兼ねて屋敷を出た。

陽はまだ頂点まで昇っていないが、燦然と輝く光が眼には眩しい。見通しの悪い森の中に足を踏み入れた呪架は耳を澄ます。

風に揺れる木の葉のざわめき。

小鳥のさえずり。

動物の足音。

呪架の手が素早く動き、輝線が指先から放たれた。

傀儡士の技のひとつ。氣を練ることにより、細い妖系ようしを作り出す業。

呪架の放った妖系は小動物の後ろ足に巻きついていて。

捕らえられたのは兎だ。

兎は逃げようと暴れまわるが、巻き付いた妖系は取れず、呪架は

素早く妖系を手繰り寄せた。

呪架は近くまで手繰り寄せた兎の首根っこを鷲掴みにして、機械的な手並みで兎の首に妖系を巻きつけ、一気に締め上げた。

屠られた兎は鳴き声をあげる間もなく絶命した。

今晚の食料を手に入れたが、呪架の憂さは晴れなかった。『こちら側』の狩りは張り合いもなく、死が隣り合わせでもない。呪架は物足りなさを感じた。

「クソッ！」

呪架の手から放たれた妖系が木を薙ぎ倒し、倒れた木の轟音を聴いて鳥たちが一斉に空に舞い上がった。

狩った兎を持ち帰ろうと呪架が屋敷の前まで来ると、急に肌寒さを感じて辺りを見回した。

昼間にも関わらず夜風が背中を撫でた。

呪架は兎を投げ捨てて身構えた。

久しぶりに感じる心地よいプレッシャー。

「誰だ！」

辺りを見回す呪架の耳に、静かな女性の含み笑いが風に乗って届いた。

「うふふふ……血の気の多い小僧じゃ」

玲瓏な声は呪架の真後ろからした。

すぐに呪架は腕を後ろに振ったが手ごたえはない。空を切った。

「ここじゃ」

声はまた呪架の後ろからした。

振り返り、蒼白い女性の顔が眼と鼻の先にあると視認した刹那、呪架の躰は見えない力によって後方に吹き飛ばされた。

躰をくの字に曲げながら呪架は地面に足を付き、足捌きで耐えようとしたが止まらず、思わず片手を地面に付けてどうにか躰を止めた。

そのままの姿勢で呪架は顔を上げ、猛獣のような鋭い眼つきで相手の顔を睨みつけた。

「誰だお前！」

「汝に名乗る名などない」

黒いナイトドレスに身を包み、妖々しくスレンダーなボディから伸びる脚線美。ドレスは質素で、アクセサリーはイヤリングだけだが、着飾らなくとも躰の形そのものが芸術の域に達していた。そして、鼻梁の下では蒼白い肌に紅い唇が浮かび、この世のものとは思えない艶笑を浮かべていた。

初めてあったこの人物に、なぜか呪架は親しみと畏怖を覚えた。直感的に呪架は感じたのだ。この女性の美しさは魔性のものであり、母の醸し出す雰囲気にとことなく似ていると。

夜の風を纏った女がそつと吐息を漏らした。吐息は凍える吹雪と違って呪架を呑み込もうとする。

殺意を持った相手の攻撃に呪架はすぐさま戦闘態勢を整え、吹雪

を躲すと妖糸を女の首目掛けて放った。

輝線が宙を翔け、迷いのない直線で女の眼前まで迫っていた。しかし、妖糸はその先端から凍りつき、空中で粉々に砕け散ってしまったのだ。

氷の結晶が宙を舞い、その先で女は艶然と佇んでいた。

「汝の実力はその程度のものかえ？」

その言葉は呪架のプライドに火を点けた。

「てめえなんか八つ裂きにしてやる！」

「その意気じゃ」

余裕を含んだ相手の声に呪架のやる気は増した。

左手から妖糸を放ち、すかさず右手からも妖糸を放つ。

業の切れが良い右手の妖糸が先に放った左手の妖糸に追いつき、

二本の妖糸が同時に女を切り裂こうとする。

女は左右から同時に迫る妖糸を一刹那で薙ぎ払った。疾風に迫る

妖糸をそれよりも早い動きで防いだのだ。

金属の扇を構える女は優雅に舞う。

「うふふふ、妾に速さの概念は通じぬ」

「どうやって防いだ？」

呪架の眼には女が立ち尽くしているだけに映った。それなのに妖糸は確かに弾かれたのだ。

「亜音速で動いただけのことじゃ」

「不可能だ！」

物体は運動スピードを上げれば上げるほど質量が増える。つまり、亜音速で運動をすれば、躰は重さに耐えられずに崩壊する。はずだった。

「嘘だと思うのなら試してみるかえ？」

と、女は言い残し、その場から消えたかと思うと、呪架の眼前に立っているではないか！？

呪架は目の前にいる女の顔を殴ろうとしたが、拳は宙を空振り、躰のバランスを大きく崩された。

崩したバランスに追い討ちをかけて殴られ、呪架はその反動で地面に伏した。

腕立て伏せの体勢からすぐに立ち上がった呪架の首元に突きつけられる扇。

開かれた扇の先端は研ぎ澄まされ、鋭い凶器になっていた。

扇と喉頸までの距離は一ミリもない。

死を前にしても呪架の瞳は猛獣のようにギラついていた。

それに比べて女の瞳は静観している。

女の軀に残像を見た刹那、呪架は扇の腹で頬を叩かれていた。

世界が揺れる感覚を覚えながら呪架は両膝に手をつく。

呪架は口から唾のように血を地面に吐き飛ばし、唇を舌で舐め回した。

「クソババアツ！」

呪架の手から放たれる闇色の妖系。受け止めた金属の扇を腐食させ、一瞬にして赤茶色へと変色させてしまった。

女は扇が完全に腐食する前に地面に投げ捨てた。すると、扇は地面の上で粉々に砕け飛んでしまった。

「余興にはおもしろい。じゃが、技の磨きが足りぬ」

夜風が吹いた。

呪架はまた女を見失った。

耳を済ませても足音は聴こえない。

夜風の吹く音がする。

耳をくすぐる冷たい吐息を吹きかけられ、そのとき初めて呪架は女が自分の真横にいることに気づいた。

神速で呪架は妖系を振るった。次から次へと闇雲に妖系を振るい、闇色が放射状に広がる。

残像を残しながらその場に突如現れた女は、夜月のような笑みを顔に浮かべていた。

「妾があと一刹那、亜音速に入るのが遅ければ、この腕も腐ってしまっていた」

ナイトドレスの袖が片方だけ破り取られていた。破られた布片は地面の上で腐食している。妖系で斬られた腐食が全身に達する前に、女が自ら袖を破り取ったのだ。

初めて攻撃を当てることができ、呪架はこの勝負に勝機を見出した。

次の攻撃を仕掛けようと呪架が右手を振り上げようとする。だが、腕が上がらない。それだけではない。全身がなにかに固定されてしまったように動かない。

唯一動く首を廻し、呪架は辺りを見回した。

自分の影に刺さっている数本の短剣を見て呪架は眉を顰める。

動けぬ呪架に優雅な足取りで近づいて来る女。

「影縫いじゃ。影を固定し、本体の動きを封じる技」

短剣の刺さっている位置は、影の四肢や関節を固定していた。

動くことのできる首から上を大きく揺らして呪架が咆える。

「俺を殺せるチャンスがあるのになぜ殺さない！」

幾度となく女には呪架を殺せるチャンスがあったのに、弄ばれてしまっている。

呪架は自分の技がまだまだだと自覚していた。けれど、それは『向こう側』でのこと。

『向こう側』では微生物にも劣る力しかなかったが、『こちら側』ではそれなりの自信を保持していた。

にも関わらず、この様だ。

女は慈しむように呪架の頬にそつと指先を伸ばした。

その指を呪架は噛み切ろうとしたが、頬を叩かれ失敗に終わった。

「まだ妾に逆らう気かえ？」

「俺は誰にも従わない」

「うふふふ、汝の威勢には感服する。技も認めてやろう。じゃがな、蘭魔に比べれば月とすっぽんじゃ」

その名を聴いて呪架は眼を大きく開いた。顔も見たこともない祖父の名前を女は口にしたのだ。

「お前、何者だ！」

呪架は目の前の女を初めて目にしたときから、なにか感じるものがあつた。

「妾の話を蘭魔から聞かされておらぬのかえ？」

「会ったこともない奴から話なんか訊けるか」

「会ったこともないとな？ 汝は蘭魔の嫡子ではないのかえ？」

「蘭魔は俺の祖父の名前だ」

この発言を訊いて女は破顔した。

「うふふ、そうか、彼奴の孫か……人間の時は流れるのが早いのお」

「だからお前は何者なんだ！」

「妖魔の姫、名はセーフィエルと申す。汝の曾祖母じゃ」

叛逆の罪により銀河追放をされ、
箕星 に乗って地球に帰還した者の名。

呪架とセーフィエルが邂逅した。

第1章 還りし朱(4)

敵意の消えたセーフィエルを呪架は屋敷に通した。訊きたいことが山のようにあるからだ。殺してしまつては口が聞けなくなる。

「初めから殺す気など毛頭あるはずがなかるう。汝の力量を知らんがためじゃ」

と、セーフィエルは語つた。

客人など通したことのない応接室は埃が積もっており、とても客人を迎えられる状態ではなかったが、部屋に入ったセーフィエルが吐息を吐くと、部屋中の埃は窓の外へ飛ばされてしまった。

長い足を組んでソファに座るセーフィエルの向かいには、呪架が注意を払いながらソファに腰掛けている。

「なんの目的で俺に会いに来た？」

尋ねる呪架の瞳の奥を見据えながらセーフィエルは答える。

「こちらの方角から妾の血を感じた。汝じゃ」

「曾孫の顔を見に来ただけかよ？」

「曾孫……ひとつ気になることがあるのじゃが、確かめても良いかえ？」

「なんだ？」

「じつとしておれ」

ローテーブルを乗り越えてセーフィエルの顔が呪架の唇に近づく。間近に迫つたセーフィエルの顔は、呪架の顔に触れることなく迂回した。

なんとセーフィエルは呪架の首元に歯を立てたのだ。

首に当たる柔らかい唇と、肌に突き刺さる硬く鋭い歯の感触。痛みは虫に刺された程度だった。

呪架の首から口を離したセーフィエルは血の付いた唇を艶めかしく舐めた。男ならば唾を呑み込んでしまう仕草だ。

相手の行動に嘸み付くことなく呪架はセーフィエルの言葉を待つ。

眼を深く閉じているセーフィエルの顔は、賢人が宇宙の真理を紐解く瞬間に見えた。

「やはり……妾が感じていたのはこれじゃったか」

独り言を呟いたセーフィエルに呪架が問う。

「なにがだ？」

「汝は妾の曾孫であり孫じゃ」

「はっ？」

思わず素で呪架は口から言葉を漏らした。

なぜ呪架の祖母であり曾祖母であるのか、呪架には理解ができなかった。

「汝はなにも聞かされておらぬのか？」

「なんだよ、知らねえよ」

「祖父母の蘭魔とシオンの話を聞いたことがないかえ？」

「つい先日にも名前を知ったばかりだよ」

この屋敷に残っていた資料からその名前を知った。蘭魔もおそらく傀儡士であったと思われ、シオンは愁斗の母であるということぐらしいが呪架には情報がなかった。

セーフィエルは宙を仰いだ。その瞳は愁いを帯びている。

「シオンもエリスも妾の子じゃ」

祖母と名乗り、曾祖母と名乗り、姉妹の母と名乗ったセーフィエル。その容貌は二十代後半にしか見えない。魔性の若さと美貌を持つているのだ。

セーフィエルの言葉を信じるのならば、呪架の父である愁斗はセーフィエルの子供であるシオンの子供であり、愁斗はのちに同じくセーフィエルの子供であるエリスとの間に呪架をもうけたことになる。

「近親相姦か……」

呟く呪架にセーフィエルは軽く答える。

「妾の一族では優良な種を残す為のごく当たり前の行為じゃ。下等な人間とは遺伝子の根本が異なる故、問題はなにも生じぬ」

これを聞いた呪架は急に笑い出した。

「はははっ、やっぱりな……お母さんは人間じゃなかったのか。なにか違うと小さい頃から思ってたんだ」

呪架はセーフィエルをひと目見たときから人間ではないと感じていた。セーフィエルが人間ではないのなら、その子供のシオンとエリスも人間ではない。つまり、呪架も純粋な人間ではないことになる。

ここで呪架は疑問を投げかけた。

「祖父は人間だったのか？」

「人間じゃった。のちに魔人となったがな」

祖父が人間だったならば、呪架の躰に流れている血の3分の1だけが人間の血だ。

残りの3分の2は何の血が流れているのか？

「人間じゃないお前は何者だ？」

「くだらぬ愚問じゃ。獅子が獅子であり、鼠が鼠であると同じこと。人間とは別の存在。便宜上、妖魔といふ言い方が良いじゃろう」

セーフィエルの黒瞳は呪架の瞳の奥から、なにかを読み取った。

「エリスの話を書きたくないかえ？」

「俺の知らないお母さんの話か？」

「さて、それは知らぬが、重要な話じゃ」

「訊かせろ」

呪架は息を呑んだ。

「妾の娘子たちは遠い場所におる。帝都政府に幽閉されて居るといふのがわかり易いじゃろう」

「お母さんは死んだんじゃないのか？」

「死と消滅は意味が違う。消滅といふのはアニマまでも滅びること。肉体が滅びているだけならば、黄泉返りは可能じゃが、問題は娘子たちのアニマが降霊術では呼び出せぬ、裁きの門の奥に幽閉されているといふことじゃ」

「とにかくお母さんが黄泉返る可能性はゼロじゃないことだろ？」

「蘭魔の傀儡と妾の研究していた ジュエル 法を組み合わせれば器はできる」

その ジュエル 法とは、呪架がこの屋敷に来てから成し遂げようとしていた方法だった。

しかし、それだけでは黄泉返りは不可能だ。

「じゃが、器を完成させても、肝心のアニマ 娘子たちを助けに行かねばならん。それに妾は傀儡をつくることができぬ。そこで相談なのじゃが……」

呪架は頷く。

「わかった、俺らの利害は一致してると感じた。俺のお母さんとおばの黄泉返り、そして帝都政府への復讐だな？」

「そうじゃ、そのために汝には器となる傀儡をつくって欲しいのじゃ」

呪架は復讐の相手がわかり、ジュエル 法を開発したセーフィエルとの利害も一致した。

問題はまだ呪架に傀儡をつくる技量がないことだ。

「俺もお母さんを黄泉返らせようと、この屋敷にある資料を読んで傀儡をつくろうとしていたんだ。けど俺は傀儡士の業を誰かに教えてもらったわけじゃない、傀儡づくりが上手くいかないんだ」

「うふふ、妾は汝を気に入ったぞ。妾に見せたあの技は自ら編み出したものか、あっぱれじゃな。傀儡をつくる技量はあると見たが、それを教える者がおらぬのか」

「傀儡の原動力は 闇 だと書いてあったが、その 闇 についての知識も俺にはない」

呪架の傀儡士としての技は、すべて自らが生きるがために編み出したもの。荒削りで洗練されたものとはとても言えない。今の呪架には師が必要だった。

呪架は驚きで眼を見開いた。

有無を言わせぬままセーフィエルの唇は呪架の口を吸っていた。

口を離れたセーフィエルが艶やかに微笑む。

「学んで来るが良い……傀儡士の業を」

ぼやける呪架の視界。蒼白いセーフィエルの顔が揺れている。

「俺になにをし……」

呪架の意識は闇の中に吸い込まれ、視界はゼロになった。

第1章 還りし朱(5)

水面に雫が落ちる音と共に呪架の視界は開けた。

「ここは……？」

どこだろうか？

朱色の空の下、乾いた大地が果てしなく地平線まで続いている。ビルや鉄塔など、視界を遮る物はなにもない。そこには空と大地があるのみだった。

セーフィエルの声が世界全体から聴こえる。

《汝の遺伝子に眠る先祖を顕現させる。気を抜くでないぞ、精神界で死ねば現実でも死ぬぞよ》

蒼白い月のような哄笑が世界に響き渡り、セーフィエルの声は遙か遠くの世界に消えてしまった。

残された呪架は強烈なプレッシャーを感じて振り返る。

眼に焼きつくほど鮮やかに紅いインバネスを羽織った男の姿。魔導を帯びた特有の色香を漂わせる黒瞳が呪架を魅了していた。

男とは思えぬ妖艶な笑みを浮かべて、紅い男は艶やかな声を出した。

「傀儡士の基本は妖系を操ることだ」

この声音は悪魔が乙女を誘惑するときに出す声だ。声そのものが魔性を孕み、ひと言ひと言が心の奥まで響く。

目の前の紅い男が人の皮を被った魔性の者だと呪架は感じ、不快な汗が全身から滲み出してしまっていた。

金縛りに遭ってしまった呪架の顔を輝線が掠め飛んだ。

それは紅い男が放った妖系だった。

「妖系は太さよりも質を重んじる。より大きな力を細い系に集約し、不可視に近づけることに意味がある。お前の業を私に見せる」

呪架は紅い男を見据え、己の持つ改心の一撃を放った。

闇色をした蛇のような妖系が紅い男を目掛けて飛ぶ。呪架は相手

を殺す気で放った。

が、なんと呪架の放った妖系を紅い男は片手で易々と受け止めてしまったのだ。

これには呪架も絶句した。

紅い男の掴んだ妖系は霞のように消えた。

「力を細く集約しろと言うたのを聞いておらなかったのか？」

「そんなやり方知るかよクソツタレ！」

「もうひとつ、今のお前にはその妖系は扱いきれん。早死にしたいくなくば通常の妖系で戦え、この意味はお前の躰が一番知っておろう？」

なんのことを相手が言っているのか呪架にはすぐ理解できた。

闇色の妖系を使うたびに、躰の内から滲み出す疲労感を感じていた。これがただの疲れではないと呪架は薄々と勘付いていた。闇色の妖系は呪架の躰を少しずつ蝕んでいるのだ。

紅い男は十本の指を軽く慣らした。

「通常の妖系でも十分に戦えることを証明しよう。その前に、ほんもの真物の傀儡士というものを魅せてやろう」

紅い男は十本の指を目にも留まらぬ速さで動かし、宙に奇怪な紋様を描いた 魔法陣だ。

宙に描かれた巨大な魔法陣の『向こう側』から、獣ともヒトともつかぬ恐ろしい それ の咆哮が世界に響き渡った。

世界を萎縮させる強大な力を持った存在が、魔法陣の『向こう側』にいる。

紅い男が語る。

「傀儡士は 闇 を操り、異界の者たちをもその系で操る。そして、それ を使役することができれば、あらゆる望みが叶えられると云われておる」

それ の咆哮に合わせて馬が嘶くような声が聴こえた。

「観るがいい傀儡士の召喚というものを！」

大地を踏みしめる音と共に魔法陣の『向こう側』から二角獣を飛

び出した。

ヤギか馬のような四つ足の魔獣は、人間のような長い鬣たてがみを地面まで垂らし、その黒髪の間からは二本の角が鋭く伸びていた。

二角獣は前脚の蹄で地面を掻き上げ、鼻からは熱気を帯びた息を荒立てている。

紅い男が指揮者のように手を振ると同時に、二角獣は呪架に尖った角を向けて駆けて来た。

呪架は恐れることなく妖糸を振るう。

伸びた輝線は首を振った二角獣の角に弾かれてしまった。

歯軋りをする呪架に紅い男は優雅に舞いながら助言をする。

「二角獣の角はただ硬いだけではない。魔力の源がそこにある。二流の傀儡士には到底斬れぬ」

斬れぬと言われて引く呪架ではない。

斬れぬと言われれば斬って見せると心に誓う。

呪架は指先に意識を集中させた。

一撃に魂を込める。

二角獣の角がすぐそこまで迫っていた。

「喰らえ！」

呪架の手から放たれた煌きは二角獣の角に当たり、蒼白い火花を散らした。

二角獣の動きが止まり、呪架は息を呑んで咽喉元を動かした。その咽喉には二角獣の角が突きつけられていた。

しかし、呪架とて報いていないわけではない。

一本は斬り損ねたが、もう一本は地面に転がっていた。

それを見た紅い男は大そうに拍手をした。

「ようやった。一本斬れば上等。だが、私が二角獣を操っていないければお前は死んでいたぞ」

二角獣は呪架の咽喉元に角を突きつけたまま動かない。けれど、髪髪の奥から覗く赤い瞳は呪架に凄みを利かせ、荒立てる熱い鼻息を呪架の顔に吹き付けている。紅い男が操り糸を解けば、呪架の首は

大量の血を噴出すことになるだろう。

呪架はゆっくりと後退して、額の汗を拭くと紅い男を睨みつけた。紅い男は呪架の気迫を軽く受け流し艶笑した。

「これが傀儡士の召喚術。傀儡士の技量があれば、どんな存在でも操ることができる。この二角獣はほんのお遊びだ。さて、次は通常の妖系のみで戦う戦法」

紅い男は宙に妖系で目にも見える蜘蛛の巣を描く。

蜘蛛の巣を見上げていた呪架は躰に違和感を覚えた。肢体になにかが巻き付き、強引に蜘蛛の巣まで吊り上げられ、虫のように蜘蛛の巣に捕らえられてしまった。

「なにをする気だ！」

喚く呪架に紅い男が説明をする。

「基本動作として妖系は斬る以外に、巻きつける、モノを操ることができない。そして、他にもお前を捕らえた 蜘蛛の巣 をつくることもできる。その妖系は柔らかいために、粘着性がある」

蜘蛛の巣 に磔にされた呪架は身動きひとつできなかつた。粘着性があるどころか、鋼で躰を固定されたみたいに頑丈だ。

今まで動きを封じられていた二角獣が急に暴れ狂い出した。紅い男が 操り糸 を解いたのだ。

角を斬られた二角獣は憤怒し、前脚を高く上げて嘶き、紅い男に向かって突進して来た。

「熟練した傀儡士は同時に複数の妖系を放つことができる」

そう前置きをして、紅い男は右手から放った三本の妖系を縦に払い、左手から放った三本の妖系を横に払った。

六本の妖系は二角獣を十字に斬り裂き、鮮血の雨が地面に降り注いだ。

細切れにされた二角獣の肉片を見ることもなく、紅い男は上を見上げて 蜘蛛の巣 に捕らえられている呪架の顔を見つめた。

「今はお前に見せるために遅く妖系を放った。これが私の秘伝 悪魔十字 。本来は六本同時に放つが、今回は三本ずつ放った」

その技を呪架はしかと見た。

妖糸は一本だけでも練るのが大変なのに、それを片手で三本。呪架は両手を合わせて二本が限度だ。しかも、左手から妖糸を放つことを不慣れとしている。今の呪架に 悪魔十字 を不可能だった。傀儡士のことをなにも知らないと言架は思い知らされた。自分の技はお遊びだった。召喚など知りもしなかった。

紅い男は新たな魔法陣を宙に描いた。

それ の呻き声が羽音と共鳴し、『向こう側』から蛾のシルエットが飛び出した。

蛾のような翅を持っているが、躰は灰色の毛を生やしたゴリラのようで、顔には大きく紅い昆虫のような眼が二つある。

蛾男と呼ぶべき怪物は鋭い嗅覚を働かせ、地上の血溜まりを発見した。肉塊にされた二角獣が沈む血の海だ。

鋭い爪の付いた前脚を血溜まりに下ろし、蛾男は口からストロークのような器官を出して血を啜りはじめた。

血は見る見るうちに吸い上げられ、蛾男は更なる食料を探して嗅覚を研ぎ覚ませた。

蛾男の眼が 蜘蛛の巣 に掛かった呪架に向けられる。

赤黒いローブが放つ死の香に誘われて、不気味な羽音を立てて蛾男が呪架に近づく。

躰が張り付いてしまっている呪架は逃げることもできない。

「クソッ！」

短く怒りを発する呪架。その耳に叫び声が聴こえた。

紅い男の前の空間が裂け、風を吸い込みながら叫び声をあげている。

闇色の裂け目。

その奥から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。常人であれば耳を塞がずにはいられない。

紅い男が蛾男を指さした。

「闇 よ、喰らうがいい！」

裂け目から飛び出した 闇 が荒れ狂う風のように、絶叫しながら蛾男に襲い掛かる。

闇 は触手のように伸び、蛾男の胴を掴み、足首を掴み、眼を覆い、やがて全身を呑み込んでしまった。

蛾男を呑み込んだ 闇 はそこから中を飛び交い、呪架や蘭魔が呑み込まれるのも時間の問題と言えた。

だが、紅い男が威厳を込めて命じる。

「自分の世界に還れ！」

闇 は荒れ狂っていたのが嘘のように静まり、元来た裂け目の中に還っていった。

そして、閉じられる闇色の裂け目。

世界は何事もなかったように静まり返り、二角獣の肉片や血の一滴までもどこかに消えてしまっていた。

紅い男は両手から妖系を放ち、呪架を捕られていた 蜘蛛の巣を切り刻んだ。

地面に軽やかに着地した呪架は地面から顔を上げようとしなかった。

呪架の額から零れ落ちた汗が乾いた大地に染み込む。

あの 闇こそ、呪架を『向こう側』へ連れ去ったもの。それを紅い男が見事に使役していた。

呪架の視線の先に紅い男の靴が見えた。顔を上げると紅い男が呪架を見下している。

「喰われたくなくば 闇 を決して恐れてはならぬ。逆に 闇 を恐怖させ、我が僕とするのだ。 闇 を従えてこそ真の闇の傀儡士と云える」

「俺にそれができるのか……」

不安は 闇 が付け入る材料だ。

呪架は静かに瞳を閉じ、心を鎮めた。

瞼の裏で泳ぐ残像。

『向こう側』に連れ去られたときの光景を呪架は頭を振って消し去った。

再び呪架が目を開けると、木の天井が見えた。全身を濡らす大量の汗はソファにまで染み込んでいた。

呪架は精神界から現実の屋敷に戻って来たのだ。

ソファの上に寝かされていた呪架は上体を起こそうとしたが、内臓が激しく痛み、急な咳が襲い、口の中に鉄の味が広がった。

躰が 闇 に侵蝕されているのだと呪架は感じた。これは『向こう側』にいたときからだった。このまま闇の傀儡士として戦えば、その代償として命を削ることになる。

悠長に構えている時間はない。

口の中に広がる血を飲み込み、呪架は上体を起こした。

傍らにはセーフィエルが立っているが、その表情は月のように無機質なものだっただ。

「全て見させてもろうていた。傀儡が完成したら、今後はそれで戦うのが良いじやろう。それで躰への負担は少し軽減されるはずじゃ」
しかし、呪架は召喚を知った、 闇 が操れることを知った。

まだ使い方や使役の仕方はわからず、今後の課題となったが、あの力を使うには 闇 に身を置くことになる。強力な力は大きな代償を必要とする。

その覚悟を呪架はとうの昔にしていた。

己の躰が滅びるのが先か、目的を果たすのが先か……。時は流れを止めることなく呪架を闇に導く。

第1章 還りし朱(6)

帝都の東方に位置するミナト区。

リニアモーターカーが停車するギガステーションがあることや、千葉県が東京湾を挟みあることから、帝都でも三本の指に入る大都市だ。

臨海公園を見下ろすように立っている通称ツインタワービル。ノースとサウスに分かれる一〇〇階建ての双子ビルだ。帝都でもっとも夕焼けが綺麗に見える場所としてデートスポットになっているほか、ノースビルはショッピングビルとして機能しているため、観光マップでも大きく取り扱われている。

ノースビルには帝都で一般的に買える物ならば、全て取り揃っていると言ってもいいだろう。もちろん武器も売っている。

家族連れの観光客がノースビルに正面ゲートを潜ろうとしたとき、それは起きた。

地鳴りが響き、大地が揺れる。

震度五強の地震が都市を揺るがした。

人々はすぐさまビルの中に逃げ込む。耐震性を兼ね備えたビルは意図的に揺れることにより、地震の揺れとシンクロさせて揺れを相殺する。

ビルは揺れに耐えたが、並木道の木々は根を地中に張っているにも関わらず、臨海公園の多くの木々が倒れた。

被害状況を夢殿の官邸で受けた女帝は嫌そうな顔をする。

「日に日に余震の規模が大きくなってよねー」

女帝は円卓の上に突っ伏した。地震のニュースはもううんざりだ。帝都エデンでは地震対策に世界で一番力を入れているため、被害の規模はそれほど広がっていないが、問題は地震の背後に潜むモノだと女帝は考えていた。

「地震の影響で ゆらめき が発生していなか心配だよね、まった

くもー」

一〇人掛けの円卓はその半分以上が空席で、女帝の嘆きを拾う者はいなかった。

ズイーベンは事務的に資料を読み上げる。

「今回の地震は一連の地震の中では最大規模となり、やはり震源地は帝都の外周とのことでございます」

ツインタワーのあるミナト区は帝都の最東端だった。

帝都領内だけを襲う奇怪な地震は、通常の地震ではありえないエネルギーの広がり方をしていった。外から内へ震度が軽減していったのだ。

通常、震源地は一点であるが、この地震の震源地は円の外周のように帝都を包み込んでいた。加えて、帝都以外の土地ではまったく揺れを感知していない。自然災害とは言えぬ代物だ。

円卓に着いている四人の中で、ベレー帽を被ぶり、軍服を着た凛々しい女性が立ち上がった。腰には銃ではなく、大剣が差してある。ワルキューレの最高責任者アインだ。

「この地震の原因は ヨムルンガルド結界 が引き起こしていると皆も承知しているはず。にも関わらず、他のワルキューレはどこでなにをしているのだ！」

両拳でアインは円卓を激しく叩いた。地震よりも酷い揺れが突っ伏していた女帝を襲う。

「わおっ、地震？」

女帝はまん丸の瞳で当たりを見回した。それを見て失笑する白い甲冑を着たフノンフに、アインが軽い咳払いをして牽制した。

「弛んでいるぞ！」

アインの袖を女帝が掴んで、引っ張って座るように促す。

「まあまあ、アインってばかりカリカリしないで。カルシウムはね、ミルクを飲むのが一番いいんだよー」

相手が仕える君主だとわかっていても、このときばかりは睨みつけてしまった。

「又ル様、貴女様がそのようなことだから、ワルキューレたちの気が緩んでしまうのです！」

「アタシのせいにはしないでよー。ワルキューレの最高責任者はアインじゃん」

アインは震える拳を円卓の下に隠した。

場に流れる殺気を感じてズイーベンが咳払いをする。

「ヨムルンガルド結界 は正常に作動しており、地震が起きるのはその証拠でございます。結界師としてのわたくしの見解ですが、信用できぬようであれば又ル様にお尋ねください」

ここにいるワルキューレたちに視線を注がれた女帝は深く頷いた。「ぜんぜんへーき、あいつが目覚めればアタシが一番に気づくし、

それにさ、あいつを封印してるのは ヨムルンガルド結界 だけじゃないしさ」

ヨムルンガルド結界 とは帝都全体を囲っている結界の名称。この結界に異常が現れるということは、封印しているあるモノが、なんらかアクションを起こしているということだ。

問題は ヨムルンガルド結界 が起こす地震ではない。それをアインは危惧していた。

「自分は ゆらめき を危惧しているのだ。 ゆらめき が発生すれば 闇の子 の思念が漏れる。 ヨムルンガルド結界 が揺れる原因が 闇の子 にあるのか、それとも別の要因があるのか、それすら説明できてないではないか」

それに対して眼鏡を直しながらズイーベンが速やかに回答する。

「科学的な見地からはゼクスが調査中でございますが、推論でよろしければセーフィエルとの因果関係が考えられます。なぜならば、闇の子 を封じている最後の砦はノインの魂。妹のエリスの魂もタルタロスの門 を守っております」

コードネーム『ノイン』。

セーフィエルやエリスの名前が出たことからわかるように、ノインとはシオンのワルキューレでの名前だ。

セーフィエルの存在がシオンとエリスの魂に影響を与えていると、ズイーベンが推測したのだ。

このとき、帝都政府は呪架の存在にまだ気づいていなかった。女帝はローラーの付いている椅子で後ろに滑るように移動し、円卓の上に足を乗せて腕組みをした。

「あのさー、別次元にある 裁きの門、そのさらに奥にある タルタロス にいるノインが本当に影響を受けてるとしたらさ、事態は大深刻だよな。ちょっとみんな聞いてよ、だとしたらさ、この地下にいる『メシア』クンも異常をきたすかもしれないよね。実はさつきから胸騒ぎがしてさー」

女帝は話し終わると円卓に土足で上り、会議室を飛び出そうとして、ドアの前で振り返って叫んだ。

「妹の思念を地下から感じる！」

ズイーベンは女帝にロッドを投げ渡し、自らもロッドとスピアが一体化したホーリースタッフを持って女帝の後を追う。

遅れてアインとフンフも駆け出した。

石造りの螺旋階段を滑るように下りる女帝の前に、黒い影が二つ立ちはだかった。

半裸状態に拘束具を着せられている少年 コードネーム『メシア』。

『メシア』は少年とは思えぬ艶やかな笑みで女帝を出迎えた。その背後から少女の『影』が顔を見せる。

「やあ、姉上、久しぶりだね」

女帝の声とまったく同じ声だった。そして、『影』は本当に『影』であり、本体がそこにはない。

姉上と呼ばれた女帝はもちろんこの『影』の正体を知っている。知りすぎている。闇の子 と呼ばれる双子の妹だ。

危惧されていた ゆらめき が発生し、闇の子 の思念が外に漏れ出してしまったのだ。ここにいる『影』は 闇の子 の幻影

ダーク・ファントム。

横幅が一メートルほどもないこの場所での戦闘は難しい。

この場所でも利便なのは形を持たぬ存在。

ダーク・ファントムが女帝に被さるように襲い掛かる。

柄の長いロッドを構えた女帝が迎え撃つ。

「幻影なんてアタシの敵じゃないね、光よ！」

ロッドがダーク・ファントムに当たると同時に、眼も眩む閃光が世界を包み込んだ。

ダーク・ファントムに押し倒された女帝の真上を小柄な影が飛び越えた。

「ボクは逃げさせてもらうよ」

澄んだ少年の声を発して『メシア』が螺旋階段を駆け上る。

『メシア』が引きずる鎖を女帝は掴もうとしたが、鎖は指の間を擦り抜けてしまった。

閃光が治まり、その場にいたはずのダーク・ファントムは、まさに幻影のように姿を消していた。

急いで螺旋階段を駆け上がる女帝。

上の階に辿り着いた『メシア』は、ドーム型の広い堂で足を止めていた。

ワルキューレ三人に囲まれる『メシア』。背後には女帝が立っている。

ホーリーロッドを構える女帝。

アインはホーリーソードを構え、ズイーベンはホーリースタッフを持ち、フュンフはホーリースピアを掲げた。

対する『メシア』は武器を持っていない。両手を上げて指を開いてみせる。指の一本一本に嵌められていた枷がない。

メシアが両手を素早く動かした。流れるように宙を奔る輝線。傀儡士の妖系だ。

妖系は同時に六本も放たれ、それは全てズイーベンに向けられていた。

亜音速に突入したフュンフが全ての妖系をホーリースピアで弾き

返し、アインが『メシア』の背後から首に剣を廻し、ズイーベンが呪文を唱えた。

唱えられた呪文により、『メシア』の肢体に取り付けられていた四つのバンドが互いに引き合い、前屈の格好のまま動きを封じられてしまった。

前屈の姿勢のまま横倒しになった『メシア』にズイーベンが近づく。

「次からはもっと重い枷を付けることにいたしましょう」
見下す四人の女性にメシアは毒づく。

「ボクのこと苛めてそんなに楽しいかい？ 足にも手にも枷を嵌められ、アイマスクと猿轡までされて、キミらのSM趣味にはうんざりだよ」

アインの大剣がメシアの首に突きつけられる。

「貴様に声は必要ない。口が過ぎるようであれば声帯を切ってやつても良いのだぞ、『メシア』？」

「その『メシア』って呼び名もやめてもらえるかな。ボクには慧夢えむってカツコイイ名前があるんだケド？」

本当に慧夢の声帯を切ろうと動いたアインの手を女帝が止めた。

「まあまあ、『メシア』クンはうちの大事な戦力なんだから、傷物にしちゃ駄目だよ」

「しかし……」

最後まで言わずアインは口を噤んだ。

女帝は慧夢に背を向けて歩き出しながら言う。

「ズイーベン、今度からはアタシたちに逆らったら、悶絶して死んじゃうような枷を『メシア』クンに付けてあげて」

「承知しました」

女帝の背中に頭を下げるズイーベンや、他の者たちを見ながら慧夢は言葉を吐き捨てる。

「みんな嫌いだよ」

三人のワルキューレに引きずられ、慧夢はまたあの暗い地下に封

印されるのだった。

第1章 還りし朱（7）

小柄なパーツを組み合わせ、形だけだが少女の傀儡が完成した。初めてつくった傀儡ということもあり、関節の接合部もすぐにはわかり、作り物だということがすぐにわかってしまう。それでも先代が残した素材が良いために、肌の質感や、肉の弾力は本物そのものだ。

次にこの傀儡に必要なものは、原動力となる 闇 の注入。

闇 の注入には危険が伴うらしく、つくった傀儡が壊れてしまうこともあるらしい。

呪架はつくった傀儡を抱きかかえて屋敷の外に出た。

裸のままの傀儡を地面に寝かせる。胸部の少し上に透明のクリスタルが嵌め込まれている。ここに 闇 を注入する。

柔らかな日差しを浴びる少女の傀儡から、呪架は数歩後ろに下がって気を静める。

少し離れた場所からはセーフィエルは佇み見守っている。

ここ数日、呪架は傀儡づくりだけをしていたわけではない。精神界から戻った呪架は傀儡士としての技を磨き、より高みを目指して修行を重ねた。

傀儡に嵌め込まれたクリスタルに意識を注ぐ呪架。

軽く右手をストレッチして、呪架は空間に向けて妖糸を放った。

断絶された空間の傷が唸り声をあげ、徐々に広がりを見せる。

裂けた空間の先に広がる闇。

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

闇 が世界に解き放たれ叫び声あげた。

「俺の言うことを聞きやがれ！」

怒鳴りながら呪架は指先をクリスタルに向けた。

「大人しくその中に入れ！」

闇 が呪架の命令を聞き、クリスタルに向かっているかに見えただが、クリスタルの上に来た途端、方向転換をして呪架に向かつて飛んで来た。

向かって来る 闇 を見て、呪架の脳裏に吐くほどに辛い過去の残像が浮かぶ。

朱に染まる母の幻影と、恐ろしい 闇 に連れ去られた『向こう側』の世界。

呪架の心を蝕む恐怖。

向かって来た 闇 を呪架は紙一重で避けた。

心に隙間を蝕もうとする 闇 。

悲鳴、鳴き声、呻き声、苦痛に満ちた絶叫が呪架の耳を犯す。

方向を変えた 闇 が再び呪架に襲い掛かる。

呪架は息を呑んだ。

闇 は支配するものだ。

決して 闇 を恐れてはならない。恐れは心を殺す。

絶対的な力によって 闇 を屈服させるのだ。

呪架の瞳が闇色に染まる。

全身から魔力を発する呪架。

「俺の前に屈服しろ！」 叫ぶ呪架の躰に 闇 が飛び込んだ。

闇 の強烈な一撃を腹に喰らいながらも、呪架は恐れなかった。

「俺に逆らってんじゃねえよ！」

全身から荒波のような魔力を発した呪架から 闇 を飛ばされた。

そのまま呪架は手を掲げた。

「 闇 よ、傀儡の力となれ！」

呪架が手を下げたと同時に 闇 が急落下をしてクリスタルに吸

い込まれた。

透明だったクリスタルの中で闇色が渦を巻いている。

ついに傀儡士の傀儡が完成した。

事を終えた呪架は腹を押さえながら地面に膝をついた。

「さっきの一撃でまた臓器が犯られた……」

歯を食いしばりながら呪架は立ち上がった。

呪架は完成した傀儡の傍らに膝を付き、つま先から指先、髪の毛の一本一本までをいとおしく眺めた。

闇色の渦巻いていたクリスタルはすでに純粋な透明に戻っている。闇が全身に行き渡った証拠だ。

呪架は少女の傀儡を抱え、力強く抱きしめた。

傀儡の肌は熱を帯びており、皮膚の下からは血流のようなエネルギーの流れを感じる。

この傀儡は初めてつくった試作品であるが、それでもあとはジユエル さえあれば、エリスの黄泉返りは達成される。

しかし、その ジュエル はまだ呪架の手元にはない。

エリスの魂は 裁きの門 の奥に幽閉されているらしい。

呪架はさきほどまでいたはずのセーフィエルを探した。

辺りにセーフィエルの姿も気配もない。

すぐさま呪架は傀儡を抱きかかえて屋敷中を探したが、どこを探してもセーフィエルの姿はなかった。

「クソツ、どこに行きやがった」

せっかく傀儡ができたというのに、 裁きの門 のことを知っているセーフィエルが姿を消した。

手がかりを握るセーフィエルが消えたことにより、呪架の心は苛立ちを覚えずにはいられなかった。

そして、呪架はあまりのも大胆な強硬手段を思いついたのだった。

第2章 傀儡士の血族(1)

大都市ホウジユ区は東京が死都と化したとき、それによって流れ込んで来た文化や企業が集まり、帝都でも三本の指に入る繁栄を見せている。

ホウジユには帝都に三ヶ所あるリニアモーターカーが停まるギガステーションがあり、外からの観光客の足が途絶えることはない。繁栄と共に裏の顔も大きく成長し、裏路地に一歩踏み入れれば、アンダーグラウンドの巣窟になっていることも有名だ。

高いビル郡が立ち並ぶホウジユ区でも、群を抜いて天を突いているのは、地上六六六メートルを誇る電波塔 帝都タワーだ。

今このとき、帝都タワーが見下ろすホウジユ区の繁華街が、爆発の華をいくつも咲かせ、人々を恐怖の渦へと巻き込んでいた。

硝煙の中に二人のシルエットが映った。
重武装した機動警察からシルエットにバズーカ砲が向けられた。
硝煙の中で声がする。

「コード012アクセス エネルギーフィールド 発動」
シルエットに打ち込まれたバズーカが、さらに当たりを煙に包んだ瞬間、煙の中から六本のレーザーが機動警察に照射され、車両を真っ二つにし、防護服を着ていた男の首を刎ねた。

アスファルトの焼けた臭い、肉の焼けた臭い、血の香と煙が辺りに充満した。

煙の中から再び声がする。

「コード アクセス ウィンド 発動」
二人のシルエットを中心に風が渦巻いて起こり、辺りの煙や臭いを掻き消してしまった。

そして現れる凄惨な光景。

朱に染まった大地から薫り立つ死の香。

血の海に沈む肉塊からは、その原型を知ることができないが、取

り巻く怨念たちが風を唸らせ悲愴を訴えている。

死者の叫びなどに耳を傾ける心は持ち合わせていない。

朱の大地に佇む赤黒いローブを纏った死神。傍らには白いボディスーツに身を包んだ少女が寄り添っていた。

呪架は自分たちを包囲している機動警察に向かって声をあげた。

「弱肉強食こそが世界の摂理だ。おまえたちじゃ俺の相手にならない、ワルキューレを呼べ！」

なんと大胆不敵な行動だろうか。無謀というか、軽薄な行動だ。それでも帝都中枢に突っ込むよりはマシだ。

傀儡エリスの試運転も兼ね、呪架は都市の真ん中で残虐非道な行動に打って出て、罪もない人々を次々と惨殺していった。帝都政府への宣戦布告の意味を込め、ワルキューレをおびき出すために。傀儡をつくる過程で、セーフィエルは呪架のつくる傀儡をただの傀儡ではなく、魔導兵器としての能力を与えていた。

体内の半永久的な 闇 のエネルギーを使い、コード戦術という特殊な戦闘をする。

今、エリスが着用しているボディスーツもコードで呼び出したものだ。

白いボディスーツには、ところどころ紅い華が裂いている。特にその手に装着された嘴状の鉤爪は肉を喰らった跡が残っていた。

もうすでに機動警察は呪架たちに幾度となく攻撃を仕掛け、今は睨み合いの状態に突入していた。

機動警察は有事の際に都市部での武器使用が認められているが、それでも繁華街やビル街では賠償金の問題や、ビルの倒壊などによる二次災害も考慮され、強力な武器を使用することができない。現状では呪架に歯が立たない状態だった。

「まだ血の雨が足らないのか……」

と、呪架は呟き、青空を見上げた。

なにかを思いついた呪架は口元に邪悪な笑みを浮かべた。

「コード005アクセス ウィング 起動」

呪架のコード認証に合わせて、エリスの背中から金色に輝く物体が飛び出した。それは骨だけの翼のようであった。

金色に輝く ウィング は小さなフレアを放出し、エリスの躰をふわりと宙に浮かせた。

天高く舞い上がるエリスの足首を掴み呪架も空を飛ぶ。

敵が空に逃げると思った機動警察が、一斉射撃をしようとビーム銃を呪架たちに向ける。

不敵な笑みを浮かべる呪架。

「コード012アクセス エネルギーフィールド 発動」

呪架とエリスの躰を円形のバリアが包み込んだ。

地上から逆さに雨が降るようにビームの猛攻が呪架たちを狙う。

しかし、ビームは全て エネルギーフィールド の壁に阻まれ、呪架たちにダメージを与えることなく小さな爆発を起こすのみだった。

ビームの雨が一瞬止んだ隙を狙って、呪架が エネルギーフィールド を解除してコードを唱える。

「コード アクセス メギドフレイム 一〇パーセント限定起動、昇華！」

エリスの両手から墮とされた劫火が機動警察を呑み込み、金属車両は一瞬にして熔解し、人は跡形もなく灰として空を舞った。

都市をも呑み込む勢いで紅蓮の炎を天高く燃え上がらせた。

それはまさに旧約聖書にあるソドムとゴモラを焼き尽くした炎の光景。大天使ガブリエルに墮とされた火によって、悪徳の都市は焼き尽くされて浄化させる。

呪架の想いも同じ。女帝の築き上げた愚かな世界を残らず潰したかった。

炎の光が反射して、エリスの白いボディースーツを朱色に染める。真っ赤な夕焼けのように鮮やかで美しい。

鉄筋の世界で炎は燃やすものをなくし、やがては虚しく消えてしまった。

柔らかくなつたアスファルトからは湯気が立ち昇っている。

上空にいる呪架が地上を見下しながらコードを唱える。

「コード アクセス ホワイトプレス 発動」

猛吹雪が地面を一瞬にして凍てつかせ、溶けていたアスファルトを凝固させた。

エリスと共に呪架は地上に降りて辺りを見回した。

スクランブル交差点だったこの場所にはなにも残っていない。全て灰と化して舞ってしまった。

呪架は迫り来るプレッシャーを感じて空を見上げた。

翼を生やした人がジェット機並みのスピードで飛んで来る。あのスピードで飛んでいるにも関わらず、風との衝突音がまったく聴こえない。空気抵抗を緩和しながら飛んでいるに違いない。

羽毛が舞い、白い翼を携え、白い甲冑の戦乙女が地上に舞い降りた。

手に持っているのは白銀のホーリースピア。

翼を肉体の中にしまった戦乙女が軽く会釈をする。

「えっと、わたくしの名前はフノンフと申します。あの、その、それですね、この辺りでトンチンカンな殺人鬼が大暴れしていると聞いて来たのですが、知りませんか？」

「トンチンカンなのはおまえの方だろ」

思わず呪架は吐き捨てた。そして、まさかと思いつながら訊く。

「お前がワルキューレか？」

「そうです。えっと、わたくしはワルキューレですが、もしかして貴方様がワルキューレを呼べと馬鹿なことを言っていた殺人鬼さんで？」

「おまえみたいなのがワルキューレなんてがっかりだ。俺の相手にもならないな」

「そんなことありませんですよ。わたくしこれでも、ワルキューレの中で戦闘要員を務めさせてもらっております」

それは呪架にとって絶好の機会だった。このフノンフと戦うこと

により、ワルキューレの戦闘レベルを知ることができる。

ホーリースピアを構える様子もなく、フロンフは堂々と呪架に背を向けて道路の向こうを指差した。

「えっと、あの、機動警察の方には向こうの方まで下がっていただき、報道なども完全にシャットアウトしましたので、ここにいるのはわたくしと貴方様。つまりですね」

相手の話半ばで、背を向けているフロンフに呪架が妖系を放った。輝線は確実にフロンフを捕らえたはずだった。

妖系はフロンフの残像を斬った。

音もなく、風も立てず、フロンフが姿を消した。

気配がしたのは呪架の真後ろ。

「敵を背中から攻撃するなんて卑怯ですよ」

すぐに声に反応して呪架が後ろを振り向くと、確かにそこにはフロンフの姿があった。

「いつの間に俺の後ろに……まるでセーフィエルみたいだ」
相手が呟く名をフロンフは聞き逃さなかった。

眉を寄せてフロンフは呪架に尋ねる。

「夜魔の魔女セーフィエルをご存知ですか？」

「知ってたらどうする？」

「帝都政府はセーフィエルの行方を追っておりまして、それがなんというか、簡単にいうと見つからないという感じで困っておりますです」

「教えてやる義理はない」

それに呪架は消えたセーフィエルの居所を知らなかった。

「そんなことおっしゃらずに。ではこんな話と交換ということ、わたくしはセーフィエルが開発した亜音速移動装置の使い手としてワルキューレの中でもこれを使いこなせるのはわたくしだけなんですよ。ちよつと自慢です」

それが呪架の前から姿を消し、真後ろの現れたトリックだ。

呪架は無言でフロンフを見つめていた。どうも調子が乱され、戦

いづらい相手だ。可笑しな日本語は耳について離れない。

「もうおしゃべりはたくさんだ。殺して口を開けなくしてやる」
宣言どおり呪架はフュンフを殺しに掛かった。

エリスの嘴状の鉤爪が大きく口を開き、中から魔弾を撃ち放った。迫る魔弾をホーリースピアで跳ね返したフュンフに呪架の妖系が迫っていた。

輝線はまたもや残像を斬った。

フュンフの蹴りが呪架の背中を襲い、地面に両手を付いてしまった呪架の首根っこに、鋭い槍の先端が突きつけられた。

「クソッ！」

背中を足の裏で押さえられ、首と刃先は数センチの距離しかなく、呪架は蛙のように地面に這いつくばって動くことができなかった。

だが、呪架にはまだエリスがいる。

「行けエリス！」

エリスの放った魔弾が真横から迫り、フュンフは呪架の背中を踏み台にジャンプをして躲した。

「危なかったです。えっと、あの、わたくし先ほど亜音速装置の使い手みたいな大そうなことを言いましたけど、実はセーフィエルほど上手に使うことができず、咄嗟に亜音速に入ることができない上に、物凄くゼーハーゼーハー息を切らせてしまうのです」

「自分の弱点を言うなんて馬鹿か」

瞬時に立ち上がった呪架は毒を吐いた。

二人の敵を前にフュンフはニツコリ笑った。

「絶対に勝てるから良いのですよ」

その口調の変化に呪架は気づいただろうか？

戦いはこれからだった。

第2章 傀儡士の血族(2)

女帝とズイーベンは円卓のある会議室で、モニターに映った死闘を見守っていた。

戦っているのはフუნフと呪架とエリス。羽虫型の超小型カメラからの映像だ。

フუნフには呪架を生け捕りにするように命じ、戦いの最中もできるだけ多くの情報を聞き出すよう指示していた。

セーフィエルの名前が出た以上、ただで殺すわけにはいかなかった。それに加え、戦いの最中に呪架が呼んだ『エリス』の名。セーフィエルの名前が挙がっていることから、エリスが『あのエリス』である可能性は高い。

映像に映る呪架の戦いぶりにズイーベンは目を見張っていた。

「やはりこの子供は傀儡士でございましょうか？」

「たぶんね」

「では何者なのでございましょうか？」

「何者なんだろうねー。そこら辺をフუნフに質問させてみてよ」

この会議室の音声はすでにイヤホンを通してフუნフの耳に入っている。

画面の向こう側の世界で、フუნフはエリスの鉤爪をホーリースピアで受け止めながら、余裕の質問を呪架に投げかけた。

《傀儡士とお見受けいたしました。貴方様は何者ですか？》

《俺のお母さんを、おまえらが奪った。こう言えばわかるか？》

スピーカーを通して二人のやり取り聞いたズイーベンは深く息を吐いた。

「やはりあの子……エリスの子供とわたくしは確信いたしました」

「まっさかー、だって君の報告じゃエリスの子供は別の空間に引きずりこまれたって」

そう女帝が報告を受けたのは一〇年ほど前のことだった。

複雑な顔をするズイーベンはフუნフに命じる。

「エリスが自らの意志で魂を捧げたこと、ノインのことも含めてその子に話してあげなさい」

そして、ズイーベンと女帝の意識はモニターの映像に注がれた。

苦しそうに息を切らす呪架の様子を見ながら、フუნフはホーリースピアを地面に下ろし、戦う意志がないことを相手に伝えて動きを止めた。

「エリスのことをお話するので、貴方様も戦う手をお止くださいです」

母の名を出されては、呪架は動きを止めないわけにいかなかった。それが罠だとしてもだ。

「どんな話だ？」

「貴方様はエリスの子供ではありませんですか？」

「そうだ、お母さんはお前らに殺されたんだ」

「ズイーベンが察した通りでしたか……。エリスは本人の同意の元に我々にアニマを差し出したのです」

「そんなの嘘だッ！」

唾を飛ばしながら呪架は怒号した。

フუნフはズイーベンに命じられたとおりに語りはじめる。

「貴方様の祖母であるシオンは我々の間ではノインと呼ばれておりましたです。ノインはワルキューレでしたが、蘭魔と駆け落ちの末に逃亡し、それにより世界を危機に晒したのです」

そんな話すら呪架は知らなかった。まさか祖母がワルキューレの一員だったなんて、信じられない。

「世界を危機に晒すなんて、そんなことあるわけないじゃないか！」

「ノインはセーフィエルの末裔であり、あの一族の祖は 闇の子の末裔でもありますです。 闇の子 とはわたくしたちが戦わねばならない相手なのです。そして、 闇の子 の血を引きながら我々に協力したノインは、 闇の子 と戦う大きな武器だったのです。」

そして、シオンは蘭魔と駆け落ちしたがために殺されたのです」

「誰に？」

「D C というテロリスト集団に蘭魔が狙われており、シオンもその巻き添えになったのです。この世で死んだノインのアニメは女帝の命令で、闇の子の封印強化の任務を責めとして受けさせられました……」

それゆえに、ワルキューレのナンバー『9』は永久欠番とされた。苦悩に眉を顰めながらフュンフは話を続ける。

「のちに蘭魔はD C を壊滅にまで追い込み、最終的にはD C を乗っ取ったのです。その後の詳しい経由はわかりませんが、蘭魔は以前のD C がそうであったように、帝都政府に牙を剥きはじめましたのです。しかし、新生D C も何者かに壊滅させられ、蘭魔はおそらく死亡したと思われそうです。そして、蘭魔には子供がいたのです」

呪架の父 愁斗。その顔を呪架は知らない。呪架が生まれてすぐに愁斗は姿を消し、呪架は母の手ひとつで育てられた。だから、呪架にとって母はすべてだった。

そして、フュンフはエリスの話をはじめめる。

「エリスはノインの年の離れた妹です。その妹がこともあろうに蘭魔の子供、つまり蘭魔とノインの子供との間に子供を授かったのですよ。これを波乱といわずなんというのです？」

「祖父がどんな人だったか俺は知らない。だからって、お母さんやお父さんや俺にだってなんの罪もないだろ」

「いいえ、蘭魔は帝都政府を揺るがす敵です。罪の子供は罪。セーフィエルが銀河追放されたのも、元はといえばノインと蘭魔が駆け落ちしたのがはじまりです。エリスのしたことは大罪であり、だから女帝はエリスに罰を与えたのです」

「だから俺のお母さんは殺されたのか？」

「殺したわけではありません。封印され、ノインという楔を巻かれても力を増幅させ続ける 闇の子 を食い止めるために、エリスは新

たな人柱となつたのです。それにエリスは自ら同意したのですよ」
「そんなの嘘だーッ！」

怒りの任せて放つた呪架の妖系がフუნフの甲冑を抉る。甲冑の胸元が見事に裂かれたが、妖系は皮膚までには到達しなかった。

ため息をついたフუნフがホーリースピアを構える。

「貴方様を捕らえろと女帝に命令されてますですが、無傷とは命令されていませんです」

「返り討ちにしてやる！」

呪架が妖系を放ち、エリスが空から魔弾を撃つ。

妖系と魔弾は残像となつたフუნフを抜けると思われたが、残像は妖系をホーリースピアで弾き、「もうひとつ」の残像が魔弾を切り裂いた。

呪架は眼を見張って動きを止めた。その瞳に映るフუნフの残像は五人。

五人のフუნフはそれぞれに別の構えをしている。ただの残像ではなさそうだ。

「セーフィエルが開発したこの装置を使いこなせるのも、ワルキユールではわたくしただひとりです」

五人に分裂したままでは亜音速に入れないのか、その動きは眼で捉えられる速さだが、五人同時に別々の動きをして向かって来るのは脅威。

呪架を左右から挟み撃ちにする二人のフუნフ。エリスに襲い掛かる残り三人のフუნフ。

五対二の戦いが繰り広げられる。

両手から妖系を放つ呪架はギリギリの戦いを強いられ、疎かになるエリスの操縦が仇となつた。

エリスの片腕が斬り飛ばされて、赤いオイルを撒き散らしながら腕が宙を舞った。武器を装着していた腕だ。

自分の身を顧みず呪架がエリスを助けようと妖系を放つ。

それがまた仇となって、呪架は間近にいたフუნフの一撃を躲わ

し切れず、赤黒いローブに穴が開いた。けれど、幸いなことにローブは目隠しの役目も果たし、中のいる呪架への狙いが定まりづらい。ローブに穴が開いたが、呪架は辛うじて無傷だった。

しかし、ローブを突き抜かれたことにより呪架に一瞬の隙が生まれ、五人のフノンフが一斉に呪架に襲い掛かって来た。

呪架が後頭部をホーリースピアの柄で強打され、前のめりにバランスを崩したところを二人のフノンフに羽交い絞めにされてしまった。

動きを封じられた呪架だが、指先さえ動かせれば勝機はある。だが、フノンフは甘くない。

すでに手も掴まれ、その手には二人のフノンフが刃先を向けている。

残りひとりのフノンフは呪架の前に立ち、切っ先を呪架の腹に突きつけた。

「貴方様の負けでございます」

「コード009アクセス　イリユージョン　起動」

エリスの躰が霞み、フノンフが予想していなかった事態が起きた。なんとエリスもまた人数を増やしたのだ。その数はフノンフに及ばず二人だが、フノンフを驚かせるには十分だった。

「まさか、そのアンドロイドはセーフィエルが手を加え　ッ！」
油断していたしていたのか、五人のフノンフは動きを封じられたように出遅れた。

相手の隙を衝いて呪架は自分を拘束していた二人のフノンフに肘鉄を喰らわせ、素早くの場から逃げてエリスを操る。

「コード006アクセス　ブリリアント　召喚、照射！」

光り輝く六個の球体がエリスの周りに飛び交い、二人のエリス合わせて一二個の球体からレーザー発射された。

レーザーはフノンフたちを貫通し、次々とフノンフの幻影が掻き消えた。

最後に残ったフノンフは甲冑を所々焼き切られ、片腕はホーリー

口ツドを握り締めながら、残骸のように地面に墮ちていた。

切断面は焼かれているとはいえ出血量が少ない。それどころか、肉が固まり傷口を塞いでいる。

「ええっと、こんな大怪我を負わされたのは前回の聖戦のとき以来です」

「おまえのおしゃべりも終わりにしてやる」

呪架の手から妖糸が放たれる。

フュンフは動かなかった。

口は悲鳴もあげず、眼を剥いた生首が宙を舞い、低い音を響かせながら地面に落下した。

頭部を失ったフュンフの躰が地面に倒れ、首元から一気に噴出した血が地面を朱に染める。

呪架は生首の髪を鷲掴みにして、フュンフの顔を自分に向けた。

すると、驚くべきことに生首のはずのフュンフが口を聞いたのだ。

「貴方だけの力で」

なにかを言いかけてフュンフは静かに眼を閉じた。

呪架は勝利の証として生首を天高く掲げて叫ぶ。

「帝都のクソども、俺はワルキューレを倒したぞ。掛かって来やがれ女帝ども！」

その映像は羽虫型カメラを通して女帝の元に届いていた。

モニター越しに凄惨な光景を目の当たりにしながら、女帝は落ち着いた物腰で対応した。

「ゼクスに至急連絡を、スリープ状態に入ったフュンフの脳を回収して、すぐさま生成装置に入れるように」

傍らに立っていたズイーベンはどこかに連絡を取り終わると、再びモニターに眼を向けた。

「フュンフが油断していたとは思えません」

「あのときフュンフはまるで誰かに動きを封じられたみたいだったよね」

女帝もズイーベンも不可解なフュンフの敗北に気づいていた。

『何者』かの介入があるような気がするのだ。

しかし、ズイーベンはこちらも考える。

「例えばあの子供ひとりの力で勝ったのではないにしろ、魔人蘭魔とセーフィエルの血を引くあの子供を見くびってはいけません」

ズイーベンは過去に呪架と遭遇していた。

エリスのアニマを 裁きの門 に送り込む勅令を受けとき、ズイーベンはエリスを一時的に殺すところを呪架に目撃されていたのだ。そのとき、呪架は 闇 の力を発動させ、ズイーベンに牙を剥けて傷を負わせた。

が、幼く未熟な呪架は 闇 を操りきれずに、ズイーベンの目の前で『向こう側』に連れ去られたのだった。

白い翼を生やすズイーベンの右半身は『ホーリー』、黒い翼を生やす左半身は『ダーク』。その『ホーリー』である右手にはいつも白い手袋をしている。手袋の下には呪架にやられた 闇 が巻き付いたままなのである。

『ホーリー』で浄化しようとしても、『ダーク』で呑み込もうとしても、ズイーベンの右手の傷痕を消えなかった。

考え込んでいた女帝が結界師であるズイーベンに命令を下す。

「眼には眼を、歯には歯を、傀儡士には傀儡士を、『メシア』クンを出動させるよ」

「恐れながら申し上げます。それは危険すぎます」

「枷は強めたんでしよう？」

「我々に逆らえば『メシア』は死にます」

「君の結界師としての実力はアタシとアタシの片割れが身に沁みて知ってる。君が本気で『メシア』に枷をかけたなら、『メシア』は絶対服従するしかないさ」

「承知いたしました。『メシア』を覚醒めさせましょう」

コードネーム『メシア』。

光の傀儡士 慧夢が呪架と邂逅する時は近い。

第2章 傀儡士の血族(3)

ビル街を縫うように飛ぶ軍用ヘリコプター。

イリユージョン を解除しているエリスを従える呪架は上空を見上げた。

ヘリコプターがスクランブル交差点に真っ直ぐ降りて来る。

地上から一〇メートルのところ、ヘリの中から何者かが飛び降りた。ロープも梯子もないが、まるで糸を伝って降りて来るようであった。

その少年は半裸の躰に拘束具を着せられ、首輪に付けられた宝石が不気味な光を放って点滅していた。

呪架は目の前に現れた少年をあざ笑う。

「ガキが俺になんの用だ？」

少年は子供とは思えぬ艶やかな笑みを浮かべた。

「ボクに向かってガキとは失礼な奴め。こう見えてもだいたい二〇年以上は生きてるんだから」

この少年の見た目は呪架よりも若く、小学生高学年程度にしか見えない。

呪架は表情にも態度にも表さなかったが、この少年をひと目見たときから、なにか運命的なものを感じていた。

そして、少年も同じく感じていた。

「あははは、そうか、そうだったんだね。キミか、ボクのことを感じさせてた奴は。心の底からウズウズして堪らないよ」

自分の躰を抱きしめる少年は身悶えていた。

「M 奴隷の変体め」

吐き捨てる呪架に少年はすぐさま反論する。

「勘違いしないでくれよ。この拘束具は女帝どもの趣味さ」

「女帝の犬か」

「飼い殺された思考は持ち合わせてないよ。でなきゃ、こんな拘束

具を着せられてはさすがない」

「ワルキューレよりも強いか？」

「強いね」

「なら殺し甲斐がある」

この戦い 呪架が先に仕掛けた。

煌く妖系が宙を奔り、少年の背後に控えていたエリスが召喚したソード で斬りかかる。

仕掛けたはずの呪架が眼を剥いた。

優雅に舞う少年の両手から輝線が放たれ、呪架の妖系を斬り、ソード を持つエリスの手首を落とした。

両手を失ったエリスは立ち竦み、少年の技を見た呪架も動きを止めた。

「まさか……傀儡士か？」

「そうだよ。キミもそうらしいけど、名前は？」

「呪架」

「ボクはコードネーム『メシア』……親からもらった名前は慧夢」

その名を聞いた呪架は思わず驚愕を顔に表してしまった。その表情を見取って慧夢はニヤリと笑う。

「キミの本当の名前は呪架ではなく、紫苑っていうじゃないの？」

「違う」

呪架は即座に否定した。あまりにも早い否定に慧夢は満面の笑みを浮かべた。

「あははは、嘘付くの下手だなア。でもビックリだよ、キミが傀儡士としてボクの前に現れるなんてね。ボクは父さんから傀儡士の技を叩き込まれたけど、キミはどうやって学んだんだい？」

「……そんなはずない」

呪架は否定した。己の頭に過ぎった思考への否定。あまりにもそれはありえないことだったからだ。

それなのに慧夢は次々と呪架の思考を乱す。

「ボクは父さんからキミのことや母さんのこと、他にも色々聞か

されたけど、キミはきつとほとんど聞かされてないと思うよ、だってねそれが母さんの願いだっただから」

「お前が俺の兄のはずがない！」

「あははは、やっぱりそうだ、逢えて嬉しいよ紫苑」

「紫苑じゃない、呪架だ！」

「父さんはね、お婆ちゃんのことを忘れられないらしくてね、お婆ちゃんの名前と同じ名前をキミに付けたんだよ、知ってたかい？」

慧夢がいうことがすべて真実だと呪架は確信していた。

母のエリスは愁斗と結ばれ双子を生んでいたのだ。名前は慧夢と紫苑。

生まれて間もない双子は引き離され、慧夢は父に引き取られ、紫苑は母に引き取られた。

呪架は双子の兄がいることをエリスから聞いていた。けれど、なぜ愁斗が生まれて間もない慧夢を連れて、姿を消してしまったのかまでは聞かされていなかった。

唯一、聞かされていたのは愁斗が傀儡士だったということだけ。

呪架は父の顔も知らず、兄の顔も知らずに育った。

それが今、こんな形で出逢うとは、なんと呪われた運命なのだろうか。

呪架は認めない。突きつけられた現実を認めようとしなかった。

「俺はおまえのことなんて知らない。紫苑なんて名前も知らない。

俺は……呪架だ！」

「ボクの『双子の妹』じゃなかって感じたケド、他人なら容赦しないよ」

呪われた歯車を止めることはできなかった。

慧夢の指先から放たれた煌きは美しく残酷に呪架の首を狙う。双子だとしても、その技に迷いはない。

己の信念に真実を見出すため、呪架の指先からも煌きが放たれる。互いの放った煌きは空中で衝突し、漆黒と白銀の粉となって大気を舞った。

すかさず呪架がコードを唱える。

「ブリリアント 照射！」

輝く球体が放った六本のレーザーが慧夢を襲う。

慧夢は軽やかに地面を蹴り、宙で回転を決めながら華麗にレーザーを躲わす。

アスファルトを焦がす臭いが消える前に、呪架は再びブリリアントで慧夢を狙う。

「ブリリアント 照射！」

が、なにも起きない。

「どうした！？」

なにが起きたのか呪架にはわからなかった。

半永久的に傀儡を動かすことのできる 闇 のエネルギー。だが、それはコードを使用しなかった場合、強力な武器コードや魔導コードを使用することにより、傀儡エリスの 闇 エネルギーは底を付いてしまったのだ。

それを知らない呪架は苛立ちを覚えて闇雲に慧夢へ攻撃を仕掛ける。

「クソッ！」

呪架の両手から放たれた妖系は闇色を孕み、風が叫び声をあげて泣いた。

「キミの技は傀儡士としては三流だね」

慧夢の放った妖系が呪架の妖系を軽くあしらい、相手の攻撃を防いだ慧夢は躰の向きを変えて必殺を放つ。

六本の妖系が慧夢の手から同時に放たれ十字を切る。 蘭魔秘伝

悪魔十字 を慧夢は会得していたのだ。

悪魔十字 を放たれたのはエリス。

すぐに呪架はエリスを避けさせようとするが間に合いそうもない。刹那、悪魔十字 が細切れに切断され、呪架と慧夢は思わぬ怪異に眼を剥いた。

破壊されかけたエリスの前に現れた紅い美影身。

呪架と慧夢の位置からは紅い後姿しか見えず、鮮やかな紅い影だけが眼に焼きついた。

そして、空間が紅く渦巻き、謎の影はエリスを抱きかかえ、渦の中へと姿を消したのだった。

なにが起きたのか呪架は理解できなかった。

「……なにが起きた？」

慧夢も理解しがたい現象であったが、彼の方が気持ちの切り替えが早かった。

「あははは、まあいいじゃないか。これで一対一の決闘だよ。可憐な血の薔薇を咲かせよう！」

エリスを失われた呪架に残るは、自らが繰り出す技。

「俺は冥府魔道に生きると決めた。たとえ闇に躰を犯されようとも！」

呪架の放った輝線が空間を裂き、闇色の傷が風を吸い込みながら広がっていく。

闇色の裂け目の『向こう側』から、甲高い悲鳴が聴こえる。号泣する声が聴こえる。轟々と呻く声が聴こえる。どれも惨苦に満ち溢れている。

それが闇だと、慧夢はもちろん熟知していた。

「キミが闇を使うのなら、ボクは雌狐たちに造り変えられたこの躰で光を使うよ」

慧夢の放った煌びやかな輝線が空間を裂き、傷は燦然と輝きならフルートの音色を風に奏でさせ、世界に柔らかな光と空気を吹き出した。

光色の裂け目の『向こう側』から、笑い声が聴こえる。賛美歌が聴こえる。詩が聴こえる。息吹が聴こえる。どれも輝きに満ちている。

呪架が叫ぶ。

「闇に喰われるがいい！」

続いて慧夢が叫ぶ。

「美しく悶え逝け！」

二つの裂け目からは同時に飛び出した 光 と 闇 が激突する！

強大な力のぶつかり合いで風が辺りを薙ぎ払い、呪架のロープが激しく暴れ、慧夢は両手を広げて風を心地よく浴びている。

闇 は 光 に押されていた。

狂い叫ぶ 闇 を謳い舞う 光 が呑み込む。

春の麗らかなせせらぎのように 光 が微笑んだ。

闇 への 審判 が下される。

高らかな天のラッパがファンファーレを奏で、 闇 は完全に昇華されてしまった。

爽やかな香りを残して 光 は還って行った。

「これが実力の差だよ」

敗北した呪架の躰に巻き付けられる慧夢の妖系。肢体を巻き、胴を巻き、首を巻き、指の一本一本までを拘束した。それは普段、慧夢が帝都政府にされている仕打ちと同じ。

全身の自由を奪われた呪架は、躰のバランスを取ることもできず、腹から地面に激突した。

呪架の頭に押し付けられる慧夢の靴の裏。

完全なる敗北。

「さようなら、愛しい紫苑」

最後の止めを刺そうと慧夢が妖系を放とうとした瞬間、いきなり慧夢は全身を激しく痙攣させ、苦痛に悶えながら地面の上でのた打ち回った。

「……ズイーベン……やめろ」

喉の奥から慧夢は声を絞り出し、やっと痙攣が治まった。全身からは玉の汗を滲み出し、呼吸は酷く荒い。結界師ズイーベンがギミックを発動させ、慧夢の動きを強制的に制止させたのだ。

息を荒立てながら立ち上がった慧夢が吐き捨てる。

「生きたままキミを捕らえるのだとさ」

そして、呪架は身動きひとつできないまま、迎へのへりに乗せられて連れ去れたのだった。

第2章 傀儡士の血族(4)

帝都の中でもっとも霊的磁場の強い場所が夢殿である。

その敷地内に設けられた監獄。

古墳のような形をした監獄の入り口を潜ると、地下への階段が伸びている。

下った先にあるドーム状の部屋には、さらにドーム状のバリアが部屋を中心にあった。その中に捕らえられているのは呪架。

全身を慧夢の妖系で拘束されたまま、さらにアイマスクと口枷を嵌められ、最低限できる動作は床を転がることだった。

入れられた当初は散々転がって暴れ廻ったが、今は動かずにただじっとしている。

聴こえる音は自分の荒々しい呼吸のみ。憎しみや怒りなどの負の感情が沸き上がり、押さえられない気持ち呼吸を荒立てていた。

ここに来るまでに耳にした会話で、ここが帝都の中枢だということとわかっていた。それなのに呪架はなにもできない。

復讐すべき相手がすぐそこにいるにも関わらず、自分はただ縛られ思考だけが先走りをする。

呪架はくぐもった叫びをあげた。

魔気が呪架の周りを暴れ狂って飛び交うが、その魔気もすぐに境界の力によって殺される。

まずはこの場所からの脱出を考えねばならないが、そのチャンスは兆しすら見えない。

アイマスクをされた呪架に見えるのは塗りつぶされた視界。希望は黒く塗りつぶされていた。

ここを脱出したら、逃げることはせずに夢殿をぶっ壊すつもりで呪架はいる。そんな思いも、虚しさを感じる。

ただ過ぎる時間は思考を巡らす時間になり、呪架は過去のことを回想していく。

あのとき、呪架の目の前で起きた怪異。

エリスはどこに消えた？

あの紅い影は誰だ？

帝都の仕掛けた罫か、それとも別の者の介入か？

そして、双子の兄こと。

あれが本当に兄とは信じられずにいた。

なんで帝都になんか飼われてるんだ！

心の中で呪架は叫んだ。

兄は父に引き取られ、呪架は母に育てられた。父の顔も兄の顔も

知らずに育ったが、呪架は母から多くの愛を注がれた。

その生活を破壊したのは帝都政府だ。

血反吐を幾度となく吐いて生き延びた日々。生きるために生きる

日々。ただ生きることには必死だった。

ただれた記憶を葬り去るためにも、呪架は復讐を成し遂げなくて

はいけなかった。

傀儡士としての業を磨き、ワルキューレの一人を倒したが、慧夢

に敗北したことにより、己が有頂天になっていたこと知った。

まだまだ強くならなければいけない。

しかし、闇を極めようとすればするほど、五臓六腑が侵蝕さ

れて犯されていくことも感じていた。

それでも呪架は構わなかった。

母を想い、呪架は改めて復讐を胸に刻んだ。

黄昏で空が朱に染まる逢魔ヶ刻。

周りを濠に囲まれた広大な夢殿の敷地全体は、普段から結界師の張った大結界で覆われている。帝都でもっとも侵入が困難な場所であり、中に入れたとしても精鋭の近衛兵やワルキューレが行く手を阻む。

結界の盲点、ゆらめきを夜風が足音を忍ばせながら擦り抜け、難攻不落の夢殿に軽々しく侵入した。

誰にも気づかれず、機械の眼すらも眩ませながら、霧のように夜風はセキュリティを次々と突破していく。

夢殿の敷地内にある庭園で夜風が月のような艶笑を浮かべた。

夜魔の魔女セーフィエル。

彼女がここまで簡単に夢殿へ侵入できた要因は ゆらめき 以外にもあった。

ワルキューレの永久欠番ノインの血は、元を辿ればセーフィエルのものだ。血族であるセーフィエルにセキュリティが誤作動したのだ。

そして、もつとも大きな理由は、帝都で使われているテクノロジのほとんどが、セーフィエルが基礎を築き上げた物なのだ。

フィンフが戦いに用いた亜音速移動装置が良い例だ。

断続的に亜音速を使用してセーフィエルは目的の場所へと急いだ。青々と茂る薫り立つ芝生。

一面に広がった芝生の先に古墳のような土の山があった。

その建造物の入り口は真鍮の扉で閉じられ、見えない力で固く封印されていた。

しかし、この程度の封印などセーフィエルの手に掛ければ造作もない。

セーフィエルの織手が伸ばされると、扉の前で硝子が碎けるように破片が地に落ちた。

開かれた扉を潜り、地下へと続く薄暗い階段を下りる。

ドーム状の結界の中に捕らえられた呪架を確認し、セーフィエルはスリットから脚を伸ばして廻し蹴りを放った。

蹴りを喰らって碎け散る結界。セーフィエルのブーツに結界を破壊する魔導具が仕込んであったのだ。

呪架の傍らに膝をついてセーフィエルは囁く。

「助けに参ったぞ」

アイマスクと口枷を外され、薄明かりの中で呪架はセーフィエルの顔を確認した。

「助けに来なくても俺ひとりですぐにかしてた」

「無駄口を叩くでない。早よう脱出するぞ」

「全身を糸で縛られてる切ってくれ」

セーフィエルが呪架の躰を撫でると、妖系は溶けて消えてしまった。

やっと自由になれた呪架は、固まっていた躰を慣らそうと妖系を放とうとした。

が、妖系が出ない。

呪架の手に嵌められているバンドを見てセーフィエルが悟る。

「結界師の術が込められておるようじゃ。手に氣を溜めることができず、妖系を練ることができないのじゃろう」

「クソッ！」

「妾でも呪解に時間が掛かりそうじゃな、後にするぞ」

「今すぐやれ！」

「敵がすぐそこまで迫っておる、後じゃ」

駆け出してしまったセーフィエルの後を追って呪架も仕方なく外に向かった。

傀儡術を封じられた傀儡士はただのひと同然。脱出は一筋縄ではいきそうもない。

地下から地上上がった二人を待ち受けていた一人の影。

ワルキューレの最高責任者　アイン。

頭数では二対一だが、呪架を連れているセーフィエルに分が悪いのか？

鞘から抜いたホーリーソードを天に掲げ、アインは宣言する。

「フუნフの敵は自分が討つ！」

呪架の視線はアインではなく、その先の人影に向けられていた。もちろんセーフィエルもその人影に気付き、苦虫を噛んでため息を吐いた。

光の傀儡士　慧夢。

「二対二だね」

と、慧夢は言うが、不利なのは瞭然だ。

セーフィエルは呪架を自分の背中に廻して、黄昏の空を眺めた。

「妾の時間はまだ来ぬのか」

日が落ちるにつれて魔力を増すセーフィエル。夕方でも十分に力を発揮することは可能だが、この場所が夢殿の敷地内だということが枷となる。夢殿全体に張られた大結界が、セーフィエルの魔力を弱めているのだ。

アインと慧夢を倒せるとセーフィエルは勝算を予見していた。

しかし、問題は呪架を守りきれるかということである。

四人は牽制し合いながらチャンスを探る。

この場に第五の気配がした。

宙に現れた紅い渦巻きから這い出て来る紅い美影身。

眼に焼きつく鮮やかな紅いインバネスを羽織った人物が立っている。その体型から長身の男だということは判断できるが、顔は白い仮面で隠されていて見ることはできない。

「私の名はダーク・シャドウ。闇の子の意志を具現化する者」
人を魅惑する声音。

その声を聴いた呪架は、精神界で出会った先祖に似ていると感じた。

慧夢もダーク・シャドウに異様な雰囲気を感じ取り、セーフィエルは蘭魔の気配を感じたのだった。

闇の子の意識を具現化すると語った時点で、ダーク・シャドウは帝都政府の敵と知れた。アインがダーク・シャドウを見る目は剃刀のように鋭い。

「闇の子に従う者を抹殺するのが自分の任務だ！」

噛み付くアインを無機質な白い仮面が見ることはなく、ダーク・シャドウは呪架と慧夢を順番に見ていた。

「二人の傀儡士はなにも知らず渦中に投げ込まれた。だからこそ、私の話を聞いてもらいたい」

諭すような口調になぜか呪架と慧夢は惹き付けられてしまった。

言葉自体が魔力を持っている魅言葉。だが、アインには通用しない。「この者は話など聞く必要はない！」

大剣を振りかざしてアインがダーク・シャドウに飛び掛る。

ダーク・シャドウの手から輝線が次々と雨のように放たれ、剣の舞を踊るアインの連撃が輝線を斬り落とす。

呪架と慧夢は目を見張った。ダーク・シャドウの技は傀儡士のそれだ。そう、ダーク・シャドウも傀儡士だったのだ。

片手だけでダーク・シャドウは同時に数本の妖系を放っており、その技があればもう片手からも妖系を放つことは容易いように思える。なのにダーク・シャドウは片手だけでアインの相手をしていた。妖系と舞い踊るアインは神速の一撃でダーク・シャドウの胸を狙う。

改心の一撃をダーク・シャドウは陽炎のように軽く躲した。

余裕なのだ。

ダーク・シャドウにとってアインとの戦いは、猫とじゃれ合っている程度のもの。両手で戦う必要すらないのだ。

余裕のダーク・シャドウは妖系でアインをあしらいつつ語りはじめ。

「闇の子と光の子は双子であり、互いに地球の派遣を賭けて太古の昔から争いを続けている。今は前回の聖戦に敗北した闇の子が封じられてしまっているが、それも戦い的一幕でしかない。東京を死都に変えたあの聖戦も闇の子と光の子が戦いを繰り広げた結果だということを知る者は少ないだろう」

太陽が燦然と輝くある年の夏　世界は変わった。

突如として起きた聖戦の果てに東京は死都と化し、首都は東京から霊的磁場の強い京都へと移された。

人智を超えた『存在』が繰り広げる戦いを見た人々は、その戦いの意味を理解できず、終戦後もなにが戦っていたのか、わからずじまだった。

戦いの最中、ある者は天使を見た、ある者は悪魔を見たと言い、

終結のときに救世主が現れたという意見では一致が見られている。

しかしながら、多く残された謎は謎のままであり、どちらの『存在』が勝利を治めたかすらわかっていない。真相を解き明かそうとする歴史学者は今も熱い激論を交している。

この聖戦と呼ばれる戦いの終戦と同時期、関東には女帝と名乗る者が巨大都市を築いた。それが帝都エデンだ。

女帝こそが聖戦の救世主だと云われるが、どちらに属していた『存在』なのか、それともまた別の『存在』なのか、女帝の周りには謎が取り巻いている。

謎が多い指導者の下でも、都市は発展した。それは女帝の絶対的な力と、彼女がもたらした魔導のためだ。

帝都エデンは世界各国に反対されながらも独立国家を名乗り、魔導の力がもたらした恩恵は科学との融合により、帝都エデンを発展させた。

ダーク・シャドウは懐から一冊の本を取り出した。装丁のとても古そうな皮表紙の本だ。

「この夢殿のどこかに女帝しか知らない 夢幻図書館 があると聞いた。そこにある著者不明の黙示録。その本が世界に二冊あることをご存知かな？」

その本には封印された歴史が記されていた。光子と闇の子が繰り広げた全ての戦いが克明に記され、未来のことまでもが記されている。一種の預言書である。

過去のことは完璧なまでに記されているが、未来のことになると断片的で矛盾も多い。

ダーク・シャドウは話の核心に入る。

「世界には最終的な調和に向かうシナリオがある。しかし、途中の過程にはアドリブが含まれる。起きてしまった過去から、高確率で導き出される未来。それこそ 大いなる意思」

饒舌に語るダーク・シャドウを止めようとアインが剣を振るう。

「人間風情が世界の秘密をしゃべるな！」

「私はすでに人の域を越えている。ワルキューレなど足元にも及ばないことを知れ」

ダーク・シャドウが妖系で宙に奇怪な魔法陣を描く。

真物の傀儡士のみが行なえる奥義召喚術。

魔法陣の『向こう側』で世界を脅かす。それが咆哮した。

大地が震え上がり、大気が一瞬にして氷結する。

召喚を目の当たりにして各々が声を漏らす。

「何者ぞ？」

と、セーフィエルがいぶかしみ、

「……やっぱりね」

と、慧夢は艶笑し、

「……………」

呪架は沈黙して、

「秋月蘭魔、生きていたのかッ！」

最後にアインが叫んだ。

それが潜む魔法陣を従えるダーク・シャドウが呪架に顔を向ける。

「この世と 裁きの門 がもつともリンクしている場所は死都東京だ。おまえと私が求めているモノがそこにある。闇の子 の仲間にならないか？」

呪架はなにも答えず、ただじつと白い仮面を見てしまっていた。

魔法陣の『向こう側』から血に飢えた野獣の遠吠えがいくつも聴こえた。

呪架の前に立ちはだかったセーフィエルが答える。

「闇の子 にも 光の子 にも呪架は渡さぬ」

夜風がセーフィエルを取り巻いた。

「許せよ呪架！」

セーフィエルの手が呪架の躰に触れた瞬間、歪む映像のように呪架の躰が揺れ動き、その姿は霞みのように消してしまった。

呪架を消したセーフィエルが艶やかに微笑む。

「成功したか失敗したかはわからぬ。呪架は空間転送させてもらった」

呪架のいなくなったこの場所で、魔法陣が破滅を世界に解き放つ。

第2章 傀儡士の血族（5）

ガムテープで補修された窓ガラスから朝日が差し込む。瞼の上を泳ぐ残像。

荒い息を吸い込みながら呪架は目覚めた。

呪架の掻いた汗が固いベッドに染み込んでいる。

剥き出しのコンクリートに囲まれた壁や天井。モダンな雰囲気というより、薄汚い印象を受ける。

躰に掛けられていたボロ布は誰の思いやりだろうか？

とりあえず捕らえられたわけではなさそうだ。

ここはいつたどこで、自分の身になにが起きたのか、呪架の記憶はあやふやだった。

セーフィエルに魔法を掛けられ、どこか得体の知れない場所に飛ばされた。

視界が歪み、躰の感覚は麻痺してしまい、原色の光が次々と襲って来た。

躰が酷く重い。

瞼を開けているのも辛いくらいだ。

瞳を閉じた呪架の脳裏に響く声。

どこかに行かなければならないような気がした。

「そうだ……死都に……」

ダーク・シャドウが言っていたことが事実かはわからない。けれど、確たる情報がない限り、ひとつひとつ確かめていくしかない。

呪架はベッドから起き上がろうとしたが、激しい痛みが躰の内側から滲み出して来る。躰中が擦り傷を負ったようなヒリヒリとした感覚もある。

セーフィエルの空間転送は辛うじて成功したが、その代償として呪架は躰中に擦り傷と、内臓の損傷を受けていたのだ。

天井を見つめていた呪架は人の気配を感じた。

自分よりも年が下くらいにいたいな少女が、ドアの間から顔を見せる。

「目覚めたみたいでよかった」

と、少女は満面の笑みを浮かべた。

「丸一日も眠っていたから、心配しちゃって」

いつから数えて丸一日なのだろうか？

「俺はなぜここにいる？」

「空から降って来たのをあたしがここに運んで来たの。あなたが落ちた場所がちょうどテントの上で、持ち主のオジサンがカンカンに怒っちゃって大変だったんだから」

「ここはどこだ？」

「ホウジユ区の ホーム」

ホームとは帝都の影を象徴しているスラム街の中でも、特に大きなスラム街のことを云う。

こんなところで油を売っていられないと、咳き込みながら立ち上がろうとする呪架。それを少女が止めようとする。

「ダメだつてムリしちゃ」

「うるさい」

制止する少女の手を呪架が薙ぎ払おうとした瞬間、シートから出した自分の腕を見て呪架は眼を剥いた。

「ウアアアアアッ！」

呪架の絶叫が木霊した。

腕がない。

消失ではなく、自分の腕がないのだ。

自分の腕があった場所には、昆虫のような脚が付いていたのだ。

セーフィエルが行なった空間転送は、異世界を経由して物体を別の場所に転送する。呪架は異世界を通過する過程で、そこにいた生物と融合されてしまっていたのだ。

しかも、異形と化した腕は利き腕。これでは妖糸も振るえまい。

「どうして、どうしてだ、クソッ！」

震えながら発狂寸前の呪架の肩を抱こうと少女が手を伸ばす。
その刹那だった。

異形の鋭い爪が少女の顔を抉り、絶叫しながら少女は顔面を押さえて怯んだ。

野獣のような叫びがあがり、異形の爪が少女の心臓を貫く。
「クソツ！」

怒りに震える異形の爪の先から、真つ赤な雫がポトポトと床に零れ堕ちた。

惨殺された死骸を見下す呪架の瞳は狂気を孕んでいる。

自分を救ってくれた少女を呪架は怒りに任せて殺したのだ。

少女の絶叫を聞きつけて体躯の良い男が部屋に飛び込んで来た。

男はそこにある悲惨な光景を目の当たりにして、我武者羅に呪架に飛び掛ろうとした。

呪架はクツクツと嗤った。

異形の腕がバネのように伸び、鋭い爪が男の首にめり込む。口から鮮血の泡を吹き出しながら、男は首を折られ死んだ。

もう呪架の怒りは止められなかった。呪架は破壊の化身になろうとしていた。

駆け出した呪架の前に次々と現れる人影。本能に任せた呪架は相手の顔も見ぬまま、血の華を蹴散らしながら暴れまわった。異形の腕で肉を抉り、左手から妖系の嵐を放つ。

自分が廃ビルから出たことも気付かず、呪架は走り続けて邪魔なものすべて排除した。それが人だったか、物だったのかも判断できていない。

簡易住宅やテントを倒壊させ、物言わせぬままホームレスを八つ裂きにした。

呪架の通った道は朱に染まり、残酷な残骸だけが残った。

ビルの間から覗く空が曇りはじめている。じめじめした湿気が立ち込め、土砂降りの雨が降りそうな気配がした。

遠くから聴こえる雷光の音に合わせて、呪架が遠吠えをあげる。

今、呪架の目を通して見える光景は幻の世界。

断片的な記憶。

自分がなにをしているのかすら呪架は気付いていない。

銃声が鳴り響いた。

ホームの住人たちが呪架の銃口を向けている。

銃弾の雨が呪架を貫かんとする。

呪架は逃げた。

銃弾から逃げたのではない。

言い知れぬ恐怖から逃げ出した。

その恐怖の原因はわからない。

ただ、締め付けられるように胸が苦しい。

乾いた銃声を背中で感じながら、呪架は ホーム から姿を消した。

第2章 傀儡士の血族(6)

ホーム から逃げ出した呪架は人のいない街を彷徨い続けた。人の目を避けながら入り組んだ裏路地を抜ける。

怒りは静まったが、冷静には程遠い。

どのくらい胃に食べ物を入れていなかったのだろうか。 餓えが呪架を襲う。

ゴミ置き場が目に残り、呪架はゴミ袋を破きながら鴉のように荒らし散らかすが、出てくるのは紙やプラスチックなどの分別されていないゴミ。

ふと目を横に向けると、壁際を走る毛皮を纏った三〇センチほどの影。

呪架の妖糸が屠る。

獲物となったのは巨大な鼠。それでも帝都では小さい方だが。鼠の皮を剥ぎ、首元に歯を立てて血を啜る。

呪架は咽喉を動かしながら渴きを癒した。

口についた血の一滴も無駄にしないように、唇についた血を艶やかに舐め廻す。

そして、レストランで出される骨付き肉を頬張るように、鼠の生肉にがつついて頬いっばいに詰め込んだ。

常人であれば腹を壊したり、悪性の病気をしたりしそうなものだが、『向こう側』ではこういう食事が当たり前で通っていた。

肉を喰らっていた呪架がその口と手を止め、曇天が都市を覆う空を見上げた。

呪架の頬に落ちた雨粒。

それが合図だったように土砂降りの雨が降ってきた。

アスファルトを殴る巨大な雨粒。

濡れたローブは重く呪架の躰に押し掛かり、紅い雫がローブからポトポトと零れ落ちる。

呪架は食べることに飽きた肉を投げ捨て、ロープについていたフードを被って地面に座り込んだ。

ビルの壁にもたれ掛かり、地面に付いた尻が水を吸って冷える。屋根のある場所に移動するのすら面倒だった。

呪架の目に映る天は虚空。厚い雲に覆われていようと、大雨が降っていようと、空虚な虚空。現実の風景など無くしてしまった心には映らない。

灰色の世界から次々と雨が堕ちて来る。

帝都に降る汚れた雨ではなにも洗い流せない。

憔悴しきっている瞳を下界に戻すと、傘を差してゴミ置き場にやってくる女性の姿があった。

身を隠すことすら今の呪架には面倒だった。

まともな神経を持ち合わせていれば、こんな浮浪者のような呪架に近づかないだろう。

しかし、この街に侵されている神経の持ち主だったら、こんなこともあるかも知れない。

少し背を丸めてフードの奥にある呪架の瞳を覗き込む女性。

二十代後半くらいの年齢で、化粧をすれば夜の街が似合いそうな女性だった。

女性がなにかをしゃべっている。呪架には無音の世界で女性が口を動かしているように見えた。

そして、女性が伸ばした手を呪架は無意識のうちの握っていたのだ。

呪架は捨て猫のように拾われた。

夢幻に囚われた呪架はふらふらとした足取りで歩いた。

道を歩き、エレベーターに乗せられ、部屋の中に通されたような気がするが、すべて夢かもしれない。

そして、熱いシャワーを顔に浴びて呪架は意識を取り戻した。

あまりにも驚いたために、思わず声をあげそうになってしまった。現状を理解するのに時間を要してしまった。

覚醒した頭を働かせて呪架はシャワールームを飛び出した。

脱衣所でバスタオルを用意していた女性と目が合う。

女性の瞳に映る一糸纏わない呪架の裸体。

スレンダーな躰に小ぶりなヒップ、少し膨らんだ乳房が幼さを匂わせる。

自分の秘密を知られた呪架は異形の腕を振り上げたが、それを左

腕 人間の手が止めた。

呪架は『向こう側』で女としての自分を捨て、男として今まで生きてきた。

あのと慧夢は言っていた。

双子の妹。

それは真実だったのだ。

女性は持っていたバスタオルで呪架の躰を優しく拭いた。異形と化した腕を恐れることなく、母親が小さな子供の面倒を見るように、女性の瞳は呪架を慈しんでいた。

「この腕はどうしたの？」

と、女性に訊かれたが呪架は無言のままだった。

ホーム で自分が犯した罪を思い出す呪架。半狂乱だったとはいえ、自分を救ってくれた少女まで殺してしまった。自分以外の者は信用できないが、あの ホーム の少女の瞳は純粹だった。その瞳が恐ろしい顔をして見開かれたのだ。

「いつから変わってしまったのか……」

呪架は想いを無意識のうちに呟いてしまっていた。

闇 が躰を蝕むせいなのか、『向こう側』で生きるためだったのか、それともこれが自分の本性だったのか、呪架にはわからない。躰にバスタオルを巻かれた呪架は手を引かれた。

「こっちに来て」

女性に誘われるまま、呪架は身を委ねた。

洗面台の前で髪を梳かされ、ドライヤーの熱風が呪架の髪を撫でる。

目を瞑った呪架の臉に映し出される過去の記憶。
幼い頃の母との思い出。

今と同じようにドライヤーをかけられながら、髪を梳かしてもらっていた。あの頃は髪の毛が腰まであって、いつも母に梳かしてもらっていたのだ。

目を開けると母の幻は消えてしまったが、鏡越しに見える女性の微笑む姿。

なぜか呪架は胸が込み上げ、熱い涙が頬を伝った。
女性の指先が呪架の涙を拭った。

「どうしたの、大丈夫？」

優しい声をかけられて、もう涙は止まらなかった。

一生分の涙を過去に流し尽くしてしまったと思っていたのに……。
揺れる呪架の感情。

切れる緊張の糸。

声を出して慟哭する呪架は女性に抱きつき、肩を上下に震わせて温もりを感じた。

「お母さんが殺された日から、ずっと独りで生きてきたのに……」
不覚にも呪架は心の弱さを見せてしまった。

それを優しく包み込むように、女性は呪架の耳元で囁く。

「心配いらないわ」

誘惑されるような声だった。

女性はそのまま言葉を続ける。

「闇の子の仲間になれば、不安もなにもなくなる。あなたの望むモノも手に入るかもしれない」

悪魔の誘惑。

「誰だ、お前！？」

驚いた呪架は女性の躰を突き飛ばした。

心地よい夢が悪夢の変わった瞬間。

女性が艶やかに微笑んだ。この女性が決してできない表情だ。中身が違う。

それを証明するように、女性は聞き覚えのある声を発したのだ。

「私はお前が必用だ。仲間になれ……紫苑」

呪架はすべてを察した。

この女性はダーク・シャドウが操る傀儡なのだ！

深い絶望が呪架の心を闇に閉ざす。

裏切られた。

やはり誰も信用してはいけない。

感情の荒波が相手を問い詰める前に、呪架の手に妖糸を振るわせ
ていた。

眼を剥いて首を刎ねられた女性の生首が床に墮ちる。

返り血を浴びた呪架のバスタオルが美しい鮮血に彩られた。

首を墮とされた躰から流れ出る血。傀儡は生身の人間を操って
いたのだ。

いつから？

もしかしたら、雨の中で呪架を拾ったときは、本人の人格があっ
たかもしれない。

髪の毛を梳いてくれたのは誰だ？

注がれた優しさは誰だ？

呪架を見つめる女性の瞳は嘘だったのか？

「クソッ、俺を弄んで楽しいかッ！」

怒りの涙を流す呪架に生首が口を聞く。

「お前に優しくしてくれた女を殺すとは悪魔の所業だな」

「優しさなんて嘘だ、お前が操ってたんだろ！」

「この女の優しさは本物だった」

「嘘だーッ！」

壮絶な絶望感が呪架の感情を乱す。

女性の生首は笑い声を発してから言う。

「私の言うことが嘘かどうか、それは自分で見極める。今から私が
言う情報についてもだ」

「……………」

「お前が求めているモノが魔導街のマルバス魔導病院にある」

「なにがあるんだ！」

生首は答えなかった。もう物言わぬ死人と化してしまったのだ。

ダーク・シャドウの罠なのか、それを悩む必用はなかった。罠だ

としてもそれを逆に利用してやるつもりで呪架はいた。

返り討ちにしてやる。

呪架の心はさらに闇に堕ちていったのだった。

第3章 冥府の母(1)

雨の中を傘も差さずに呪架は歩いていった。

マドウ区は女帝のお膝元とも云われ、魔導産業で栄えた街だ。

外から魔導師たちの移民も多く、居住地区と産業地区に分かれている。居住地区の一角は魔導成金の屋敷が立ち並び、ゴシックやバロック建築などの芸術性に富んだ屋敷も多く見られる。

呪架がやって来たのはマドウ区がもつとも魔導区らしい場所。

毒々しい紫や桃色の煙を立ち昇らせる煙突や、危険な香りを孕んだ空気。

雨水が流れ込む排水溝では、スライムに酷似したブラックウーズが溝から外に這い出す光景も見られた。

呪架が足を止めた前には小さな個人病院があった。

マルバス魔導病院。魔導街の住民ならば誰もが知る病院だ。病気の治療のみならず、悪魔の業を持った院長が肉体の機械化や妖物との合成もやってのける。

呪架はすでに下調べはしていた。

ここでならば、異形化した腕を治せるかもしれない。

待合室には生きた人間はおらず、棲み憑いた亡霊の数の方が多かった。

受付の看護婦の顔は魚の鱗で覆われていた。

その程度で恐れる呪架ではない。

ちょうど今の時間は患者が居らず、呪架はすぐに診察室に通された。

診察室は手術室と同じ部屋で、部屋の隅に置かれたデスクに白衣姿が背を向けて腰掛けていた。

丸椅子を回して医師が顔を向ける。

気高い獅子の鬘を生やしたその顔は獅子そのものであった。

靴を履いていない足は蹄が見えている。

半獣人として有名なマルバス院長に間違いなかった。

院長の向かいの椅子に腰掛けた呪架はローブの袖を捲くって異形の腕を見せた。

「この腕を人間の物に戻して欲しい」

「なかなかうまく合成だ。どこの病院で手術した？」

異形の腕を触りながらマルバスは感心したように嘖れ声で言った。

「違う。空間を飛ばされたときに事故でこうなった」

「狭間 に棲んでおる怪物のことか？」

「詳しいことまでは知らない」

「このままでも十分に美しいと思うが？」

「冗談じゃない、俺は傀儡士だ。元の腕に戻さなきゃ戦えない！」

椅子から立ち上がって呪架が激怒した。それに対抗してマルバスは牙を覗かせ気高く吼えた。百獣の王の顔に相応しく、その咆哮は威厳に満ち溢れていた。

心を鎮めて呪架は再び椅子に腰掛けた。腕を治してもらわなければならぬ。こんなところで揉めている場合ではない。

「怒鳴って悪かった。けど、俺には元の腕が必用なんだ」

「クグツシとは闇の傀儡士のことか？」

「知っているのか？」

呪架は傀儡士が世界にどれだけいるか知らないが、あまりポピュラーなものではないと思っていた。

「知っておる。裏の社会では魔人蘭魔の名は有名じゃった。そうだな、最近では二〇年ほど昔に紫苑という傀儡士の殺し屋と会ったことがある」

「紫苑？」

祖母の名前だ。もしかして祖母も傀儡士だったのか？

すかさず呪架は訊いた。

「どんな奴だった？」

「白い仮面を被っておって、中性的な声を発するので男とも女ともつかない、魔性の者だった」

ダーク・シャドウ あいつが紫苑なのか？

違う、祖母の魂は 裁きの門 の奥にあるはずだ。

悩む呪架にマルバスはさらに悩みを与える発言をする。

「実は蘭魔にも会ったことがあっての、紅いトンビコートが印象的な男じゃった」

鮮やかに紅い姿。

「トンビコートってどんなのだ？」

「コートとケープは一体化した物で、インバネスなんて呼ばれ方をすることもあるな」

その説明を受けても呪架は理解に苦しんだが、それがダーク・シャドウの姿だと直感した。

ならばダーク・シャドウは蘭魔なのか？

もうひとり、呪架は紅い男を知っていた。

セーフィエルに送られた精神界で出会った紅い男。

悩んでいる呪架の顔をマルバスは先ほどから注視していた。

「もしかして、お主は愁斗の子か？」

これに呪架は驚いた。

「お父さんを知っているのか？」

「あの男の治療をしたことがあっての、代償として『両腕』をもらった」

「なんだって？」

傀儡士の父が両手を代償に払うわけがなかった。

「ただし、死んだあとで良い約束じゃった。その腕がこの病院にある」

「まさか……お父さんが死んだのか!？」

「儂自ら死んだ愁斗の腕を切ったので間違いない」

二親ともこの世にはいない。父親の顔など知らないが、死という結末は呪架にとって衝撃的なものであった。

呆然とする呪架を残してマルバスが姿を消したかと思うと、金属製のケースを持って帰って来た。

「冷凍していた愁斗の右腕じゃ。これをお前の腕に付けるぞ」

「サイズだつて違うはずじゃないか」

「重要なのは霊気の相性じゃ。サイズの調節ができぬようでは、一流の魔導医とは言えぬ」

「わかつた、お前の言葉を信じよう。けど、手術に失敗したらおまえを八つ裂きにしてやる！」

すぐに手術は行なわれることになり、血は出ないが邪魔なローブを脱げとマルバスに言われ、呪架は逆らわずにローブを脱ぎ捨てた。ローブの下はほぼ裸だった。上半身はなにも着用しておらず、下は『こちら側』に来てから手に入れたスパッツを穿いていた。

女だということ晒してしまったが、今は腕を治してもらうことが重要だった。

冷たい手術台に寝かされた呪架の腕にメスが入ろうとしていた。

「麻酔はないのか？」

尋ねる呪架にマルバスは笑った。

「痛みはない。血も出ない。メスを入れる角度と切り方にコツがある。あとは僕の魔力じゃな」

鋭いメスが異形と人間の境に入る。痛みはなく、血も出ていない。神業ではなく、噂どおりならば悪魔の技だ。

手術は一〇分足らずで終わった。

新しい腕は完全に呪架の軀に融合していた。傷痕が微かに残っているが、数日で消えてしまいそうな痕で、動かしても痛みはない。

もしかしたら前よりも使い勝手がいいかもしれない。指先の繊細の動きが前にも増して切れがある。

手術の代償をまだ訊いていなかった。この医師は金ではなく、別のモノを要求すると云う。

「この手術の代償はなんだ？」

「僕はこの手術をする前に、ある者と契約を交わしておった」

呪架には思い当たる節があった。畏かもしれないと思ってここに来た。やはりその通りだったようだ。

「僕の虫籠に入ってもらおう」

「虫籠ってなんだ？」

マルバスは答えずに指を鳴らした。と、同時に呪架が消失した。

第3章 冥府の母(2)

呪架は刹那に巨大な檻の中に移動させられていた。檻というのは語弊があるかもしれない。そこは大きな 虫籠 だった。

木枠の向こう側には果てない灰色が広がっている。

呪架は人ならぬ気配を感じた。

予期していなかった事態が呪架を待ち受けていたのだ。

傀儡エリス。

壊れたボディーパーツは直され、質素なドレスを着せられている。

「なぜここに？」

エリスの躰が動き出した。

誰が操っているのか、それは愚問であった。

妖系が放たれた エリスの手から。

直ちに放たれる呪架の妖系がエリスの妖系を相殺し損ねてしまった。

呪架の頬に奔った紅い筋。

傀儡士の傀儡とは技を増幅させる装置である。エリスに組み込まれたコード戦術はセーフィエルの手によるもの、傀儡士と傀儡の関係には本来ないものだ。真物の傀儡士は傀儡に妖系を使わせる。

エリスが人では成しえない距離を跳躍する。傀儡士ができない運動を傀儡にさせる。

そして、人間の限界を超えたスピードでエリスが妖系を放つ。

呪架は横に飛びながら妖系を放ちエリスの妖系を斬る。だが、斬られた妖系はそのまま飛び続け、呪架が元いた場所を切り刻んだ。横に飛んでいなければ、また傷を負わされるところであった。

「ダーク・シャドウ姿を見せる！」

呪架の声がただ響いただけ、答えは返ってこなかった。

傀儡を操る影の姿はこの場にはない。これこそ真の傀儡士の戦闘法。自らの肉体を酷使する必要はない。

しかし、傀儡士には別の戦闘法もある。選ばれた傀儡士のみが行なえる奥義。

エリスの手から 悪魔十字 が放たれた。技が遅い。

両手から呪架が四本の妖系を放った。

六本の妖系と四本の妖系が空中で激突し、相殺した。

呪架は気付いた。

なにか可笑的い。

エリスの技は呪架の技を越えている。それなのにエリスの攻撃はすべて様子見。攻撃と攻撃の感覚も長く取られている。連続して妖系を放つなど容易いはずだ。

地面を蹴り上げ呪架が跳躍しようとした。が、足が動かない。まるでなにかに縛られたように動かなかった。

「しまった！」

畏が仕掛けてあったのだ。

足どころか、胴体も首も動かせない。動かせたのは『右手』だけ。不可解としか言いようがない。

敵は傀儡士。傀儡士が傀儡士のことを知らぬわけがない。狙うならば『手』のはずだ。

なにかを思い出したように呪架の右手が自然と動き出す。

宙に描かれる奇怪な魔法陣。

闇 と妖系を自在に操る傀儡士の魔導。その奥義こそが傀儡召喚。

召喚とはそこにいながらにして、時間と空間を超越し、超常的な力を持つ異界の住人をこの世に呼び寄せること。そして、それを使役することができれば、あらゆる望みが叶えられると云われている。

操り人形たちは傀儡師の合図ともに踊り出す……。

「俺は召喚を理解したぞ！」

不気味に輝く魔法陣の『向こう側』で それ が呻き声をあげた。

それ の呻き声は空気を振動させ、音波は 五芒星 の存在を創り出した。

五芒星 の中心で一つ目が瞬きをしている。けれど、五芒星は凶形にしか見えない。これを生物と定義するのは難しいだろう。眼をカツと開き 五芒星 が全体から蒼いオーラを発した。発射される魔導砲。

宝石の如く煌びやかに輝く光線が 五芒星 の眼から放たれたのだ。

刹那にしてエリスは光に呑み込まれ、眩い光が去ったあとにはエリスの破片すら残っていなかった。

エリスが完全消失したことにより、呪架を縛っていた妖系が消えた。

自由を得た呪架だが、危機はすぐそこまで迫っていた。

五芒星 が回転しながら移動し、その魔眼を呪架に向けたのだ。今の呪架には『向こう側』の存在は召喚するのみ。操りきれない野放しの存在は術者に襲い掛かる。

呪架の『右手』に眠る記憶。

妖系が空間に傷をつくる。

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

「喰らえ！」

闇 が触手のように伸び、 五芒星 の凶形に入り組むように絡みつく。

蒼く輝き出す 五芒星

勝つのは 闇 か 五芒星 か？

裂け目に引きずられまいと、必死に 五芒星 は抵抗しているように見える。

だが、終幕はあつけないものだった。 五芒星 は全体を 闇 に包まれ、闇色の裂け目に吸い込まれるようにして還っていった。轟々という音を立て、空間の裂け目は閉ざされた。

父 愁斗の『右腕』が覚えていた記憶。

召喚術を会得した呪架。

しかし、その代償は自らの手で創造した傀儡エリス。母殺し。

呪架は両手で鷲掴むように体を押さえた。

闇 による侵蝕が加速している。

目的を達成するよりも早く肉体が朽ち果ててしまいかもしれない。召喚は諸刃の剣。

「クソッ！」

吐き捨てた呪架の躰が霞んだ。

「なんだ!？」

虫籠 から消失する呪架。

次の瞬間、呪架はビルの屋上に吐き出されていた。

雨が呪架を殴りつける。

屋上から呪架は誘われるように彼方を眺めた。

視線の先は灰色の空が広がっている。隠された景色にあるものは死都東京。

腕を治した呪架はついに死都東京へ向かうことを決意した。

果たして死都で呪架を待ち受けているものとは？

第3章 冥府の母(3)

帝都政府は新たな動きを開始しようとしていた。

まだ政府が設立して一〇〇年も経っていないが、その歴史の中でも今回の事件は大打撃であった。

対策として早急に対処したことは、セーフィエルに帝都中枢夢殿へ侵入されたことにより、警備システムの見直しや ゆらめきの徹底検出が行なわれた。

次いで、帝都に恨みを持っている呪架に逃亡されたことも問題だ。また人の多い繁華街で暴れたら帝都の威信に関わる、

そして、もっとも政府が危惧したのはダーク・シャドウのことであった。

マスコミへの発表は完全にシャットアウトされた。

今日の定例記者会見場は荒れていた。

ホウジュ区に機動警察が出動し、ワルキューレが出動したらしい件について。

夢殿の方角で爆発音や閃光が見え、恐ろしい魔獣の遠吠えが聴こえた件について。

帝都全域を襲う怪奇的な地震について。

ワルキューレのスポークスウーマン　フィアが四苦八苦しながらも、今日もお得意の嘘と言いついで記者達を煙に巻いた。

「では、失礼します」

と、フィアは足早に会見場から逃げようとしたが、押し寄せて来た記者たちにスーツを引っ張られ、揉み合いになるというワンシーンも垣間見られた。それだけ帝都の人々は危機を感じているのだ。

報道陣との会見を済ませ、フィアは早々にヴァルハラ宮殿に戻って来た。

フィアは円卓に座る女帝とズイーベンの元へ駆け寄って愚痴を溢す。

「胃薬を飲まなきゃやってられせんわ！」

「そんなのアタシだって同じだってば」

と、女帝も愚痴を溢した。

夢殿内で起こった事件は前代未聞のこと。今までも帝都の街で大きな事件が起き、帝都滅亡の危機も幾度かあったが、夢殿に敵があんなにも簡単に入って暴れられるとは、許しがたいことだった。

女帝が足をじたばたさせて子供のように怒り出す。

「もおゝツ、これもみんな ゆらめき が悪いんだよ。しかもだよ、なにあのダーク・シャドウってウザイ奴、ぶんすかぶんだよ！」

呪架がセーフィエルによって空間転送されたのち、ダーク・シャドウが『向こう側』の魔神を呼び出し、セーフィエルは隙を見て逃亡。夢殿内にある多くの建物が壊され、大地にはいくつもの穴が開いた。

最後まで戦っていたアインは重傷を負わされて、戦いに参加した近衛兵たちは全員死亡、女帝とズイーベンが駆けつけたときには、そこは死の荒野と化していた。

唯一の軽症者は慧夢だった。けれど、その慧夢も謎の昏睡状態に陥ってしまったて、今も謎の眠り落ちてしまっている。

この事件を受けて、ついに女帝は全ワルキューレメンバーの招集を号令した。

だが、戦闘特化タイプのアインとフუნフを欠いてしまっている今、戦力不足は否めなかった。

残りのワルキューレは七名。

女帝は難しい顔をしながらズイーベンに尋ねる。

「ツヴァイとアハトはどのくらいで帰国できそう？」

「ツヴァイは三日ほど、アハトは天候がよければ五日ほどでございましょうか。二人ともあまり交通の便がよろしくない場所に派遣されていますゆえ、すぐの帰国は難しいように存じます」

「海外派遣組み二人はいいとしてさ、ドライはどこでなにやってんの！」

女帝は怒鳴り声をあげた。

「ドライは風来坊でございますから、今もどこになにをしているのやら、通信機すら持たないで出かけておりますので……」

ズイーベンが苦笑しながら言った。

ここでファイアが提案する。

「ドライの躰にこっそり発信機を埋め込むというのはどうでしょう？」

この提案にズイーベンがすぐに否定した。

「それは前にも試みたのでございますが、肉を抉って見事に取り出されてしまいました」

「次は脳ミソにでも生めてやれ」

毒々しく女帝は吐き捨て、他のメンバーについて尋ねる。

「フュンフはどのくらいで現場復帰できそう？」

ズイーベンがすぐに答える。

「フィンフは半日ほど、アインは一日以上とゼクスに聞いてございます」

会議室にもおらず、名前も挙がっていないワルキューレは残り一人。永久欠番のノインだ。

もし帝都でなにか起きた場合、ズイーベンは女帝の元を離れられない。

今、この帝都で自由に動けるのはファイアとゼクスだけだった。

しかし、ゼクスは引きこもりで有名で、滅多なことでは研究室を出ない。

女帝の目がファイアに向けられた。

「今度、帝都で大事件が起きたらファイアが行くんだよ」

丸い眼をしてファイアは慌てた。

「そんな、あたくしが最後に武器を握ったのは聖戦のとき以来ですよ。妖物くらいなら相手にしますけど、アインを倒したダーク・シヤドウが再び攻め込んできたら、一目散に逃げさせてもらいます」

ワルキューレのメンバーはこんな調子で、切り札の『メシア』も

謎の昏睡状態である。女帝は唇を噛み締めた。

「傀儡士の召喚は使いようによったら、アタシたちの力なんて遙かに凌駕する。闇の子にそんなすっごい傀儡士が味方するなんて、ばか、ばか、ばか！」

急に女帝は真剣な顔つきになってひとつ咳払いを置いた。

「いざとなったらアタシが覚醒めるから」

慌ててズイーベンが声を荒げた。

「それは危険すぎます！」

フィアも慌てた。

「又ル様がお覚醒めになるということは、闇の子も覚醒めることになるのですよ！」

慌てふためく二人に女帝は静かに口を開いた。

「いつか必ず来る戦いだから、それをアタシから仕掛けるというだけのこと……。わかってるよ、まだ時期尚早なことは。せめてゼクスに戦闘用の義体を用意して置くようにと伝えて置いて」

女帝の今の躰が義体なのだ。本物の躰は夢殿にある。名も無き大聖堂で眠りに堕ちている。

女帝又ルこと、光の子が目覚めるとき、闇の子も同時に目覚める。その逆も同じだ。

「次にアタシと妹が戦うときがラグナロクかもしれないし、まだ一〇〇回ぐらいやるかもしれないけどさ、必ず近いうちに小さな戦いはあると思うよ」

それはわざわざ女帝が口に出さなくとも、ワルキューレは心得ていた。

帝都全体を襲うヨムルンガルド結界が起こす地震もまだ続いている。

ズイーベンが神妙な面持ちで眼鏡を直した。

「わたくしの『ダーク』の面が強くなっております。裁きの門

もしくは、タルタロスで問題が発生しているのかもしれない。あの場所に入り、脱出ができるのはセーフィエルとノインとエリス

の三人だけですが、もしかしたら人間との混血も……」

それは呪架、慧夢、愁斗の三人のこと。

一度、足を踏み入れれば永久の囚われ人となる 裁きの門。脱出できるのは三人だけのはずだが、呪架もできるとすれば 裁きの門 に行こうとしている可能性は高いとズイーベンは考えた。

現に、今このとき、呪架は死都東京へと向かっていたのだ。

問題は 裁きの門 とこの世がもっともリンクしている場所にある。そこがわかっていながらも、帝都政府は手が出せない状況にあったのだ。

なぜならば、そこに 篝星 があるから。

第3章 冥府の母(4)

曇る空から小雨が降って来る。

昨日から帝都でも雨が降り続けているが、この場所でも雨が降っていた。

都という華々しさはここにはない。

呪架は死都東京に来ていた。

死都と言っても復興の進んでいる地域と、まったく手の付けられない地域では落差があり、東京都下や二三区の端の復興は目覚ましい。

それとは対照的に、東京都の中心都市であった新宿区付近は死都街と呼ばれ、復興どころか悪化の一途を辿っている。

魔物や異形が跋扈し、異世界の植物がジャングルを形成し、底なし沼から瘴気を噴出している場所もある。

呪架は 篝星 の墮ちた旧千代田区に向かっていた。

篝星 は落下時に直径約五〇〇メートルのクレーターをつくり、すでにその周りには短期間で見たこともない植物でジャングルを形成していた。

しかも、その範囲内よりも大きい直径一キロに防護フィールドが張っており、帝都政府も日本政府も科学者たちでさえ中に入れない状況だった。

死都東京は帝都が領有権を主張できない。復興の資金は帝都から主に出されているが、元々の領有権を持っている日本が瓦礫となってもその土地を見捨てなかったのだ。東京大空襲や原爆投下、関東大震災が起きても復興をして来た民族だ、自分たちの土地を手放すはずがない。

そもそも帝都エデンですら、日本は自分たちの領土だと主張し、国際社会からも正式に独立国と認めてもらっていない。ここ数十年の間、帝都と日本は冷戦状態にあるのだ。

幕星の周りは日本政府と帝都政府が対立しながら包囲している。呪架は厳重な警戒をしている帝都政府ではなく、手薄な日本政府の包囲を突破することにして、『向こう側』で身に付けた身を潜める方法で見事に突破した。

防護フィールドは半透明状の膜のようであり、ドーム状に中を覆っている。

この位置から見える中は密生したジャングルだ。青々と草木が生い茂り、一メートル先も見通せない。

呪架は防護フィールドに様子見で妖系を放った。

妖系はフィールドに当たった瞬間、勢いを緩和されて絹糸のように地面に落ちた。それを見て、呪架はゆっくりとフィールドの表面に触れてみた。

水面に雫が落ちたように波紋が立つ。

少し押す力を強めると、水に吞まれるように呪架の躰がフィールドを通過した。帝都や日本が手をこまねいていた防護フィールドを、呪架はいとも簡単に抜けてしまったのだ。その理由はまだはっきりとしない。

ジャングルの中に入った呪架は妖系で道を阻む植物を切り、蛇行することなく真っ直ぐ中心部へと向かった。

このジャングルには動物などの気配はなかった。けれど、呪架はずっと誰かに見張られているようで、禍々しい殺気も感じていた。それがどこから発せられている殺気なのか、漠然としてはっきりしないのだ。

どこから発せられる殺気が呪架が気付いたときには、呪架は鋭い鎌に襲われていた。

鎌のように鋭い植物の葉が呪架に襲い掛かったのだ。

葉の強度などたかが知れている。妖系の前では植物など敵ではない。呪架を襲った植物はあっさりとは切り刻まれた。

しかし、呪架は問題に直面した。

意志を持って動く植物はひとつやふたつではなかったのだ。

呪架はジャングルに足を踏み入れた瞬間から、敵に囲まれていたのだ。

植物の葉や幹が呪架に魔の手を向ける。

呪架が妖系を振るいながら全速力で疾走した。

ぬかるんだ地面から蔓が伸び呪架の足首を掴んだ。

地面に手を付いて倒れた呪架に覆いかぶさる影。食虫植物が一メートルもある口を開けて呪架を呑み込もうとしていた。久しぶりの獲物に消化液を垂らしている。

呪架は妖系で食虫植物の茎を落とし、足に巻きついていていた蔓を切り刻んで立ち上がる。

間も置かずに呪架は魔法陣が描いた。

それ の咆哮は植物たちをも震え上がらせ、その隙を衝いて呪架は『向こう側』からあるモノを召喚した。

「我が行く道を焼き尽くせ！」

それ の熱い吐息が世界に炎を纏った紅蓮の怪鳥を羽ばたかせた。

召喚された 火の鳥 の尾に呪架はすぐさま妖系を巻きつけた。

火の鳥 が羽ばたくと火の粉が舞い散り、 彗星 の中心部へと向かって飛びはじめた。

植物の楽園は刹那に火の海に包まれ業火で焼かれていく。

このジャングルの中心部には大空洞が口を開けていた。

火の鳥 は比較的に操り易いようで、呪架の意志に従って大空洞をゆつくりと滑空していった。

深さはおよそ七〇メートル。

底に足を付いた呪架は 火の鳥 の尾から妖系を解き、すぐさま妖系で空間に闇色の裂け目をつくった。

闇 の出る幕もなく、自らの意志で 火の鳥 は『向こう側』へと還っていく。

呪架の目の前にあるごつごつとした岩石の塊。大きさは二〇メートルくらいだろう。それにはなんと扉がついていた。

扉の前に呪架が立つと、手も触れていないのに左右に開かれ、呪架を中へと導いた。

外觀は隕石そのものだったにも関わらず、中はどこかの宮殿に来てしまったと目を疑ってしまう。十八世紀にフランスで広まったロココ様式の家具で、部屋は美しく埋め尽くされていたのだ。

唐草模様や貝殻模様を施された曲線美を生かした家具。

繊細で優美なテーブルと椅子に腰掛け、セーフィエルは優雅にティーカップを片手に呪架を出迎えた。

「いつかは辿り着くじやろうと思うて、ここで待って居った」

「お前のせいで酷い目に遭った」

「夢殿から脱出できたのは誰のお陰じゃ？」

「うるさい。腕のことも、傀儡だって壊れてしまったんだ」

「傀儡が壊れたじゃと？」

呪架が自ら葬ってしまった。だから呪架は黙り込んだ。そこからセーフィエルがなにを感じ取ったかわからないが、彼女はある致命的なことを察していた。

「傀儡をつくり直すにしても、汝の躰が持たぬじやろう。妾の心眼から見れば、今そこに立っているのも奇跡にじや」

「裁きの門は近くにあるんだろ？ だったら、すぐに傀儡も必用になるはずだ」

エリスの魂を ジュエル 化して、傀儡に埋め込むことが呪架の目標だ。傀儡は絶対的に必用不可欠なものである。

「妾に心当たりがある」

「なんのだ？」

「汝のつくる傀儡よりも上質な傀儡があるはずじゃ。妾はそれを取りに行く」

過去にある男と共同研究をしていたときの傀儡が、おそらく残っているのではないかとセーフィエルは踏んだ。

呪架は間を置いてから頷いた。

「わかったお前に任せる。けど、裁きの門はどこにある？」

「この場所の真上がもつとも 裁きの門 に近い場所じゃ。ただし、物理的にではないために、問題が少々ある」

セーフィエルは柳眉を顰めて話を続ける。

「門を開けられるのは 裁きの門 つくった妾か、妾の血を引く者のみ。加えて中に入って、再び外に出ることが可能なのも同じ。ただし、最大問題は 裁きの門 をこの世に召喚できるのは女帝とワルキューレのみなのじゃ。シオンがワルキューレじゃった頃は、シオンが 裁きの門 の管理を任されておった」

そうなると 裁きの門 をどうやってワルキューレに召喚させる？ まさかワルキューレが協力してくれるはずもなく、不可能に近いことを実現しなければならなかった。

異様な魔気が部屋に充満した。第三者の気配だ。

「その役目、私が引き受けよう」

「ダーク・シャドウ!？」

思わず呪架は声を荒げた。

紅いインバネスを翻し、敵意がないことを示してダーク・シャドウは席に着いた。

「私はおまえたちと争うつもりはない。手を貸そう」

「争うつもりがないだと!」

飛び掛らんばかりの呪架をセーフィエルの長い腕が止めた。

「待て、呪架。ダーク・シャドウとやら、汝にはなにか良い手立てがあると申すのかえ?」

「ある」

御託を並べず短く答えた。

セーフィエルは頷いた。

「汝に任せることにしよう。良いな呪架?」

「ふざけるんじゃないやねえ、こんな奴の手を借りる必要なんてない!」

「妾たちには手立てがない。彼奴の手を借りるしかあるまい」

「……クソツ、好きにしろ」

吐き捨てて呪架は背を向けた。

セーフィエルは呪架の肩を引つ張り自分に向かせ、部屋の奥にある扉を指さした。

「向こうの部屋に肉体を再生させる装置がある。今の汝には気休めじゃが、まだまだ過酷な戦いが待っておりでな、少し躰を休めておくのじゃ」

闇 に犯された躰は肉体的な治癒だけでは完治できない。

「わかったよ、俺は言うこと聞いてりやいいんだろ」

「なら、向こうの部屋に入って待って居れ」

「クソツタレめ！」

吐き捨てて呪架は隣の部屋に入り、ドアを力いっぱい閉めて消えた。

残されたセーフィエルとダーク・シャドウの間には、異様な空気が取り巻いていた。

セーフィエルの黒瞳が白い仮面の奥の瞳を見据える。

「女帝やワルキューレどもが入れぬここに、どうやって入ったのかえ？」

「答える必要はない。けれど、私はあなたの知りたい情報を知っている アリスの居場所だ」

「ようわかったの」

「アリスは秋月蘭魔の隠れ家の隠し部屋の、さらに隠し部屋の奥で眠っている」

「……やはり」

呟くセーフィエル。

そして、別れも挨拶もなく、ダーク・シャドウは空間を切り裂き、闇色が広がる世界へ消えた。

第3章 冥府の母(5)

セーフィエルは山奥にある屋敷にやって来た。

呪架とはじめてあった場所もこの屋敷の前だった。

屋敷の中にある第一の隠し部屋の場所はセーフィエルも知っていた。

書庫の本棚の後ろに隠された階段を下り、地下に降りた場所が第一の隠し部屋だ。

ダーク・シャドウは『隠し部屋の、さらに隠し部屋の奥で眠っている』と語ったが、ここから先はセーフィエルも知らない。

石造りの壁に囲まれた地下室はひんやりとした空気が流れていたが、一箇所だけ空気の流れが違う場所があった。空気というかエネルギーといった方が正しいかもしれない。

部屋の奥に立て掛けられていた姿見の鏡。鏡といっても、現代にあるようなものではなく、銅鏡のような金属を磨いてつくった鏡だった。

この鏡に秘密があると感じてセーフィエルは纖手を伸ばした。

鏡に触れた指先が鏡の中に没した。

これが ゲート であると悟ったセーフィエルは鏡の中に飛び込んだ。

凍える吹雪を躰中に浴びて、セーフィエルは瞬時に腕で顔を隠した。

白銀の大地や、壮観な白い山脈は見えない。ただ、視界を白が遮っている。

雪山かどこかに一瞬にして来てしまったようだ。

セーフィエルの背後で唐草模様を施した扉が閉まる音が聴こえた。薄手の黒いナイトドレスに吹き付ける白い雪。黒が白に侵されてしまいそうな猛吹雪であった。

セーフィエルは凍える仕草も見せずに、膝まで埋まる雪を踏みし

めて歩いた。

方角もわからず、視界も頼りにならないこの状況で、セーフィエルは強く感じていた。求めているモノに、呼ばれているような気がするのだ。

前方から気配がした。

視覚ではなく気配で動くものを感じる。

雪の中に潜んでいた獰猛な生物が、次々と雪粉を舞い上げながら飛び出した。その数はおよそ三匹。

セーフィエルの視覚には見えていないが、その生物は長く白い体毛に覆われた霊長類であった。ひと言で例えるならば、雪男というイメージがわかり易いだろう。

臭い雄共の気配がすぐそこまで迫っているのを感じ、セーフィエルは鉄扇を構えて優雅に舞った。

吹き荒れる吹雪が一瞬だけ鉄扇を仰いだ方向に飛ばされ、餓えた雪男どもの突進を妨げる。

だが、こけおどしなど時間稼ぎの方法でしかない。

体勢を立て直した雪男どもが再びセーフィエルに飛び掛る。

セーフィエルは汗を掻いていた。氷点下の大気に包まれながらも汗を流し、その汗を蒸発させて空気中に溶かす。

妖艶で芳しい香が雪男どもの鼻をくすぐり、血を煮えたぎらせて極度の欲情が襲う。

誘惑魔法 テンプテーション だ。

「妾を巡って血の争いをするが好い」

セーフィエルの魅言葉に誘惑され、興奮した雪男どもが仲間同士で争いをはじめた。

雪男どもは鉤爪で肉を裂き、互いの肉に噛み付き、飛び散った血飛沫はすぐに雪で隠される。力尽きた死骸も雪に埋まる運命であった。

もうセーフィエルは雪男に目もくれない。流れ逝く過去の幻影。過去は終わっているから過去なのだ。

雪の大地は決して平坦ではなく、歩く感じでは山を思わせた。過酷であるはずのその道を、セーフィエルは表情ひとつ変えずに進んだ。

やがて、セーフィエルの前に雪の壁が立ちはだかった。

壁伝いに歩いていると、巨大な洞窟を見つけられることができた。

洞窟の入り口は吹雪が吹き込んでいたが、中へ進むに連れて雪は姿を消し、代わりに暗闇が世界を包んだ。

闇の中でも目が見えるセーフィエルはさらに奥へと進んだ。

分かれ道のない真っ直ぐな道を進み、行き止まりまで来ると、そこには扉を守るように巨大な戦士の石造が立っていた。

甲冑の細部まで彫り込まれた石造は、雄々しく立派な出で立ちで、鞘に入った長剣の柄を握り締めていた。今にも剣を抜いて襲い掛かって来そうなポーズだ。

石造に向かってセーフィエルは鉄扇を構えた。

襲って来ると感じた。

早い！

抜きの一太刀がセーフィエルの腹を薙いだ。

まるで侍のような剣の抜き方。

後ろに飛び退いて辛うじて致命傷を避けたセーフィエル。斬られたドレスの下からどす黒い血が滲み出している。

『動く石造』の間合いに入っていたのが失敗だった。

すでに斬られた傷は瘡蓋になっているが、肌の傷はプライドにも傷をつけていた。

セーフィエルの血の饞別を受けた『動く石造』の長剣は溶けはじめていた。魔導の実験を重ねたセーフィエルの血は、毒性を含み、強い酸も含んでいたのだ。

それでも『動く石造』は長剣をセーフィエルに振り下ろそうとしていた。

見上げるほどに高い位置から振り下ろされた長剣の一撃。

セーフィエルは鉄扇で長剣を受け止め、力を逃がしながら躰を移

動させ、高く飛び上がり長い脚から廻し蹴りを放った。

『動く石造』の頭が飛んだ。

首を失っても『動く石造』は動き続け、太い腕を伸ばしてセーフィエルを掴もうとする。

柔軟な身のこなしでセーフィエルは敵の攻撃を躲し、後ろに廻り込んで『動く石造』に刻まれた文字を背中で見つけた。へブル文字で刻まれた『真理』を意味する言葉。

セーフィエルの鉄扇が『動く石造』の背中を斬る。

一文字削られた『真理』を意味していた文字はたちまち『死』変わり、『動く石造』は木つ端微塵に砕け散ったのだった。

伝承が正しければ三三年後に復讐のために復活するというが、セーフィエルにとっては気にするほどのことでもあるまい。

砕けた石造の中から一本の鍵が出てきた。

セーフィエルは鍵を拾い上げて奥の扉に差し込んだ。

鍵は音を立てて、閉じられていた扉が大きく開く。

薔薇の香が鼻の奥を衝いた。

大量の紅い薔薇に囲まれた柩がそこには安置されていた。まるで血の海に死んでいるようにも見える。壮観な雰囲気醸し出している。

柩の蓋は硝子できており、セーフィエルが中を覗き込むと、氷の中で眠っているように、瞳を閉じた少女の安らかな顔をあつた。

染み一つなく透き通る白い肌、ブロンドの美しい髪、カールした長い睫毛、高い鼻梁の下で瑞々しい唇が口を噤んでいる。まるで作り物のような端正な顔立ちの美少女が眠っていた。

セーフィエルは柩の蓋を開け、可憐なドレスに身を包む少女の頬に指先で触れた。

見た目は安らかな寝息を立てていそうなのに、その頬は氷のように冷たい。

傀儡の少女。

「……アリス」

セーフィエルはその名を呼んだ。
返事はない。

哀しい思いがセーフィエルの胸に込み上げた。
そつとセーフィエルはアリスのドレスを脱がせ、胸元を開いて息を呑んだ。

瞳を閉じたセーフィエルの目頭から涙が滲み出す。

アリスの胸に埋め込まれていた ジュエル は割れてしまっていた。
た。

蒼く美しい宝石のような ジュエル に輝が入り、その力を失ってしまったのだ。

アリスはセーフィエルの血の繋がった妹であった。

セーフィエルは黒髪、黒瞳。一族の者は皆そうだった。なのにアリスの髪はブロンドで、瞳の色は蒼かった。一族に生まれてきた突然変異。それでもセーフィエルはアリスを心から愛していた。

その妹をセーフィエルはある日突然失ったのだ。

死んだ妹を復活させるために、セーフィエルは秋葉蘭魔という男と傀儡の共同研究をした。

アリスが完成したのは、セーフィエルが銀河追放されたあとであった。だからセーフィエルは黄泉返ったアリスの姿を見ていない。

ジュエル に触れたセーフィエルにアリスの断片が流れ込んでくる。

黄泉返ったアリスは蘭魔の手によって、時が来るまで眠らされた。時は思いのほか、早く来てしまった。

目覚めたアリスの瞳に映る主人の姿は、蘭魔ではなくその息子の愁斗だった。

当時、抱いていたアリスの思いがセーフィエルの胸に届く。

アリスは愁斗のことを慕っていた。

傀儡として、召使として、主人との関係は一線を越えることはなかった。

セーフィエルの触れていた ジュエル が突然、粉々に砕け散っ

て蒼い粉が宙を舞った。

肉体が滅びても魂はある。けれど魂までも消滅した者は決して黄泉返らない。 ジュエル が碎け散ってしまっは、もう黄泉返れないのだ。

過去は終わってしまったから過去。

アリスの記憶の断片はすべてセーフィエルに吸収され、セーフィエルの想い出となった。

そして、セーフィエルはダーク・シャドウが何者かを知った。

第3章 冥府の母(6)

夢殿でもっとも科学技術と魔導技術が進んでいる場所。

合成金属の壁や床に囲まれ、無機質で機械的な色が濃い。

錬金術が化学の前身であるように、魔導と科学の結びつきは強い。この世界では科学技術が目覚ましい進歩を見せたために、女帝のもたらした魔導は科学の一部として組み込まれた。それが功を奏して、魔導は人々に受け入れられた。

縦長のガラス管にも似た生成装置の中は液体で満たされ、生まれのままの姿でアインは眠らされていた。

無駄のない柔軟な筋肉はある種の美しさを備え、一流の彫刻家が彫り上げた傑作にも見える。しかし、完璧とは言えなかった。

アインの両腕は生成途中で皮もなく、グロテスクな筋肉の繊維が生々しい。

スリープ 状態に入っているはずのアインの躰が微かに震えた。そのことにゼクスはまだ気付いてなかった。

赤いランドセルを背負った白衣の少女は、ツインテールの頭をじたばたさせながら、コンピューターゲームに熱中していた。

「うりゃ、とりゃ！」

肢体にセンサーをつけて、頭には3D映像を受信するスコープを被っている。

ゼクスの短い手足の動きに合わせて、ゲーム中でゼクスが操っているキャラが動く仕組みだ。

硝子の割れる音がした。ゼクスにはゲーム中のリアルサウンドか、現実の音が判断できなかった。

それが現実だと気付いたのは、電源プラグが抜かれ、ゲームが中断してしまったからだ。

スコープを投げ捨ててゼクスが叫ぶ。

「いいとこやったのに！」

ゼクスの灰色の脳細胞が瞬時に事件の重大さを理解した。

再生装置の硝子のハッチを壊し、まだ生成の終わっていないアインの姿を見た。

「なんでやねん！」

いくら脳の回転が速くても、軀を動かすスピードには反映されない。

神速で迫って来たアインの攻撃を避けられず、上段蹴りを側頭に受けたゼクスは横転した。

床に這いつくばったゼクスの目に映るアインの後姿。ゼクスは迅速に行動した。

赤いランドセルがオートで開き、中から誘導ミサイルが発射された。

アインの背中に迫ったミサイルは四散して、中から飛び出した捕獲ネットがアインを捕らえる。

ネットに絡め捕られたアインが転倒する。

帝都の妖物が吐き出す糸を元に開発されたこのネットは、特殊な溶解液でしか破壊できないはずだった。

だが、斬られたのだ。

治っていないアインの手から放たれた輝線の猛撃。

「なんやあれ？」

想定外の出来事にゼクスは目を丸くした。あんな技をアインは身に付けていないはずだ。

自分の手に負えないと判断したゼクスはアインから目を離し、壁に取り付けたあった緊急スイッチを叩き警報を鳴らし、続いて再生装置に浸かっていたフუნフを目覚めさせた。

再生装置の内部で水が抜かれ、全身を乾燥されてから、硝子のハッチが開かれた。

目覚めたばかりのフუნフにゼクスは早口でしゃべる。

「頭で考えるんやない、心で察しろ。アインが暴走しとるからとにかく捕まえてや！」

ゼクスの慌てようと、鳴り響く緊急サイレンの音で、なにか事件が起きていることは察しられる。

軀を十字に広げたフュンフに甲冑がオートで装着される。

「わかりましたです」

亜音速モードに入ったフュンフが研究室を飛び出した、

四角い廊下を駆け抜け、アインの行方を追う。

すでにアインは廊下の窓ガラスを割って建物の外へ逃亡していた。背中に巨大な翼を生やし、空を自在に飛ぶアインの前に廻りこんだフュンフ。

「アインさん、どうしたのですか？」

答えは煌く輝線で返って来た。

咄嗟にアインの放った妖糸を亜音速で躲すフュンフ。

その技が傀儡士のものであると瞬時に悟った。

傀儡士の急所は妖糸を繰り出す手だ。

「ごめんなさいです」

ホーリースピアを構えたフュンフが亜音速で一撃を仕掛けた。

人体模型のような筋肉剥き出しの腕が宙を舞って地面に落下していった。

片腕を斬られ血を噴出すアイン。だが、その血もすぐに止まる。

相手の片腕を落としたが、まだ一本残っている。それなのにフュンフは成す術をなくしていた。相打ちだったのだ。

ホーリースピアを持っていたはずの手が消失していた。

亜音速を使用して戦うときの条件は、亜音速モードのまま物体に触れてはいけないこと。車にぶつかるのと、ロケットにぶつかるのでは、どちらの衝撃が大きいかという問題だ。攻撃をする瞬間に亜音速を解くために、その瞬間に隙ができる。見事にそこを衝かれた。「病み上がりの軀には亜音速は堪えますです」

「ならば、もう少し休んでいる」

操られていても声はアインのままだった。それがとても無情に感じられた。

妖系が宙を奔り煌いた。

疲れて亜音速に入りきれなかったフュンフは攻撃を諸に受けてしまった。

背中の翼を斬り飛ばされ、地面にダイブするフュンフは叫んだ。

「目を覚ましてアイン！」

フュンフの声は小さく消えた。

三〇メートル以上もの高みから落ちては、フュンフの脳もただでは済まないかもしれない。

下が騒がしくなってきた。次の追っ手が来るのも時間の問題だ。

アインは翼をはためかせ、夢殿を覆っている防御結界の目の前で飛んで来た。

度重なる事件を受けて普段よりも強化されている結界だ。

アインであれば脱出は不可能。

しかし、今のアインはアインでアインでない。

アインの手から神速で飛ぶ妖系が結界に刃を向ける。

傀儡士の妖系は空間を断ち割る。

結界は妖系によって見事に傷をつくられ、二度、三度と放たれた妖系で人が通れる穴を開けられてしまった。

夢殿の結界を突破し、広い空へ羽ばたくアイン。

向かうは死都東京。

高速で飛ぶアインの行く手を遮る軍事ヘリを次々と墜落させ、ついにアインは 箒星 の上空まで来てしまった。

轟々と雲海が唸り声をあげた。

灰色に染まった天は雷光を奔らせ、 箒星 の周りを包囲していた関係者たちも、揃って空を見上げてしまった。

「アインの名において、 裁きの門 を召喚する！」

大空に雷鳴が轟き、雷光が天をいくつも泳ぐ。

神々しい輝きと共に天になにかが現れた。

それは巨大な門であった

裁きの門 光臨。

天に浮かぶ 裁きの門 は強烈な威圧感で場を萎縮させ、門の奥からは呻き声が聴こえてくるような気がした。

役目を終えたアインは糸が切れた操り人形のように、全身から力が抜けて地上へ落下した。

裁きの門 を開門できるのは、セーフィエルの血を引く者のみ。重々しい轟音を立てながら 裁きの門 が口を開く。

鼻を突く死臭が冷たい風に乗って恐怖を運ぶ。

開かれた門の奥に広がっているのは暗黒。その『向こう側』でなにかが蠢いている。

天は怒り狂い、雷撃を地面に墮とし、人々は脅え、天に畏怖する。

裁きの門 が開かれたそのとき、生成装置で眠っていた呪架が目覚めた。

時を同じくして、夢殿の地下で眠っていた慧夢も目覚めていた。

ヨムルンガード結界 が起こした地震の余波を受けて、帝都工デนมも荒れに荒れていた。

アスファルトを割って鎧を纏った蛇のような生物が顔を出す。

帝都の地下に張り巡らされた大下水道に生息していると云われる、大海龍の幼生が次々と繁華街やオフィス街に姿を見せたのだ。

ビル街を縫うように駆け巡る白銀の群。

白銀の毛並みを揺らし、三メートル以上もある野犬の群が暴れ廻り、手当たり次第に人々を襲って肉を喰らっていた。

人々は逃げ惑い、交通網まで麻痺してしまった。

帝都政府は対応に追われ、傷を負っているながらもフュンフは戦い、スポークスウーマンのフィアも狩りに出され、単独行動をしていたドライは二丁拳銃を乱射し、ゼクスは数年ぶりに夢殿の敷地内を出た。

そして、死都東京では、呪架が 裁きの門 へと突入しようとしていた。

第3章 冥府の母(7)

地獄。

そこはまさに地獄のごとき場所だった。

天は赤く燃え揺れ、ガス状の暗雲が流れながら渦紋を巻く。

岩肌を剥き出しにした渴いた大地には、大きく口を開けて深奥まで続く亀裂が走り、延々と続く遙か先には溶岩を噴出す群山が眺めた。

この世界のどこかにエリスがいると呪架は直感した。

ついにエリスのアニマを ジュエル 化させて、自分たちの世界に持ち帰り、黄泉返らせることができる。絶望だらけの日々に、光明が見えて来たかもしれない。

しかし、なにかに拒否されている。そんな力の働きも感じた。

後ろを振り返ってみると、入って来たはずの 裁きの門 は消えていた。

裁きの門 は一方通行であり、元の世界に戻ることは本来なら不可能なのだ。

呪架は足元から噴出した熱い蒸気を後ろに跳躍して躲した。

遠雷に混じり、呪架の耳には妖異たちの呻き声が聴こえていた。

瘤だらけの赤い巨軀を持つ人型の鬼。

長い体毛を軀中に生やし、老婆のような顔を持った化け物。

四つ足の凶猛な野獣も多くいる。

呪架に殺到する怪物の荒波。

群から飛び出した巨大な怪鳥が、呪架の頭上に目掛けて滑空して来た。

鋭利な鉤爪を前にして呪架は全く動じない。

この感覚は久しぶりだ。血が煮え滾る熱い死闘。『向こう側』での生活が思い出される。

狩りの時間だ。

呪架の放った煌きが怪鳥の躰を断絶した。

数え切れない獲物の姿を凝視して、呪架は両手から次々と妖系を雨のように放つ。

激しい演奏を指揮する指揮者のごとく、躰全体を大きく動かして妖系を振るう。

敵は次から次へと蛆のように湧いて来る。だんだんと呪架の手が捌き切れなくなって来た。

一掃する手はあるが、それを使う判断は正しいか？

もう、目の前にエリスがいるはずだ。ここで使わなければ、いつ使うのだ。

呪架の深い黒瞳が、より深く闇を帯びた。

敏速に動いた呪架の指先から、煌く線が放たれる。

その輝線は空に奇怪な紋様を描く 魔法陣だ。

呪架が叫ぶ。

「傀儡士の召喚を観やがれ、そして俺に屈服しろ！」

魔法陣の『向こう側』から、巨大な獣のような それ の呻き声が鼓膜を震わせた。

それが豪快なくしゃみをする、唾の飛沫が荒れ狂う嵐を巻き起こし、嵐は霧の巨人を創り上げた。

この場でなによりも大きな霧の巨人は、霧に包まれた中でただ一つ蒼く輝く目玉で、三〇メートルの高みから周りの小物たちを見下ろした。

脅えだす怪物ども。

だが、もう尻尾を巻いても無駄だ。

霧が怪物どもを呑み込み、叫喚とともに霧が紅く染まった。

先の見えない霧の中で、聴覚が研ぎ澄まされ、怪物どもが次々と惨死していくのを知覚した。

霧の巨人は興奮するように真っ赤に染まり、周囲の怪物どもは瞬く間に掃滅されてしまった。

だが、まだ遠くで呻き声がする。

「……クソッ」

呪架は呟いて、この場を引くことにした。引くといっても出口はない。奥に進むのみだ。

乾いた大地を駆け抜け、灰色の水が流れる川の向こう岸に、テントやモンゴルのゲルに似た住居が並ぶ集落を発見した。

川の流れは遅いが、泥沼のような水に浸かれば外には出られまい。たちまち躰を捕られてしまっただろう。

渡れる場所はないかと川岸を沿って歩いていると、呪架の目に人影が留まった。向こうも呪架のことに気付いているようで、顔をこちらに向けている。

その者は異形だった。

背中に骨が剥き出しなつた翼を生やし、弛んだ全身がスライムのようになつてしまった存在。

顔は紙を丸めて開いたみたいに皺くちやで、瞼が弛み過ぎて眼の位置すらわからない。

呪架は敵意がないと判断した。

目の前までやって来た呪架に異形が声を掛けようと口を開く。

「まだここに来て間もないようだが、どんな罪を犯してここに入れられた？」

嗶れ声は年のせいではなく、瘴気を含んだ空気に犯されているからかもしれない。

「自分の意志で来た」

「そんな馬鹿な！」

皺に隠されていた眼がカツと剥き出された。

異形は興奮した様子で息を荒立てて言う。

「ここがどこだか知っているのか？　ここはまさに　地獄　だ、望んで来る者などいるものかッ！」

「地獄？」

「そうだ、光の子　に叛逆した咎人が閉じ込められる　地獄　だ。元々は　光の子　も叛逆者だったくせに、今では神を気取ってこん

な世界をつくり出したのだ」

「光の子 が叛逆者？」

「そんなことも知らないのか？」

呪架の知るはずもないことだった。

異形は納得したように頷いた。

「まさか、お前は人間か？」

「……そうだ」

少し答えるまでに間があった。人間の血は3分の1しか流れていない……。

異形は感嘆した。

「この世界に人間が閉じ込められたという話は聞いたことがない。

お前がおそらくはじめてだ」

「そんな話はどうでもいい。光の子 が叛逆者ってどういうことだ？」

「光の子 と 闇の子 は仲の悪い双子だった。しかし、双子は考えることが似ている。二人は自分たちの仲間を引きつれ、我々の世界で叛逆罪を犯した。そして、仲間と一緒にリンボウ……とはお前たちの世界の名前で、その世界に閉じ込められたのだ」

今、呪架がいるこの 地獄 は 光の子 による再現なのだ。嘗て自分たちがリンボウに墮とされたように、自分に叛逆する者を閉じ込めるためにつくった牢獄。

異形はさらに話を続ける。

「仲の悪い双子はリンボウに墮とされたのちに、そこを自分のものにしてようと覇権を争い、互いに思い描く楽園を創造しようとした。果て無き戦いは人間誕生以前からはじまり、アトランティス、ムー、レムリアと楽園計画はすべて失敗に終わった。私も嘗ては楽園を夢見たが、楽園など所詮は夢幻なのだ」

光の子 と 闇の子 の姉妹喧嘩に自分の運命が巻き込まれたのだと感じ、呪架は激しい憤りを感じた。

幼い頃に母と過したささやかな幸せが、実は大きな幸せだった。

それを壊した者がいる。

呪架はここへ来た目的を再確認した。

「エリスという人を探してこの世界に来た。知らないか？」

「この世界の奥に タルタロス という絶対牢獄の世界がある。その世界へと続く タルタロスの門 を守っている新しい門番の名前が確か、エリス」

礼も言わずに呪架は異形に背を向けて歩きはじめた。

異形にも引き止める理由はない。

呪架の後姿は 地獄 の奥へと消えた。

第3章 冥府の母（8）

呪架は死の大地を奥へ奥へと進み、人が通るには大きすぎる巨大な門が目に入った。

タルタロスの門 と呼ばれる門に間違いない。

門の前には何者かがひとり立っていた。老人の話が正しければエリスのはずだ。

呪架は足を止めた。

ひと目で母だと感じた。向こうも呪架に気付いた様子だった。

「紫苑！」

酷く掠れた声で呪架は本当の名を呼ばれた。

呪架は声を出せなかった。

感激の再開には程遠い悲惨な再開。

母の姿は醜い異形の者へと変わり果ててしまっていたのだ。

下半身はとぐるを巻く蛇であり、顔も瘡気によってただれてしまっている。けれど、呪架はエリスの魂を感じた。

ここに来る前に出会った異形も同じだったのだ。元は別の姿かたちをしていた者が、この 地獄 の瘡気に犯され、軀を異形の者へと変わり果ててしまっていたのだ。

呪架は辛い現実を見据えた。

「……お母さん」

「私が母だとわかるの!？」

「お母さんだって、わたしのことすぐにわかったでしょ。わたしだっってお母さんのことわかる」

ついに呪架は母との再会を果たしたのだ。約五年の月日、呪架にはもつと幾星霜の時に感じられた。

エリスにとっては本当に幾星霜の時だった。

人間が住む世界とは時間の流れが違うために、向こうでの一日がこちらでは一年だったのだ。それでもエリスは呪架のことを忘れず

にいた。

しかし、エリスにとって呪架はもう二度と会うはずのなかった我が子だった。

「なぜこんな世界に、来てしまったの？」

「お母さんを連れ戻すために決まってるじゃないか！」

「私はここを離れることができないの、ごめんなさい、紫苑」

「どうして！」

心からの叫び。なんのためにここに来たのかわからない。引くわけにはいけなかった。

呪架は母の腕を掴もうとした。だが、その手が振り払われた。母に拒否された呪架は愕然とした。

昔と変わらぬ瞳でエリスは呪架を見つめた。

「私の話を聞きなさい」

「嫌だ！」

「聞きなさい！」

叱られた呪架は黙るしかなかった。

エリスは呪架から二歩、三歩、距離を置いてから話しはじめた。

「この場所に紫苑が来たということは、大よその事情は知っていると思うわ。この 裁きの門 を扱えるのはセーフィエルお母様の血を引く者だけ。けれど、私は門の開き方を知らず、門を管理していたお姉様はすでに 闇の子 の封印の犠牲になり、お母様は銀河追放されたあとだった。ここまでの話はわかるかしら？」

呪架は無言で頷いた。それを見てから、エリスは話を続ける。

「日々増大する 闇の子 の力を封じるには私の力が必要だった。けれど門の開き方を知らない私はこの世界には入れない。私どころか、お姉様がいなくなっただけからは、 裁きの門 は一度も使われたことがなかった。それでも私はこの世界に来なければいけなかった。だから私はズイーベンの力を借りて、魂だけの状態でこの世界に来たの。魂だけならば門を通ることができたから」

「そんなこと俺には関係ない！ お母さんに黄泉返って欲しいだけ

だ。光の子 と 闇の子 の戦いなんて興味ない。世界が滅びようと関係ない」

それだけが願ひ。罪のない人も呪架は殺してきた。他人の死など関係ない。母親さえ黄泉返ればそれでよかった。

「なんてことを言うの!」

「本当の気持ちと言っただけだよ」

「私はここを離れない。離れられない」

エリスは自分の心臓から伸びている鎖を指差し、鎖が繋がれている場所に指先を移動させた。鎖は タルタロスの門 に繋がれていたのだ。

「私の魂と直接繋がれているわ。だから私はここを離れられない」

「そんな鎖切つてやる!」

呪架の手から放たれた妖系が鎖を断ち切った。

エリスは表情をゆがめた。

「なんてことをするの!」

「帰るんだ、帰つてその躰も全部治す!」

「この躰は私に与えられた罰。魂の状態でここに来た私の躰に邪気が巻きついて、醜い肉体を形成した。だから、これは私の罰なのよ」

「お母さんはなにも悪いことをしてない。だから罰なんて受ける必要なんてない」

「愁斗との間にあなたと慧夢を生んでしまったことが罪なのよ」

「俺が産まれて来なければよかったのか!」

「違うわ、あなたに罪はない」

「お母さんは罪なら、俺はなんなんだ、クソッ!」

呪架の手から妖系が放たれ、エリスの躰を強く拘束した。

「なにをするの紫苑!??」

「無理やりにも連れて行く」

だが、呪架は外に出る方法を知らない。この場所から出られるのはセーフィエルの一族のみ。呪架もそうだが、やり方を知らなかった。

呪架が怒鳴る。

「どうやったら外に出られる！」

「私は知らないわ」

「嘘だ、セーフィエルの血を引く者だけが出れると聞いた」

「私は出る必要がないから、その方法を知る必要もなかった」

「クソッ！」

だが、ここで諦めるわけにはいかない。

呪架は『向こう側』を脱出した方法を実行する。

傀儡士の妖系は空間を断ち割る。

呪架の放った妖系が空間に傷をつくり、別世界への出入り口をつくった。

しかし、その先が辿り着きたい世界とは限らない。

エリスは悲しみに暮れた。

「やはり紫苑も傀儡士になっていたのね。運命は決して変えられない」

「お母さんをここから連れ出すことで運命を変えてやる！」

呪架はエリスを引きずり、空間の裂け目に飛び込んだ。

第3章 冥府の母(9)

眼が眩むほどに歪む空間を抜けた先では、青々とした新鮮な空気が待っていた。

緑の芝生が広がっている。

目の前には背の高い時計塔も建っていた。

文明のある世界。

時計を見上げたエリスが眩く。

「メビウス時計台」

それは帝都のエデン公園の敷地内にある時計塔の名。

呪架とエリスは無事に生還したのだ。

この場所は夢殿の目の鼻の先ほどの距離にある公園で、時計塔の付近は磁場だけでなく、空間や時間までもが歪んでいるために、一般は立ち入り禁止になっている区域だった。

しかし、今は時計の針が止まり、怪奇現象もなにも起きていなかった。時計の針は 箒星 が堕ちたあの日から止まってしまっていたのだ。

呪架はエリスに巻きつけてあった妖糸を解いた。

「行こう」

エリスは無言だった。自分はさらに大きな罪を犯してしまった。取り返しのつかない行為かもしれない。エリスの心は重かった。

呪架とエリスは人の気配を感じて、顔をそちらに向けた。

芝生を踏みしめて歩いて来る小柄な少年の姿 慧夢。

「なにか予感がしたんだ。まさかここで会えるとは思ってなかったケド」

エリスにはそれが息子の慧夢であるとすぐにわかったが、慧夢はそこにいる異形が母だとは気付いていないようだ。

何者かわからないが、慧夢はエリスになにかを感じていた。けれど、今はそんなことよりも呪架の相手をする方が先決だ。

戦いの合図は同時に放たれた妖系だった。

呪架と慧夢の妖系が宙でぶつかり、煌きながら砕け散った。楽しいそうに慧夢が艶笑する。

「強くなつたみたいだね」

「腐つた世界を滅ぼすために」

狂い腐っているのは自分ではなく、世界だと呪架は思った。だから、帝都の犬になど負けられなかった。それが双子の兄だとしても……。

二人が互いを殺す気で戦っていることを知り、エリスは悲痛な叫びをあげる。

「血の繋がった双子がどうして争わなければいけないの！」

この声に慧夢が耳を向けた。

「ボクたちが双子だと知っているのか？」

ここでエリスは自分が母だとは名乗れなかった。今の自分の姿は醜い怪物だ。この姿のままでは母だとは名乗りたくなかったのだ。エリスに気を取られている慧夢に呪架が仕掛けた。

右手から同時に三本の妖系を放つ。

慧夢の左手からも三本の妖系が同時に放たれ、呪架の攻撃を相殺した。

「スゴイね、いつから三本放てるようになったんだい？」

慧夢は心躍る気分だった。呪架の実力が確実に自分に近づいていると知つたのだ。

最初に二人が出会つたとき、実力の差は雲泥だった。

真物と我流の差が、埋まりつつある。

しかし、呪架は大きな問題を抱えていた。

胸を押さえ苦しそうな呪架の顔を見て、慧夢はすぐに悟つた。

「キミの命も長くないな。ボクもキミと同じ道を通つたから、よく知つてるよ」

呪架の躰は 闇 に侵されていた。

よりによって慧夢との戦いの最中で痛みが全身を思うとは、こん

なことでは勝てない。

呪架は躰に鞭打って動こうとしたが、脚もいうことを聞かず、思わず地面に片膝をついてしまった。

「クソッ！」

膝をつきながらも呪架は妖系を振るった。

だが、技に切れがない。

いとも簡単に慧夢は呪架の妖系を切り裂いた。

「その躰じゃボクに勝てないよ」

「なぜお前は同じ傀儡士なのに平気なんだ！」

「同じじゃないね。ボクは 光、キミは 闇 だ。ボクも闇の傀儡士だったんだけどね、女帝どもに躰を造り変えられたんだ。だから命を存えた……変わりに傀儡士としての力もだいぶ衰えたケドね」
全盛期の慧夢は今よりも強かったことになる。それは世界の脅威を意味していた。

エリスは悲しんだ。愁斗の子供を生んではやはりいけなかったのだ。

呪架はふらつきながら立ち上がった。

復讐は叶わなくても、もうひとつの願いはあと少しで叶う。この戦いをどうしても切り抜ける必要があった。

呪架が地面を蹴り上げ駆ける。

「ウアアアアッ！」

獣のように叫びながら呪架は渾身の一撃を放つ。

両手で同時に五本の妖系を繰り出すことに成功した。

だが、慧夢には及ばなかった。

慧夢の手から 悪魔十字 が放たれ、六対五の妖系が宙で激突した。

残った一本が襲い来る。

呪架の胸が黒い血を噴いた。

妖系が勢いを失っていないければ、呪架は完全に躰を割られてしまっていただろう。

血の匂いを嗅いだ慧夢の気持ちは盛り上がる。

「ボクは血の匂いが大好きなんだ」

今までの攻撃が遊びだったように、慧夢の手から神速で次々と妖系が放たれた。

呪架は必死に応戦するが、迫り来る妖系を捌き切れない。

腕が血を噴き、脚が血を噴き、首を軽く妖系が撫でた。

ついに呪架が両膝を地面についた。

慧夢が残酷な笑みを浮かべる。

「もうお遊びにも飽きたよ」

止めの一撃が放たれ、呪架は死を目前とした。

刹那、呪架の前に立ちはだかる影。

母の絶叫が呪架の耳を焼いた。

エリスの躰を抱きかかえる呪架。

傷は胸の奥まで達し、傷口から煌く粉が流れ出していた。

「お母さんになんてことを！」

呪架の叫びに慧夢は耳を疑った。

「まさか、そんなはずない……この怪物がボクの……」

啞然とする慧夢。

狂気に駆られた呪架が慧夢に牙を剥ける。

「殺してやる！」

まだ早い夜風が吹いた。

「エリスを助けるのが先じゃ！」

呪架の前に立ちはだかるセーフィエル。

それでも呪架はセーフィエルを押し倒して慧夢に飛び掛ろうとした。

己む無くセーフィエルは呪架の躰を押し飛ばすと同時に、空間転送で別の場所に送ってしまった。

次にセーフィエルは傷付いたエリスを抱きかかえ、慧夢の顔を見つめながら、その姿をエリスと共に消してしまった。

残された慧夢は髪の毛を掻き毟った。

「ウオオオオオツ！」

憤りから獣のような雄叫びをあげ、慧夢は両手を地面に付いて頂垂れた。

はじめて慧夢は人を傷つけたことを悔いたのだった。

第3章 冥府の母（10）

篝星 に戻ったセーフィエルは放心状態の呪架を部屋から追出し、ひとりでエリスのアニメを ジュエル 化するために儀式をはじめた。

二つの台の上にはエリスと傀儡アリスは寝かされている。

セーフィエルはアリスを永遠にするために、傀儡アリスの顔を変えることなくエリスの ジュエル を埋め込む気でした。

部屋の外に出された呪架はドアのすぐ横に座り込んでいた。

呪われている運命はどこまでいっても呪われているのだろうか？なぜこんなにも運命に翻弄されなければならないのか、呪架はこの世に生まれて来なければよかったと悔やんだ。

永遠にも思える時間が過ぎていく。

呪架の座るすぐ横で、ドアが開かれた。

セーフィエルの顔を見るなり呪架は掴みかかった。

「どうなった！」

「ジュエル は埋め込んだ」

成功したのか？

しかし、セーフィエルの顔は死人のように暗かった。

「じゃが、傷はアニメまで達しておった……」

セーフィエルの背後に隠れていた少女が無邪気な笑顔を覗かせた。

「ママ、この人だあれ？」

少女は不思議そうな顔で呪架を見て、セーフィエルの顔を見上げた。

セーフィエルは少女の質問に答えようとしたが、声が重くて答えられなかった。

なにがどうなっているのか呪架は理解できなかった。

「どうしたんだ、答えるセーフィエル！」

セーフィエルは呪架に背を向けて少女の躰を抱きしめ、静かに口

を開いた。

「失敗した。傷付いたアニマからエリスの想いが奪われたのじゃ。今のエリスは痴呆状態……まるで子供に返ってしまったようじゃ」

「そんな……」

頭の中が真っ白になった。

怒りも悲しみも、白く埋もれてしまった。

呪架は腰が抜けたように膝から崩れ、肩を落として頂垂れた。今まで自分がして来たことがすべて泡と消えた。

最大の目標が失敗に終わった。

蝕まれていく躰の中で、母が黄泉返りさえすれば、復讐は叶わなくても仕方ないと思っていた。

だが、まだ死ぬわけにはいかなくなった。

「……クソツ！」

怒りを吐き捨てる呪架に怯えてエリスの顔が強張った。

「ママ、このお兄ちゃん怖いよ」

幼女のようになってしまったエリスは呪架のことを覚えていない。セーフィエルのことをママと呼び、幼い頃の記憶は断片的に覚えているのかもしれないが、完全に大人の記憶は失われているようだった。

忘れた記憶は思い出すことができるだろう。

しかし、失った記憶は取り戻せない。

底知れぬ絶望感が呪架を襲う。

そして、呪架は慧夢を心から憎み恨んだ。

慧夢の攻撃によって傷付いたエリスのアニマ。

復讐の相手は慧夢だった。

慧夢だけは己の躰が朽ち果てる前に、八つ裂きにしてやらねば気が済まなかった。

「俺は行くぞ、絶対に復讐してやる」

部屋を出て行く呪架にセーフィエルは背を向けたままだった。

「妾はもう疲れた」

それは心の底から出た言葉だったに違いない。

セーフィエルはエリスの復活に失敗し、妹のアリスも失ってしまっている。

腕の中に残っているのはアリスの顔を持った幼女のエリス。

「妾はこのエリスを受け止め、もう離したりはしない」

セーフィエルはエリスを強く強く抱きしめた。

第4章 光に潜む闇（1）

帝都を襲う地震の規模は前にも増して大きくなっている。

裁きの門 が開かれ、エリスは外へ連れ去られた。 ヨムルン ガルド結界 の『動揺』が地震を起こしていることは間違いない。早急に対策を練らねばならなかった。

帝都で暴れまわる妖物たちの数も先月、例年にくらべ異常に多い。すべての厄災は因果の糸で結ばれている。

異常な事態に帝都から逃げ出す者も増えたが、他の都市で同様の事件が起きた場合を想定すれば、帝都から逃げ出す者の数は少なすぎる。これも魔導に魅入られた帝都の魔性か？

ヴァルハラ宮殿の会議室で今日も女帝は頭を抱えていた。この会議室に連日、入りびたりだ。

「ズイーベン、今日は明るいニューースが聞きたいかなア」
悪いニューースはもうたくさんだ。

「アインが全面的に指揮にあたる機動警察との連携もあって、被害は予想より抑えられてございます」

「びみよー。それっていいニューースなのかなア？」

「しかしながら、予想に反して帝都を逃げ出さない住民が多いので、そのあたりが心配かと」

「ぶつちやけ人間なんてどーでもいいんだけど、守ってあげないと女帝の顔が立たないからねー」

今もワルキューレのメンバーは帝都を飛び回って、事態の収拾と妖物狩りに追われている。

元々帝都に巢食っていた妖物も凶暴化して手を焼くが、より脅威となるのは『向こう側』の存在たちだ。

ヨムルンガルド結界 などの余波を受けて、各地で発生してしまっている ゆらめき から、『こちら側』に流れ込んでくる脅威。小さな ゆらめき のため、強大な存在は『こちら側』に出ること

はできないが、それでも『こちら側』で『育つ』場合もある。

帝都の街を徘徊する銀色の野犬は『向こう側』の存在だと認定されている。発見されて野犬はすべて生まれたての仔狗だ。フェンリル大狼の末裔である。仔狗が狩られずに育てば大変なことになってしまう。

現状で白銀の野犬よりも猛威を振るっているのは、地下から這い出てきた大海龍の幼生だ。都民の間でも噂になっている、帝都大下水道に棲むと云われるリヴァイアサンの幼生である。

女帝は難しい顔をして、視線だけをズイーベンに送った。

「なんかいいアイディア頂戴」

「もつとも良い手は結界の強化でございます」

「『メシア』を 裁きの門 の奥に送り込むとか？」

セーフィエルの血族であり、エリスの子供 慧夢。

ズイーベンが問題を口にする。

「しかし、『メシア』は絶対に拒否をするでしょう。加えて、彼は人間との混血でございます」

「混血が純血に劣るとも限らないでしょ？ 問題はそこじゃなくてさ、属性転換しているところだよ」

「確かに光属性の『メシア』では負荷が大きく、闇 の力に侵されてしまうでしょう」

「それにさ、躰は光でも、心は闇のままだよ。あつという間に 闇の子 に誘惑されるよ、きつと、たぶん、なんとなくだけどさ」

帝都政府に反感を持っている慧夢が、自らの意志で人柱になるとは考えづらい。なったとしても危険な賭けなのだ。

「ところでさ、『メシア』はどうしてるの？」

と、女帝が尋ねた。

「呪架とエリスを取り逃がしてから、夢殿の地下に塞ぎこんでしまつております」

「『メシア』はエリスが自分の母だと気付いたかな？」

「それはわかりませんが、気付いたとなれば衝撃を受けているでし

よう」

「それが引きこもった理由かな。だって彼、母親はどこかで幸せに暮らしていると思ってたんでしょ？」

「はい。母も妹も平凡で幸せな暮らしをしていると、聞かされていたようでございますから」

双子の兄妹は生まれてすぐに別々の場所で育てられた。兄の慧夢は愁斗の手で、妹の紫苑はエリスの手で、一切の交流もなく育てられたのだ。

女帝はため息をついた。

「双子同士で戦うなんて皮肉だよなー」

それは慧夢と呪架のことを言っているのか、それとも……？

突然、地震が夢殿を襲った。

また ヨムルンガルド結界 が揺れている。

地震の揺れが治まったところで女帝が愚痴を溢す。

「また不意打ちだよ。地震予知くらいできないの？」

「ヨムルンガルド結界 が起こす地震は、通常の地震よりも予知が難しいと思われませう」

「エリスをさつさと見つけて地震を抑えないとね。そのエリスがどこにいることやら」

「 箒星 がセーフィエルの本拠地である可能性は高いのでございますが、防護フィールドを破壊する術がまだ見つかっておりません」
魔導具や魔導兵器に関する技術と知識でセーフィエルは他を凌駕している。

「ゼクスは未だに師匠を越えられないのか？」
女帝は呟いた。

「ワルキューレの科学顧問であるゼクスの師はセーフィエルなのだ。ほんと女帝は手を叩いた。」

「そうだ、アタシの戦闘用の義体は準備できてる？」

「はい、すでにゼクスから整備が終わったと連絡を受けております」

「じゃあ、ゼクスの研究所に行こうかな。彼女と顔を合わせるのー」

年ぶりじゃない？」

「正確には一年と八ヶ月ぶりでございます」

同じ夢殿内においても、引きこもりの科学者ゼクスとは顔を合わせる機会があまりない。女帝とゼクスが顔を合わせるのは義体を交換するときくらいだ。

戦闘用の義体に女帝を乗り換える。それは女帝自ら出陣することを意味していた。

「アタシが帝都から離れると霊的バランスが崩れて大変だけど、そこら辺はみんなに頑張ってもらおうとして、夢殿の管理は誰がいいと思う？」

女帝に尋ねられズイーベンは難しい顔をした。

「アハトが良いのですが……」

「まだ帰って来てないもんねー」

「ですからフィアを夢殿に戻し、わたくしの代わりに務めさせましよう」

女帝の傍には常にズイーベンが仕えている。帝都の外に出るときもそれは変わらない。

どこに女帝は出かける気なのか？

ズイーベンは聞かずともわかっている。

帝都東京だ。

「アタシら帝都の外に出るの久しぶりだね、ワクワクしちゃう」
呑気な顔で女帝はニッコリ笑った。

第4章 光に潜む闇(2)

女帝が死都東京に向かった直後、入れ替わりで呪架が帝都に姿を見せた。

向かうは帝都の中樞夢殿。

夢殿の警備はいつも以上に厳しい。動員されている人数はいつもの倍以上はいるだろう。盲点は女帝とズイーベンが不在というところだろうか。

今の呪架は当初の目標を失っている。エリスの復活に失敗をして、残すは帝都政府への復讐。のはずだった。けれど、それもいつしか慧夢への個人的な復讐に変わっていたのだ。

夢殿の中に慧夢がいると呪架は考えたが、そこに乗り込むまでの作戦はない。怒りの赴くままに、呪架は正面から突っ込む気であった。決死の覚悟はすでにできている。

帝都政府に関わるものは皆殺しにする。

呪架は警備兵を惨殺しながら、エデン公園の中を抜ける道を駆けていた。一本道の先には夢殿が聳えている。

妖糸を振るい、銃弾の雨を交し、呪架はただ前だけを見て突き進んだ。

夢殿の周りは水を張った濠と高い壁で囲まれ、上空には結界が張られている。敷地内への道は一本の架け橋のみ。

まだ呪架の前に現れる警備兵の数は少ない。これから夢殿に近づくに連れて、この数は急激に増えていくだろう。戦いはまだまだこれからだ。

しかし、呪架の額からは玉の汗が滲み出していた。

息が上がり、躰が鉛のように重い。

内臓を抉られる痛みを耐えながら呪架は歯を食いしばった。

「クソッ」

眼を細めた呪架の瞳に映る白い戦乙女。

「ええつと、ご無沙汰しておりますです」

ホーリースピアを構えたフუნフはにこやかに微笑んだ。

「俺が首を刎ねて殺したはずだ」

幽鬼にしては生気を感じた。呪架はフუნフが再生装置で復活したことを知らなかったのだ。

「死の淵から蘇ったです」

「なら何度でも殺してやる」

呪架の躰から漲る殺気をフუნフは柔和に受け流していた。

しかし、呪架の技は受け流せるか！

神速の妖系がフუნフを狙う。

スピアの先で妖系を軽くあしらい、フუნフが姿を消した。亜音速に突入したのだ。

呪架の視界から消えたフუნフ。

目で追わなくとも呪架は感じるままに妖系を振るった。

背後に向けて放った妖系がフუნフの兜をなぞる。

呪架の攻撃に驚いた顔をしてフუნフは飛び退いた。

「まぐれではなさそうですね」

「殺気を感じた」

亜音速から攻撃に移る一刹那、フუნフは通常のスピードに戻る。

呪架は勘でそこを捉えたのだ。

フუნフはホーリースピアを構え直して体勢を整えた。

「亜音速モードはこけおどしです。本当の戦いには向きませんです」

亜音速での戦いは失敗したときのデメリットが大きい。奇襲や不意打ち、各下の敵には有効だが、今の呪架には得策ではない。

通常のスピードでフუნフが呪架に速攻を決める。

自ら近づいて来る的へ呪架は妖系を放った。

煌く妖系がフუნフの胴体を薙いで真っ二つに割った。だが、血

も出ずに霞み消えたかと思うと、そこから白い影が天に昇った。

「残像かッ!？」

声をあげた呪架は頭上に気配を感じた。

地にスピアの刃先を向けて飛来してくるフュンフの姿。すかさず呪架は妖糸を放った。

再び斬られ霞み消えるフュンフ。その霞んだ残像から、新たなフュンフが飛び出すのを呪架は目撃した。

慌てて飛び退いた呪架の目の前で、フュンフはスピアを地面に突き刺した。躲すのが遅ければ、槍で串刺しにされているところだった。

地面を砕いたフュンフが次の攻撃に移る前に、呪架は妖糸でフュンフの躰を確実に八つ裂きにした。

しかし、八つ裂きにされたフュンフは霞み消えたのだ。

霞の中から再び飛び出す実体を持ったフュンフ。

あまりの近距離に呪架は成す術もなかった。

歪む呪架の口元。

スピアの刃先が呪架の左肩を貫通していた。

貫かれた刃先から滴り墮ちる血の雫。

痛みなどかまわず呪架は残る右手から妖糸を繰り出した。

この距離で妖糸を外すわけもなく、煌きはフュンフの首を刎ねた。

だが、やはり霞み消えた。

次の瞬間、呪架は残る右肩もスピアで貫かれていた。

無残なまでに無表情のフュンフは容赦なかった。

スピアを肩から抜き、すぐさま柄で呪架の側頭部を殴りつけた。

フュンフは横転する呪架の足を払い転倒を促進させ、地面に仰向けで倒れた呪架の腹に足の裏を押し付けた。

止めは呪架の咽元に突きつけられたホーリースピアの切っ先。

「チエックメイトです」

「……クッ」

腕は思うように動かず、動けたとしても咽喉を搔つ捌かれるの先だろう。

敗者を見下しながらフュンフはにこやかに微笑んだ。

「わたくしが五人いることをお忘れでしたですか？」

前回の戦いするときも、フュンフは五人となつて呪架とエリスを苦しめた。だが、呪架は前の戦いとは違うものを感じていた。

「おまえ、前に戦ったときよりも強くなってるな。前の戦いはお遊びだったのか？」

「いいえ、わたくしたち戦乙女は死の淵から蘇ることにより、飛躍的に戦闘力を上げられるのです。それに……前回の戦いでは何者かの妨害が入りましたです」

「なにッ？」

「あの、そのですね、簡単に言いますと、貴方がわたくしに勝てたのは何者かの助けがあつたからです」

「クソッ！」

実力で勝つたのだとばかり思っていた。けれど、今ならばフュンフの言葉が事実であると理解できる。

呪架の脳裏に浮かぶ鮮やかに美しい紅。

「あいつか……」

呟いた呪架。

いつまでも人の手の上で躍らせているわけにいかなかった。

なのに躰が動かない。

フュンフに動きを封じられているのに加え、内蔵を蟲に喰われているような激しい痛み。

呪架の口から黒血が吐き出された。

それを見てフュンフは瞬時に悟った。

「闇に蝕まれているのですか？」

「……………」

呪架は沈黙した。弱みを見せたくなかった。

「わたくしたちの仲間になりなさいです」

「クソッくらいだ！」

「躰を光に変えて生きながらえることができます
それは慧夢が辿った道。

「クソッくらいだって言ってるだろッ！」

唾を飛ばしながら呪架は拒否した。

女帝の犬の成り下がるつもりも、慧夢と同じ躰になるつもりはない。

フუნフは少し困った顔をした。

「貴方が拒否しても結局　ッ!？」

呪架の顔からフუნフの目が放された。

その視線の先に見えるモノ。

大地を割って甲冑を纏った蛇のような頭が突き出した　リトルリヴァイアサンだ。

「リヴァイアサンの幼生がこんなところまで！」

叫ぶフუნフにリトルリヴァイアサンが頭を槍のようにして襲い掛かる。

フუნフは呪架に向けていた切っ先を放さなければならなかった。力を込めて突いたスピアがリトルリヴァイアサンの眉間に突き刺さる。

激痛にリトルリヴァイアサンは暴れ、眉間に刺さったままのスピアを握っていたフუნフが躰を右往左往に振られた。

その間に逃走しようとしていた呪架にフუნフが叫ぼうとしたが、その口は不意に噤まれた。

なんと呪架はリトルリヴァイアサンに向かって走っていたのだ。

今の呪架は両肩を負傷し、妖糸を自由に振るえないはず。気でも狂ったのか？

否　呪架の瞳は冷静だった。

大地を割って地の底から這い出て来たリトルリヴァイアサン。呪架はその亀裂へ身を投じた。

蠢くりトルリヴァイアサンの腹の横を擦り抜け、呪架は亀裂の奥深くで水の流れを見た。リトルリヴァイアサンが通って来た地下水脈だ。

水の流れに身を任せ、呪架は逃げた。

まだ死ねない。

死ぬくらいならば、屈辱を背負っても生き延びなければならなかった。
復讐は終わっていない。

第4章 光に潜む闇(3)

特設テントの中で女帝は呑気にクッキーを摘んでいた。そのボディーはすでに戦闘用に取り換えられているが、前との変化はあまり見受けられない。絢爛で重そうな魔導衣から、柔軟さと強度を兼ね備えた白いボディースーツに着替えてくくらいだろう。

クッキーを口いっぱい頬張る女帝の傍らにいるズイーベン表情は険しい。

「わたくしの力を持ってしても、あの結界を破るのには数日を要するかもしれませんが」

ズイーベンの言う結界とは 箒星 を覆う防護フィールドのことだ。

女帝はクッキーを咽喉に詰まらせ、近くにあったペットボトルを逆さにして、ジュースを口と咽喉に流し込んだ。

「ウゲエ……死ぬかと思ったー」

喜劇を演じる女帝を見るズイーベンの目つきは冷たい。

「わたくしのお話を聞いておりましたか？」

「聞いてるつてば、アレがソレってことですよ。あんま悠長なこと言つてられないし、魔導砲の使用許可出せばいいんでしょ？」

「はい？ 魔導砲とおっしゃいましたか？」

自分の耳を疑ったズイーベンに女帝はさらりと言う。

「耳のイヤホンを補聴器に変えたほうがいいよ」

「……考慮いたします」

思っていないことを口にして、ズイーベンは気を取り直して話を続ける。

「魔導砲の使用は日本政府のみならず、世界各国から非難される要因になりかねませんが？」

「死都街がこれ以上吹っ飛ばすと無害じゃん？ てゆーか、妖物の巢食ってる大地を浄化してあげるんだから感謝されるべき？」

「しかし……」

「ただし、宣戦布告と勘違いされるのは嫌だから日本政府には事前連絡を入れて置くように。その答えがNOでも魔導砲を使用することと変わらないけど。まっ、日本が帝都に戦争を仕掛けてきても、どーせ勝つしー」

子供のように女帝は無邪気な笑みを浮かべた。

なにを言っても女帝は意見を変えないと判断し、ズイーベンはずぐさま今いる仮設基地に撤退命令を出し、 箒星 の周辺で他にも調査している日本政府に撤退の通達を出した。

女帝権限で事は速やかに進められ、魔導砲の準備も着実に行なわれていた。

魔導砲がある場所は地上から数百キロメートルの高みだ。人工衛星として空に浮かんでいるのだ。成層圏を越えた位置にあるが、静止衛星に比べれば非常に低い高度に位置している。

数時間の時が流れ、女帝とズイーベンは空の上にあった。 軍事ヘリで上空に向かい、遙か遠くの空から 箒星 を窺っていた。

ヘリの搭乗口から身を乗り出し、女帝はサングラスの上から双眼鏡を構えた。

電子双眼鏡のズームを合わせて標的を確認する。

「そんじゃ、そろそろ発射しちゃう？」

事の重みが言葉にまったく感じられないのはいつものもことだ。

「了解いたしました」

ズイーベンは女帝の命を受けてカウントを開始した。

「十秒前……五秒前、三、二、一、発射」

大空の一点でなにかが星のように瞬いた。

天から降り注ぐ蒼白い光の柱を見て女帝が声をあげる。

「たっまやーッ！」

鼓膜を振るわせる轟音と共に視界が白で覆われた。

遅れて強風がヘリを煽ぎ機体が斜めに傾いた。

機内で女帝の躰を後ろから支えていたズイーベンが囁く。

「玉屋という掛け声は花火のときに言うのでは？」

「まあ、いいじゃん。これも一種のお祭りだしー」

世界を震撼させる魔導兵器を駆使しながら、それを祭りに例える女帝の神経は並大抵ではない。

網膜に焼きつくほど白かった世界は元の色を取り戻していく。

双眼鏡を覗いていた女帝が声を荒げる。

「超特急で 箒星 上空へ向かって！」

「なにがございましたか？」

冷静に尋ねるズイーベンに女帝は再び声を荒げた。

「境界が再構築しはじめてるよッ！」

女帝の言葉どおり、砕け散った防護フィールドは地面に近い場所から、徐々に頂点に向かって再構築をはじめていた。

五角形のピースがドーム型の防護フィールドを再構築する前に、なんとしても中に入らねばならなかった。

へりはスピードを上げて 箒星 に向かう。その間も休まることなく五角形のピースが並ぶ。

女帝とズイーベンはへりから降りる準備をしていた。

箒星 を開けた深遠のちょうど真上まで来たへりはそこで制止した。

「参ります」

ズイーベンは女帝を抱えて搭乗口から飛び降りた。

下からの風を受けながらズイーベンが左右の翼を大きく開く。白と黒のコントラストが美しい羽根。女帝を抱えながらズイーベンは空に羽ばたいた。

防護フィールドは五角形のピースを積み終え、頂点の六角形のピースを残すのみだった。

「間に合わなかったお仕置きだよー」

女帝の言葉に焦ったズイーベンは頭を地上に向けて急落下を試みる。

氷が氷結するような音と共に、ズイーベンの足の先で防護フィー

ルドは閉じられた。間一髪だ。

数十メートルの大空洞を下りながら女帝はため息をついた。

「はあ、惜しかった……もうちよいでズイーベンをお尻ペンペンの刑に処せたのにい」

「それは困ります」

生真面目に返答するズイーベンに女帝は腹を抱えて笑った。

「ウケりゆ〜」

「又ル様、お暴れになると落としましてございますよ？」

『落ちる』ではなく、『落とす』だ。

「この距離なら落ちてでもへーきだもん」

女帝はズイーベンの腕を退かし、数メートル下の地面に降り立った。

軽やかに着地した女帝は地面から前方に目を向けた。

大きな岩石の塊のような物体。外観からはそれが乗り物だとは判断できない。ただ、一箇所の扉を覗いて。

扉を潜った女帝とズイーベンを迎えた絢爛な部屋。

ロココ様式の部屋でセーフィエルは優雅に二人を出迎えた。

「久しゅう…… 光の子 又ル」

余裕の挨拶をしてセーフィエルは月のような笑みを湛えた。傍らでは少女がセーフィエルの服を怯えて掴んでいる。

ズイーベンの視線は少女に注視された。

「その少女は誰でございますか？」

「妾の娘じゃ」

ズイーベンは少女の正体を察して驚愕し、驚愕は女帝にも伝染した。

「まさか…… エリス!？」

そんなはずはない。目の前にいるのは金髪蒼眼の少女だ。けれど、中身がエリスだと女帝は感じた。

それがエリスだと感じて、この状況の理解に女帝は苦しんだ。

「エリスになにが……?」

「妾は肉親を次々と失った。今ここに居るのはアリスとエリスの生まれ変わりじゃ」

セーフィエルはアリスの躰を優しく包み込み抱いた。

そして、セーフィエルは言葉を紡ぎ出す。

「闇の子 と其方たちの戦いにも興味はない。闇の子 が復活しようとな妾は一向に構わぬ。妾の興味は……シオンの復活じゃ」

急に辺りが暗転した。

夜空に流れる輝く星々の大河。

「ようこそ、妾の夜へ」

セーフィエルの囁きが、さらに辺りを深い夜に誘った。

絢爛な部屋から一瞬にして、プラネタリウムの世界へ。セーフィエルのテリトリーに女帝とズイーベンが囚われたのだ。

傀儡エリスの姿はすでに消えている。この世界に残されたのは三人のみ。戦いの幕はセーフィエルによって開けられた。

「うふふふ、夜の雫を多くと味わうがよい」

夜風に乗ってセーフィエルの声が響くと同時に、ズイーベンが持っていた杖と槍が一体化したホーリースタッフが地面に吸いつけられた。

そして、傍らにいた女帝にも異変が起きた。

女帝が急に腹ばいになって地面に張り付いたのだ。

「又……さ……!?!」

驚いたズイーベンが声をあげようとしたが、その声は蝕まれてしまった。自分では叫んでいるつもりなのに、声が世界に解き放たれないのだ。

歯を食いしばりながら女帝は上目遣いでセーフィエルを睨んだ。

口は大きく動かされているが声は出していない。

「説明が必要かえ？」

セーフィエルが訊くと女帝は首を縦に振った。

「この世界の法則は妾の支配下にある。其方の躰には魔導金属が使われておるじゃろう、それが原因じゃ」

ズイーベンのホーリースタッフも、女帝の躰も魔導金属が使われているために、地面に吸いつけられてしまったのだ。まるで磁石と鉄の関係だ。

戦闘不能に陥った女帝の分もズイーベンは素手で戦わねばならなかった。

ズイーベンがセーフィエルに飛び掛る。

「結……ッ！」

言霊を蝕まれながらもズイーベンは魔法を発動させた。

力強く伸ばしたズイーベンの手がセーフィエルの躰に触れた。その部分からセーフィエルの躰がクリスタル化しはじめたのだ。

まるで物体が氷に包まれるように、セーフィエルの躰が透き通るクリスタルになろうとしていた。

だが、優勢のはずのズイーベンが眼鏡の奥で瞳を見開いた。逆流している。

セーフィエルに触れている指先から、ズイーベンの躰がクリスタルになりはじめていたのだ。

「うふふふ、呪詛返しが成功したようじゃな。どうじゃ、自分の術で敗れる気分は……結界師ズイーベンの名も地に堕ちようぞ」

もうすでにズイーベンは口を開けることすらできなかった。彼女の躰は純粹なクリスタルへと物質転換してしまったのだ。

一部始終を見ていた女帝は声にならない怒号をあげた。重い躰を持ち上げ女帝は必死の思いで立ち上がった。

懸命な女帝の姿を見てセーフィエルは艶笑した。

「立ち上がれるとはあっぱれじゃ。『闘将』の名は伊達ではないようじゃな」

「……ま……ね……やつ……この……世界に……順応してきた」

「うふふふ、良い義体を造ったゼクスに感謝するのじゃな」

「ゼクスの欲しがってた限定フィギュアでもプレゼントしようかな」

余裕の笑みを女帝は浮かべた。

しかし、内心ではまったく余裕などない。

過去に銀河追放したときも手こずった相手だ。一筋縄でいかないのはわかっている。なによりも注意しなくてはいけないのは、その正攻法ではない戦い方だ。

セーフィエルが艶やかに口元を緩ませた。

「『闘将』と賛美され、恐れられようと、その真の実力を発揮できなくてはかわいそうにお」

「今から見せてあげ……りゅ!?」

ヤバイと女帝が悟ったときには、すでにその足は宙に浮いていた。重力反転。

女帝の躰が天に向かって落ちていく。果てしない宇宙へ吸い込まれるように、抵抗もできないまま女帝は堕ちる。

天に堕ちる女帝を見上げながらセーフィエルが呪文を呟く。

「シャドウビハインド」

刹那にしてセーフィエルの姿は女帝の足を掴んでいた。

「うわっ離せ！ じゃなくて、止める！」

喚く女帝の顔を見上げながらセーフィエルは美しい艶笑を浮かべた。

「さらばじゃ」

夜の風よりも冷たい挨拶。

星のひとつが強烈な光を放って膨張した。

それは刹那だった。

スーパーノヴァ。

超新星爆発がセーフィエルの創り上げたコスモを一気に呑み込む。莫大なエネルギーが世界を乱し、閃光爆発の渦にセーフィエルと女帝は消えた。

同時刻、 箒星 が大爆発を起こし、核爆弾が投下されたという誤報が世界を駆け巡った。

第4章 光に潜む闇（4）

地下水脈から下水道を通り、やがて呪架は川に放流され下流へと流されていた。

幅の広がった川で流れが緩やかになり、呪架は川岸に向かって必死にもがきはじめた。

両腕が使えないために足だけで水を蹴り、死の荒野を這う思いで川岸に上半身を乗り上げた。

呼吸が異常なまでに乱れ、視界も意識も霞んでしまっている。

死神の足音は刻々と迫っていた。

一日か、半日か、数時間か……残された時間はあと僅かだ。

その僅かな時間で自分になにができる？

呪架は歯を食いしばった。歯の隙間から滲み出す血は、胃や肺からの出血である。生きていることだけやっとなのだ。

死に対する恐怖心はない。

しかし、死は望んでいない。

呪架は生きたいと魂の底から願った。

今、呪架を突き動かしているモノは復讐心に他ならない。母を葬った世界に対する憤りと、狂った世界への報復。なにもかも破壊してしまいたかった。

自らが死ぬことと、たった独りで世界に取り残されること、自分の存在を他に見出せない点では、どちらも死んでいる。違いは背負う辛さだ。呪架は苦しみを背負っていた。

あの頃のエリスは決して戻らぬ過去の幻影。

セーフィエルは遠い親戚か他人にしか思えない。

血の繋がった双子の慧夢でさえ、殺すべき敵と化した。

呪架は世界に生きながら孤独を感じた。

生きながら死んでいる。

なぜか呪架の脳裏に顔も知らない父のことが浮かんだ。

父　愁斗はおそらく死んでいる。マルバス魔導病院の院長との契約により、死して腕を切り取られた。その腕は今、呪架の右腕として生きている。

傀儡士が大事な腕を捨てるはずがない。

呪架の腕はもう動きそうもなかった。下水や川を流されたことにより雑菌が傷口を侵し、傷口の奥までも腫れ上がってしまった。例え妖系が振るえなくても、生きてさえいれば機会が巡って来ることもある。

呪架は立ち上がろうと川に浸かっていた下半身を動かそうとした。だが、動かない。

死の呻き声が呪架の耳に届いた。

幻聴ではない、確実な死が呪架に迫っていた。

血の臭いを嗅ぎ付けた四つ足の獣が呪架にゆっくりと近づいて来る。

白銀の毛が生え揃ったフェンリルの末裔。三メートルもある白銀の野犬が呪架の命を奪おうとしていた。

呪架の近くまで来た白銀の野犬が遠吠えをあげた。群の仲間を呼んでいるのだ。

仲間皮を剥ぎ、肉を抉り、内臓を噛み千切り、獲物を分け合う。野犬の腹を満たす肉が呪架の末路なのか？

一匹だった白銀の野犬が、二匹、三匹……と増えていく。

呪架は近づいてくる白銀の野犬に向かって野獣のように咆えた。

負けずと白銀の野犬も咆え返した。

呪架は再び咆え返そうとしたが、口から出たのは声ではなく黒血。ついに白銀の野犬どもが呪架に喰いかかろうと襲って来た。

死を目前にして紅い戦慄が奔った。

白銀の毛並みが紅く染まり、舌をだらしなく垂らした野犬の生首が地に墮ちた。

鮮やかに紅いインバネスを翻し、仮面の主は次々と煌きを指先から放った。

前脚を斬り飛ばされ、尻尾を切り落とされ、首を断絶される。紅い残骸が川の水に浸り、絵の具を垂らしたように、紅い色が下流へ流れて逝く。

残り一匹になった野犬が背を向けて逃げようとした。だが、容赦ない煌きは野犬を縦に切断した。

目を覆いたくなるような無残な光景の中で、無機質な仮面が呪架を見下した。

「死にたくないのならば、私の手を取れ」

冷徹な声を発し、ダーク・シャドウは細い織手を呪架に伸ばした。呪架は心を決めていた。

人の足元を這ってでも、屈辱を背負ってでも、強かに生き延びてやる。

呪架は腕を伸ばそうとしたが、もうすでに両腕とも死んでいる。

仮面の奥でダーク・シャドウもそのことに気づいているだろう。だが、あえて手を伸ばすのみ。

必死の思いで呪架は躰を地面に這わせ、背筋を使って躰を海老反りにさせ、汗の滲む額をダーク・シャドウの掌に押し付けた。

「腕が動かない、これで勘弁してくれ」

「おまえの魂は私が貰い受ける」

「助かるなら悪魔でも売ってやる……」

呪架の意識は静かに落ちた。

死の淵に旅立った呪架の躰をダーク・シャドウは抱きかかえた。

再び呪架がこの世で目を覚ますかは、すべてダーク・シャドウの手にかかっている。

空間を妖系で断ち割ったダーク・シャドウは呪架を連れてその中に消えた。

闇の叫びが木霊する暗闇を歩き、腐食する空気を己の魔気で払い、ダーク・シャドウは出口に向かっていた。

なにかを感じてダーク・シャドウの足が止まった。

ダーク・シャドウは渾身の一撃で妖系を放つ。

切り裂かれた空間の裂け目に流れ込んでくる閃光の波。
光の渦にダーク・シャドウは迷わず飛び込んだ。
消毒液の臭いが鼻を衝く。

その部屋にいた白衣の男が振り返った。

獅子の頭部を持つマルバス院長。

「なんのようじゃな？」

「手術室を借りる」

「ふおおおお、よかろう。自由に使い、わしは休業の看板を出してくる」

マルバス院長は白衣を翻して部屋を出て行った。

ダーク・シャドウは抱えていた呪架を凍てつく手術台に寝かせた。死の淵を彷徨っているというのに、呪架の顔は安らかに瞳を閉じている。過酷な運命を生きる者の顔ではなく、本来の歳である思春期を謳歌すべき少女の寝顔。

ダーク・シャドウは素顔を隠していた白い仮面を外した。

仮面の下から現れた恐ろしいほどに端正な顔立ち。二十歳前半か、あるいはもっと若いかもしれない。中性的で魔性を帯びた顔立ちは、どこか妖艶さを漂わせ、深い黒瞳に映り込む呪架の顔と雰囲気は酷似していた。

女性のように細い繊手でダーク・シャドウは呪架の服を脱がしはじめた。

露になる呪架の裸体はすでに赤らみが鋼へと変わっていた。全身から生気が抜けつつある。事は一刻を争っていた。

だが、ダーク・シャドウは小川のように、ゆっくりと作業を進めていた。

ダーク・シャドウは考え深げな瞳を閉じた。その指先は呪架の胸の中心で止まっている。

「一族の呪いは……おまえで終止符が打たれる」

ダーク・シャドウの指先から妖系が放たれ、それはまるでメスのように呪架の胸を刻んだ。

その胸に今、刻印された血の紋章。

滲み出す血は黒いまま、紅くは染まらない。

「後戻りはできない！」

叫びと同時にダーク・シャドウは呪架の胸に手を突き刺した。

大きく眼を見開いて呪架の上半身が跳ね上がった。

絶鳴はなかった。

生命としての呪架は死んだ。

ダーク・シャドウは呪架の胸の中で手を動かし、なにかを鷲掴みにすると一気に引き抜いた。

血を滴らせながらダーク・シャドウの手に握られているものは、闇色のクリスタルだった。

闇 の侵蝕されている呪架の ジュエル だ。

呪架のすべてはただひとつの漆黒の結晶に込められた。

すでに呪架の新たな躰は用意されていた。呪架に瓜二つの傀儡の躰。傀儡士の業が創り上げた傑作。

鮮やかな手並みで傀儡の胸が裂かれ、闇色の ジュエル が胸の奥深くへとしまわれた。

セーフィエルも知らぬ秘儀。

新 ジュエル 法。

目にも留まらぬ速さで作業は進められ、傷口も残らず生まれたままの肌で生まれ変わった。

「紫苑は死んだ……蘇れ呪架」

囁くダーク・シャドウの声に反応して、呪架の瞼が微かに痙攣した。

儂い人の時間は終わり、傀儡としての永久がはじまる。

闇を帯びた深い黒瞳が開かれた。

その瞳がはじめて見た者は、白い仮面の主。すでに素顔は隠されてしまっていた。

「俺は……どうなった？」

全身の痛みは消えていた。躰が前よりも軽く、力がひしひしと漲

ってくるのを感じた。

「傀儡になった」

淡々と言ってダーク・シャドウは鏡を指さした。

「姿見がそこにある。生まれ変わった自分の姿を見るといい」

呪架は言われるままに手術台から飛び降りて、大きな鏡に自分の姿を映し出した。

なにも変わっていないように思えた。

違和感もなにもない。

ただ、肌は瑞々しく透き通り、染みや無駄な毛穴はなくなっていた。小奇麗な絵画のようだ。

「俺は本当に傀儡になったのか？」

鏡に映るダーク・シャドウに訊いた。

「それ以外に方法がなかった。魔人と呼ばれた天才傀儡士も、軀を侵す 闇 には勝てなかった。その息子も同じ運命を辿った。二人とも自らの軀を傀儡とすることで、 闇 の侵蝕を克服し、更なる力を得た」

「おまえはいつたい誰だ？」

呪架は振り返り白い仮面を見つめた。

「軀を傀儡にすれば、 闇 をいくら使っても軀に負荷がない。傀儡にならなければ、 闇 に喰われ久遠の苦しみに囚われる運命だった」

「そんなこと訊いてない。おまえは誰だっと言ってんだよ！」

「……………」

ダーク・シャドウは質問には答えず、呪架に背を向けて空間を妖糸で裂いた。

闇色の裂け目に消える紅いインバネス。

呪架は後を追えなかった。

ただそこに立ち尽くし、鮮やかな紅を眼に焼きつかせたのだった。

第4章 光に潜む闇(5)

「あはははは、ボクは今、最高の気分だよッ！」

舞い踊りながら慧夢は歩道をスキップで歩いていた。

慧夢の首に付けられていた首輪が消えている。あの首輪が慧夢の制御装置だったはずだ。叛逆を起こせば首輪が作動して慧夢は死ぬはずだった。

しかし、慧夢は自由気ままに暴れていた。

夢殿から逃げ出したあと、帝都政府の追っ手を振り切り、いくつかの区を跨いでマドウ区までやって来ていた。

腹を空かせた慧夢は塀を越えて民家の庭に忍び込んだ。

庭先から妖系を放ち、窓ガラスを切断した。切られた窓の断面は、まるでレーザーで切られたように鮮やかだ。

ちょうど慧夢が土足で上がりこんだ部屋はリビングだったらしく、若い女性がひとりテレビを見ていた。

「う、強盗！」

声をあげる女に慧夢は口の前で人差し指を立てて見せた。

「しーっ、騒ぐと殺っちゃうよ」

慧夢は満面の笑みを浮かべていた。

異常者だと瞬時に感じて女は叫び声をあげそうになった。

その叫びを止めたのは女本人ではなかった。

慧夢は二メートルほど跳躍して、ソファに座っていた女の躰に飛び乗った。

そして、女の口と自分の口を重ねたのだ。

ゆっくりと女から顔を離し、慧夢は艶やかに自分の唇を舐めた。

「ボクが声を出していいって言ったとき以外はしゃべっちゃダメだよ。次は本当にクロスからね」

震えながら頷く女の首には、すでに慧夢の指先が食い込んでいた。自分の服従したことを感じて慧夢は女の首から手を離れた。

「イイ子、イイ子、素直な子はボク大好きだよ」

女の頭を撫でながら慧夢は無邪気に笑った。

「さつとと……」

慧夢はぐるりと部屋の中を見回した。

「お腹空いちやって、食べ物どっかにないかな。デリバリーでピザ頼もうよ、ボクね。ピザがスキなんだ……チーズ剥がして生地だけ食べるんだけどさ、あははは」

腹を抱えて慧夢は自分の発言に爆笑した。

背を丸めていた慧夢が不意に動きを止めた。

感じる殺気。

「動くな止まれ！」

威勢のよい男の声が響き渡った。

慧夢が庭先に目線を向けると、口径の大きなハンドガンを構える男が立っていた。着こなしている制服は帝都警察の物だ。

警察官の姿を見て女が泣き叫ぶ。

「助けて！」

追っ手の現われに慧夢は唇を尖らせた。

「また腹ごしらえもしてないよ。トイレと食事とお風呂くらいは自由にさせて欲しいよね！」

突然、慧夢と男の間に割って入った人影。ソファで怯えていたはずの女だった。しかも、なぜか両手を広げて男の妨害をしているではないか？

血迷った行動をする女を男が押し飛ばそうと手を伸ばした。

「邪魔だ！」

男が女を突き飛ばした瞬間、女の首が地面に滑り落ちた。

それを見た男は思わず視線を生首に奪われ、慧夢は額を掌で軽く叩いた。

「あちゃー、死んでるバレたら囮の意味ないじゃん」

すでに女は死んでいたのだ。男に助けを求めて叫んだとき、慧夢との約束を破っていた。だから殺された。

傀儡士の技のひとつ 操り糸 だ。

首を失った女の屍体が動き出し、男の躰に覆いかぶさった。

その間に慧夢は背中を向けて部屋の奥へ逃げ込んだ。

慧夢は殺せた相手を敢えて殺さなかった。慧夢はこの追いかけて楽しむのを楽しんでいるのだ。

廊下を抜けて慧夢は玄関を飛び出した。追っ手は待ち伏せしていない。

慧夢の躰が不意に傾いた。

大地が唸り声を上げて大きく揺れた。

ヨムルンガルド結界 が暴れているのか？

いや、違う。

アスファルトの地面を吹き飛ばしながら地の底から這い出た頭。

リトルリヴァイアサンだ。

長い二本の髭を触覚のように動かし、リトルリヴァイアサンは辺りの様子を窺っている。

巨大な口を蛇のように開けてリトルリヴァイアサンが慧夢に襲い掛かる。

「ボクを殺ろうなんて、あつたま悪いねキミ」

慧夢の両手から六本の妖糸が放たれた。だが、斬るのではない。

妖糸はリトルリヴァイアサンの躰に巻き付いた。だが、拘束するためでもない。

急に大人しくなったリトルリヴァイアサンの頭部に慧夢は飛び乗った。

「さあ、出発だ！」

慧夢を乗せたリトルリヴァイアサンが地面を這いはじめた。傀儡士としての慧夢が見せた技。リトルリヴァイアサンを自らの乗り物としたのだ。

慧夢を乗せたリトルリヴァイアサンが住宅街を激走する。奇妙な乗り物を取り回す者が多いマドウ区でも、リヴァイアサンの幼生を乗り回すのは前代未聞だろう。

「全身に感じる風の心地よさ、最高だ！」

上機嫌になりながら慧夢は大空を見上げた。恵みの太陽が少しずつ翳りはじめている。世界が黄昏に染まる時が来ようとしていた。前方に視線を戻した慧夢は目を細めて訝しげな顔をした。

最初は帝都の追っ手かと慧夢は思った。

だが、違うようだ。

道路の真ん中に立つ赤黒い影。

リトルリヴァイアサンは構わず影を轢き殺そうとした。

慧夢が歓喜に打ち震える。

「キミに逢いたかった紫苑！」

赤黒い影が放った輝線が道路の上を駆け抜けた。

「紫苑は死んだ、俺は呪架だ！」

鳥類のような甲高い絶叫があがる。リトルリヴァイアサンが頭を落とされた鳴き声だった。

驚異的な生命力を持つリトルリヴァイアサンは、頭だけになっても呪架に牙を剥いて飛び掛ってきた。

呪架の放った輝線がリトルリヴァイアサンの頭部に奔る。

重い音を立てて地面に落ちた頭部は左右に割れた。どんな驚異的な生命力を持ってしても、脳を半分に裂かれてしまっただけでは死しかないだらう。

「ボクの可愛いペットになんてことを……なーんてね」

慧夢はブロック塀の上に座っていた。

ひよいと軽やかに慧夢は塀から飛び降り、無防備な姿を呪架に晒して立った。

「ボクはついに女帝の呪縛から解放されたんだ。ボクらが戦う理由はどこかにあるかい？」

「……ある。おまえのせいでお母さんは戻らぬ人になったんだ！」

呪架の叫びを聴いて慧夢は難しい顔した。

「あのときの……ボクの一撃で母さんは死んだのかい？」

「……………」

呪架は無言のまま答えなかった。ただじつと慧夢の顔を睨みつけている。恨みの込められた憎悪の眼差し。

復讐の時が来た。

血を分けた双子だとしても、呪架の心は変わらない。

呪架の手から妖系が放たれた。速さも、威力も、孕む鬼気も前とは比べ物にならない。生まれ変わった呪架の業を慧夢は目の当たりにした。

だが、慧夢の業は真物だ。

呪架の妖系を軽くあしらい、慧夢は妖系の雨を降らせた。

剣山を横にしたように慧夢から放たれる妖系の猛撃。計り知れない妖系が放たれているように見えるが、一度に放っているのは六本の妖系。それを連続して放っているのだ。

迎え撃つ呪架もまた六本の妖系を同時に放ち応戦する。

いつの間にも呪架が自分の足元まで迫っていたのか。そう考えると慧夢は心の底から身を振るわせた。総毛だった思いは、歓喜。

「強くなったね、紫苑……いや、呪架！」

「おまえを殺すために」

呪架は片手で慧夢に攻撃を仕掛けつつ、残った手で宙を切り裂いた。

闇色の裂け目から怒号が聴こえる、怒号が聴こえる、怒号が聴こえる。闇はこの上なく怒り狂っていた。

慧夢も 光 を呼び覚ます。

光色の裂け目から鎮魂歌が聴こえる。闇 を鎮めるための静かな唄声。

鬼神の形相で呪架が咆える。

「喰らえ！」

妖艶に微笑みながら慧夢が謳う。

「甘美なる世界へ招待するよ」

膨大なエネルギーを孕みながら 光 と 闇 が激突した。吹き荒れるエネルギー風に呪架と慧夢は後方に吹き飛ばされた。

体勢を整えようと呪架は足を捌いて躰を止めた。そのまま次の行動に出ようとしたとき、大きな爆発が起きた。

光と闇の粒子が硝子片のように渦巻きながら舞い、爆撃は住宅街の一角にクレーターを掘った。

爆発の衝撃で道路に背を付いていた慧夢は見た。

ミサイルが凄まじい轟音を立てて空を飛空していた。

慧夢はすぐさま立ち上がり、ミサイルを追って後方の空に目を遣った。

ミサイルは上空を飛翔していた翼竜と激突し、空中で大爆発を起こして煙雲の渦をつくった。

「いよいよ帝都も終焉を向かえそうだね」

笑いかける慧夢に呪架は妖系を放ちながら叫ぶ。

「俺は世界の破滅を望んでる！」

「ボクはカミサマになりたい。狂った世界をぶっ壊して、新しい世界を創るんだ。ステキだろ？」

慧夢は呪架の妖系を躲し、天に輝く魔法陣を描いた。

光の傀儡士が召喚を魅せるのか！

だが、裏切られた。

宙に描かれた魔法陣が刹那にして八つ裂きにされたのだ。

なにが起きたのか理解できなかった。特に慧夢は啞然と立ち尽くした。

呪架の瞳は慧夢の後方に迫っている帝都警察を映した。

しかし、それよりも強烈プレッシャーが迫っている。

慧夢の瞳は呪架の背後に鮮やかな紅を映した。

白い仮面の主ダーク・シャドウ。

「廃滅の宴に相応しい場所に案内しよう」

ダーク・シャドウの放った妖系が呪架と慧夢の肢体を一瞬にして拘束した。

「なにしゃがる！」

呪架が叫んだ。口は動かせても、躰は完全に動きを封じられてい

る。こんなにも簡単に捕らえられてしまうとは、油断ではなく力の差を呪架は感じた。

ダーク・シャドウは空間を裂き、『向こう側』へのゲートを開く。

そして、拘束されていた呪架と慧夢は妖糸に引きずられ、ゲートの奥へと姿を消してしまったのだった。

第4章 光に潜む闇（6）

蒼白い夜の世界が広がっていた。

生臭い黒土が広がる大地を冷たい月が煌々と照らしている。生命は寝静まっているのか、死んでいるのかわからない。この世界を包み込んでいたのは静寂だった。

その静寂を壊す呪架の叫び。

「なんで！」

ダーク・シャドウの傍らにいる少女の姿を見てしまった。

傀儡エリスの姿がそこにはあったのだ。

ダーク・シャドウに腕を掴まれ、必死になって逃げようとしているエリス。

「離して、離して！」

嫌がるエリスを助けようと呪架が駆け寄ろうとしたが、それは呪架の躰を掠めたダーク・シャドウの妖系に制止させられた。

「おまえの戦うべき相手は私ではない」

無機質な仮面が向いた先にいるのは慧夢だった。

「他人に踊らされてる感じでイヤだな」

そう言いながらも慧夢はストレッチで躰を解していた。

この世界に連れて来られたときに、呪架と慧夢を拘束していた妖系は解かれていた。

二人のために与えられた戦いの舞台。

誰にも邪魔をされない死闘。それはどちらか一方の死を持って終結する。

ダーク・シャドウは白い仮面を投げ捨てた。

「この戦いは素顔で見守る義務がある」

仮面の下から現れた険しい麗人の顔を見て慧夢は微笑んだ。

「やっぱりネ、生きてたんだ……父さん」

その言葉を聞いた呪架の脳に電撃が走った。

呪架は悟ってしまった。肉体は死んでいた。父　　愁斗は自分と同じ傀儡に身を墮としていたのだ。

はじめて見る父の顔に呪架は複雑な想いを交差させた。母と自分を残して消えた父。悲しみなのか、憎しみなのか、呪架は自分の感情がわからなかった。

ただ　　なぜこんなことをするのか、わからなかった。

「……お父さん……わからないことが多すぎる……なんでわたしたちを置いて、お兄ちゃんを連れて姿を消したのか……」

「生まれる前から、おまえたち双子は呪われていた」

沈痛な面持ちで愁斗は声を絞り出した。

呪架はエリスからなにも聞かされていなかった。もしかしたら、エリスも知らなかったのかもしれない。

愁斗に育てられた慧夢もなにも聞かされず、ただ傀儡士としての技を叩き込まれた。

生まれる前から呪われていたとはいったい？

愁斗が淡々と語りはじめる。

「元凶は僕の父にあるが、新たな呪いを君たちに背負わせたのは僕の罪だ。生まれてくる双子は殺し合う運命にあると予言されていたんだ」

ではなぜという疑問を呪架がぶつける。

「俺たちをこんな場所に連れて来たのはなんでだ、俺らを戦わせるためだろ！」

「僕が運命に抵抗しなかったと思うのかい。君たち二人は傀儡士になると予言されていた。二人ともに技を教えないこともできたが、傀儡士としての業を後世に残す必用もあった。だから敢て僕は慧夢にしか技を教えなかった。なのに君は覚醒たんだ傀儡士として……」

それが生まれたばかりの双子が引き離された原因だった。

運命はさらに悲劇へと向かった。

「慧夢は帝都の手に墮ち、紫苑は帝都に牙を剥き、二人は争う結果となった。僕は運命に逆らうことを諦めた。これは僕に与えられた

罰でもあるんだ、愛した人を裏切った代償」

そう語って愁斗は視線を落とした。

今からでも二人の戦いを止めることはできるはずだ。なのに愁斗は疲れ果てた老人のように動こうとしなかった。彼は心底から運命を変えることは不可能だと痛感しているのだ。

慧夢はすでに運命を受け入れていた。

「ボクは今の状況を楽しんでるからいいよ。強い者と戦えるなんて感じちゃうだろ。つい最近まで顔も知らなかった妹に思い入れなんてないからね」

しかし、呪架はここに来て心が揺れていた。

慧夢を血の繋がった双子だと意識しはじめてしまっていたのだ。

この場所には皮肉にも家族が揃ってしまっている。

幼い心に返ってしまったエリスの前で、血で血を洗う争いをできるのか。

エリスは静かに愁斗の腕に抱きついていている。記憶を失い幼子になっていたとしても、なにかを感じているのかもしれない。とても哀しそうな瞳をしているのだ。

呪架は構えた。

ここで戦わなければ生きる意味を失う。けれど、戦いの果てにも生きる意味が残っているのか、それは呪架にもわからなかった。

惑う呪架の頬を慧夢の妖系が掠めた。

「今のが戦いの合図だよ。ボクを楽しませてくれることを期待してるからねっ?」

「望むところだ!」

本当に自分は戦いを望んでいるのか?

エリスの黄泉返りが失敗に終わったのは慧夢のせいだ。それによって呪架は激情と怨嗟に駆られた。

今は……呪架は慧夢に渾身の一撃を放つ。

一本の妖系に全神経を注ぎ放った一撃を慧夢は軽々と躲した。

「殺しの一手は遊びの中に混ぜて使うものだよ」

慧夢の放った妖系が呪架の足元を掠め、飛び上がった呪架に二本目の妖系が襲い掛る。

空中では自由に体勢を動かすことができず、呪架は妖系を放って迫り来る妖系を相殺した。だが、二本目の妖系は囷だったのだ。

六本の妖系が同時に呪架に襲い掛かり、二本目を防ぐために使われた手は次の動きに入れず、残った手から三本の妖系を放つことしかできない。

三本の妖系が呪架の躰を切り裂いた。

腕と胸を軽く薙がれ錆色の液体が滲み出した。香りも血とよく似ているが、おそらくまがい物だろう。ヒリヒリするような痛みも感じた。ただの傀儡ではないと呪架は己を感じた。

呪架の製作者は真物の人間を創造するつもりで傀儡を創ったのだ。想いがこもっていないければ、こんな精巧な傀儡はつくれない。

視線だけを動かし呪架は愁斗の顔を見た。翳る顔から表情を読み取ることではできなかった。

風が飄々と鳴り黒土の腐臭が舞い上がった。

土を踏みしめながら呪架が疾走する。

呪架の猛撃が開始された。

輝線が煌きを迸らせ連撃が繰り出され宙を奔る。

相手の妖系を注視して慧夢も神速で技の応酬をする。

熾烈な死闘の中で慧夢の首筋が微かな血の筋を滲ませる。

呪架の赤黒いローブが徐々に刻まれていく。

刹那でも集中力を切らせれば、妖系は死神の鎌と化して首を刎ねる。

濃密な鬼気が噎せ返るほどに充滿していた。常人がこの場に居合わせれば失神しかねないほどだ。

慧夢の額から零れ落ちた汗が煌くと共に妖系によって切断された。妖系に切られ四散した汗が再び妖系によって切られる。紙一重の攻防が繰り広げられているのだ。

魔鳥のように舞った呪架が地面に着地したとき、その足がぬかる

んだ黒土に攫われてしまった。

眼を剥きながら躰のバランスを崩した呪架に、容赦ない妖系の嵐が吹き付ける。

「ぐッ！」

歯を食いしばった呪架の左腕が回転しながら宙を舞う。

切断された痕から大量の紅い液体が爆発したように噴出し、黒土を赤黒く染めて泥濘を形成した。

すぐさま噴出す液体が止まったのは傀儡としての仕様だろう。

本物の肉体が受けた傷ではないのに、酷い痛みで呪架は襲われていた。戦いにおいて傀儡が痛みを感じるなど非合理的である。なのに敢て痛みが残されていた。

腕を切られた呪架を見る慧夢の眼差し優越感を湛えていた。

「もちろんまだやるよね？」

「おまえが死ぬまでなッ！」

怯むことない呪架の闘志は紅蓮に燃えていた。

「そうでなくちゃ」

艶やかに笑う慧夢の表情がとても残酷に映る。

慧夢が三本の妖系を放ち、呪架も残った腕から三本の妖系を放つ。これで互いの攻撃は相殺された。

しかし、慧夢には残りの腕がある。

宙に描かれる魔法陣。

慧夢は呪架に攻撃を仕掛けると共に、残る腕で華麗な魔法陣を描いていたのだ。

魔法陣が激しい閃光を放った。

「光の遊戯に魅せられたい！」

慧夢の高らかな宣言に合わせて魔法陣の『向こう側』から、歌うように清らかな それ の声 が心を震わせた。

それ の息吹は世界に花の香を運び、魔法陣の『向こう側』から翅の生えた乙女が顔を魅せた。

七色に輝く蝶の翅を持つ乙女は愛くるしい笑顔を浮かべた。『フ

エアリー』と称するのが適切かもしれない。

『フェアリー』は死の黒土を自由気ままに飛び交い、通った大地に色取り取りの花を咲かせていった。

瞬く間に辺り一面は芳しい花畑となり、夜だった世界に光が差しはじめた。

絶景ともいうべき世界に生まれ変わったのだ。

しかし、それは偽りだった。

花々が次々と枯れて逝く。

差しはじめていた光もどこかに消えうせ、夜の世界を紅い月華が照らした。

そして、『フェアリー』にも異変が起きはじめていた。

愛くるしい顔の下でなにが蠢いている。皮膚を喰い破って湧き出てくる蛆。乙女の顔は髑髏と化してしまった。

それを見て慧夢は艶笑していた。

「ボクは光属性に躰をつくり変えられた。けどね、心は深い闇のまま。光が正義だと誰が決めた？ ボクが司っているのは偽善さ！」

慧夢は薔薇色の背徳を背負っていたのだ。

『フェアリー』の手は蠅螂のような大鎌に変貌し、髑髏の形相は死神を思わせた。

耳を塞ぎたくなるような絶叫をあげて『フェアリー』が呪架に襲い来る。

「死神が俺の命を狩りに来たか……」

邪悪な笑みを呪架は浮かべた。

刹那、呪架の手から放たれる妖系の戦慄。

大鎌と妖系が一戦交える。

勝ったのは大鎌だった。

けれど、呪架は動じていない。むしろ嗤っていた。

呪架の少し前方の地面が妖しく輝いた。

魔法陣だ！

呪架は慧夢に気付かれぬように、地面に魔法陣を描いていたのだ。

おぞましい それの呻き声が世界に木霊し、怯えあがった『フェアリー』の動きが凍りついてしまった。

それの呻き声は大気を振動させ、花枯れた死の荒野を震えさせ、おぞましい死をこの世に解き放った。

巨大な黒馬に似た怪物に跨る異形。黒く逞しい筋骨隆々の巨軀から伸びる太い腕の先には、投げ槍と蠍の尾でできた鞭を持っている。そして、皮膚の全くない頭蓋骨には王冠が戴いていた。

異界のゲートを守っていると云われる者それが死だ。黒馬が嘶き前脚を高く上げ、死が槍を『フェアリー』に向けて投げつけた。

『フェアリー』の背を抜けて貫通する槍。

死の雄叫びと『フェアリー』の絶叫がシンクロした。

蠍の鞭が『フェアリー』の首を刎ねた。

地に転がった髑髏の頭部に湧いていた蛆が干からびて逝く。『フェアリー』が死に殺された。

慧夢は実に楽しそうだった。

「ボクもそんな子を召喚したいケド、ボクはこんなものしか召喚できないよ」

慧夢はすでに新たな魔法陣を宙に描いていたのだ。

魔法陣の『向こう側』でそれは死を慈しんでいた。

黄金の風が世界に吹き込み、魔法陣から巨大な純白の翼が飛び出した。その巨大さは他を圧倒しており、死の巨軀を遙かに凌ぐ大きさだった。

翼が大きくはためき、両方の翼が死を優しく包み込んだ。翼が死を呑み込んでしまったという方が正しいかもしれない。

死を呑み込んだ翼は魔法陣に『向こう側』へと還っていく。呪架よりも慧夢が召喚においては優れていたようだ。

両腕を広げて慧夢は歓喜に打ち震えた。

「どうだい、カッコイイだろ？」

艶やかに嗤う慧夢は魔の手が迫っていることに気付いていなかった

た。

『純白の翼』が還った魔法陣はまだ消滅していなかった。まだ『向こう側』と『こちら側』が繋がっている。

魔法陣の『向こう側』から蠍の鞭が放たれ、広げていた慧夢の左手首を切り飛ばしたのだ。死の最後の抵抗だった。

慧夢は言葉では表せぬ狂気の絶叫を発した。

鮮血が噴出す手首を妖糸で縛り上げ止血し、髪の毛を汗でぐっしよりと濡らし、玉の汗を地面に溢し続けた。

「ボクの……ボクの手がアアツ！」

慧夢の顔は幽鬼のように蒼白く変わっていた。

互いに腕と手首を失った呪架と慧夢。死闘は更なる苦境に進もうとしていた。

対峙する二人の間に死の風が吹き抜けた。

妖糸を放とうと構えたのはほぼ同時だった。

しかし、邪魔が入った。

「我が子が殺し合う姿はもう見たくない！」

少女の叫び。それは記憶が欠けているはずのエリスの叫びだった。だが、もう遅かった。

ひとりは妖糸をすでに放っていたのだ。

戸惑いながらも呪架の手からは輝線が奔っていた。

血の薔薇が花びらを散らせた。

残っていた慧夢の腕が地に堕ちた。

両膝を地面に付いた慧夢にエリスが駆け寄る。

「慧夢！」

それは母の悲痛な叫びだった。

エリスは我が子を胸に強く抱いた。

「死なないで慧夢！」

「これが母さんの温もりか……ボクも母さんと暮らしたかったよ」

慧夢の憔悴した瞳からは一筋の涙が零れ落ちていた。

すぐに駆け寄って来た呪架は無我夢中で慧夢の傷口を妖糸で止血

していた。今しがたまで殺そうと戦っていた相手なのに、呪架は悲しくて胸が張り裂けそうだった。

「お兄ちゃん……ごめんなさい……」

「あははは、今さら謝られるなんてね。でもさ、お兄ちゃんっていい響きだよ。もつと普通の形で紫苑とは出逢いたかったよ」

慧夢は呪架との死闘で大きな嘘をついていた。

父から妹の存在を聞かされたときから、慧夢は顔も知らない妹に想いを馳せ、心から愛していたのだ。そして、妹は傀儡士とは無縁の生活を送り、母と幸せに暮らしていると夢を見ていた。

慧夢は思わず苦笑していた。

「ボクは誰にも愛されていなかった。父さんも母さんも、愛していたのはキミだ。紫苑なんて名前をつけられたのが証拠だよ」

紫苑は愁斗の母の名前。呪架と同じように愁斗は母を心から愛していた。だから、娘の名前に紫苑とつけたのだ。

エリスは慧夢を抱きしめて肩を震わせていた。泣きたいのにこの躰では涙が流せなかった。

「自分の子供を愛さないはずがないでしょう。愁斗に連れられたあなたが、どんなに苦しい修行をさせられているのか、想像しただけで毎晩泣いたわ」

「父さんはスパルタだから嫌いだよ」

悪戯に慧夢は笑ったが、顔色は優れずに徐々に生気を失っていた。呪架は死に逝こうとしている兄を見捨てることができず、遠くに立ち尽くしている愁斗に顔を向けた。

「お兄ちゃんを助けて！」

涙や鼻水で顔をぐしゃぐしゃにして呪架は悲痛に叫んだ。

慧夢も傀儡になれば助かることができる。

しかし、慧夢の想いは違った。

「ボクは疲れたから眠りたい……今すぐにでも殺して欲しい……」

呪架とエリスが反対の言葉を泣き叫ぶよりも早く、愁斗の手が動いていた。

無情の煌きが慧夢の首を刎ねた。

無機物のように地面に転がる慧夢の首を見て呪架は絶叫し、血飛沫を全身に浴びたエリスは絶句して気を失った。

怨嗟の念が呪架の心を激しく締め付けた。

「どうして殺したッ！」

狂気に操られるままに呪架は愁斗に飛びかかった。

「慧夢の最期の望みだった」

「クソツタレ！」

泣き叫ぶ呪架の頬が愁斗の拳によって抉られた。

地面に横転して転がる呪架。

傀儡士が大事な手で人を殴ったのだ。

頬を押さえて今にも噛み付かんばかりの呪架に対して、愁斗は無言を貫いて紅いインバネスを翻した。

空間を切り裂き別の世界へ消えようとする紅い背中に、呪架は渾身の一撃で妖系を放った。

振り返った愁斗の手から放たれる輝線が呪架の妖系を切り裂き、勢いを衰えさせないまま呪架の手首を落とした。

愁斗はとても哀しい表情をしていた。

そして、再びインバネス翻し空間の裂け目の中へと姿を消した。

残された美しく儂い紅い残像。

慧夢の流した血の海に溺れるエリスの躰を、呪架は不自由な腕で抱き起こした。

朱に染まったエリスの躰を抱く呪架の心は果てない地獄に墮ちた。

その嘆きを反映するように、夜の世界はいつしか朱空に……。

エピローグ

古い屋敷の一室で幼いエリスが呪架の髪を櫛で梳いていた。鏡台に映る二人の姿はどこか物悲しい。

呪架の瞳は空虚に近かった。その瞳にただひとつ映されているのは、幼いエリスの姿だけ。

「ママあ、呪架ちゃんはいつになったら元気になるの？」

幼い声でエリスはドアの傍に立っていたセーフィエルに尋ねた。

「わからぬ……」

「早く呪架ちゃんのお病気治るといいなあ。治ったらいっしょにお外で遊ぼうね」

エリスは呪架の顔を覗きこんで無邪気に笑った。

おぼつかない腕で呪架はエリスを抱きしめた。

呪架はクツクツと嗤っていた。

精神を崩壊させた呪架と痴呆状態のエリスが育む歪んだ愛。

セーフィエルが呪架を発見したとき、すでに呪架の精神が病んでいた。そして、記憶を取り戻したと思われたエリスも、目を覚ましたときには幼いエリスに戻ってしまった。

匿うようにセーフィエルは二人を引き取り、人の目が届かない場所までひっそりと身を潜め暮らしていた。

帝都エデンがどうなったのか、光の子と闇の子の戦いがどうなったのか、夢幻の住人と化してしまった三人には関係のないことだった。

セーフィエルは二人の子供をただ見守り、深い悲しみを背負って生きていく。

なにも知らないエリスと呪架は幸せなのかもしれない。

傀儡の二人にとって時間は永久だ。

抱き合う親子に背を向けて、セーフィエルは無言で部屋をあとにした。

墮ちる間には深さを知らなかった。
。

エピローグ（後書き）

この作品は単独作品として読めるように書かれています。エデンシリーズや傀儡シリーズを含めた帝都エデンの歴史の一幕です。この話に登場した紫苑や 般若面 のキーワードが、深く結びついている作品は、現存する作品の中では「ダークネス・紅」です。興味のある方はそちらも一度お読みなってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0934e/>

傀儡士呪架 ヴァーミリオン-朱-

2010年10月8日13時50分発行